

ウフタ_Ⅲ遺跡



2002年3月
鹿児島県龍郷町教育委員会



序 文

文化財は、我々の祖先のたくましい想像力とゆるまざる努力によって生み育てられた貴重な文化の証であり、次の時代に伝え継承されるべき財産であります。

本報告書は県営一般過疎基幹農道整備事業（赤尾木～手広間）に伴って龍郷町教育委員会が平成7年10月に発掘調査を実施した「ウフタⅢ遺跡」発掘調査報告書です。

調査の結果、遺跡は砂丘地に営まれた縄文時代晚期から弥生時代にかけての生活跡でありました。遺跡の保存状態は概ね良好で、突起に穴を穿ち紐を通して特殊な土器をはじめ石皿・磨石・石斧等の石器、亀や魚の骨、骨格器、サザエやゴホーラ等の遺物が多数出土しました。さらに砂丘に造られた石積み石囲い竪穴住居跡が発見され、多くの成果を得ることができました。これまで、石積み石囲い竪穴住居跡は笠利町宇宿遺跡や沖縄県与那城町仲原遺跡等で報告されています。

これらの発掘調査の成果は、奄美・琉球弧における縄文から弥生時代の文化、考古学、民俗学研究の解明のためにも貴重な資料であるとともに、埋蔵文化財に対する関心や文化財保護への意識が深められることを願うものであります。なお出土した遺物は、町で保管して文化財の啓発に活用し、永く後世に伝えたいと思います。

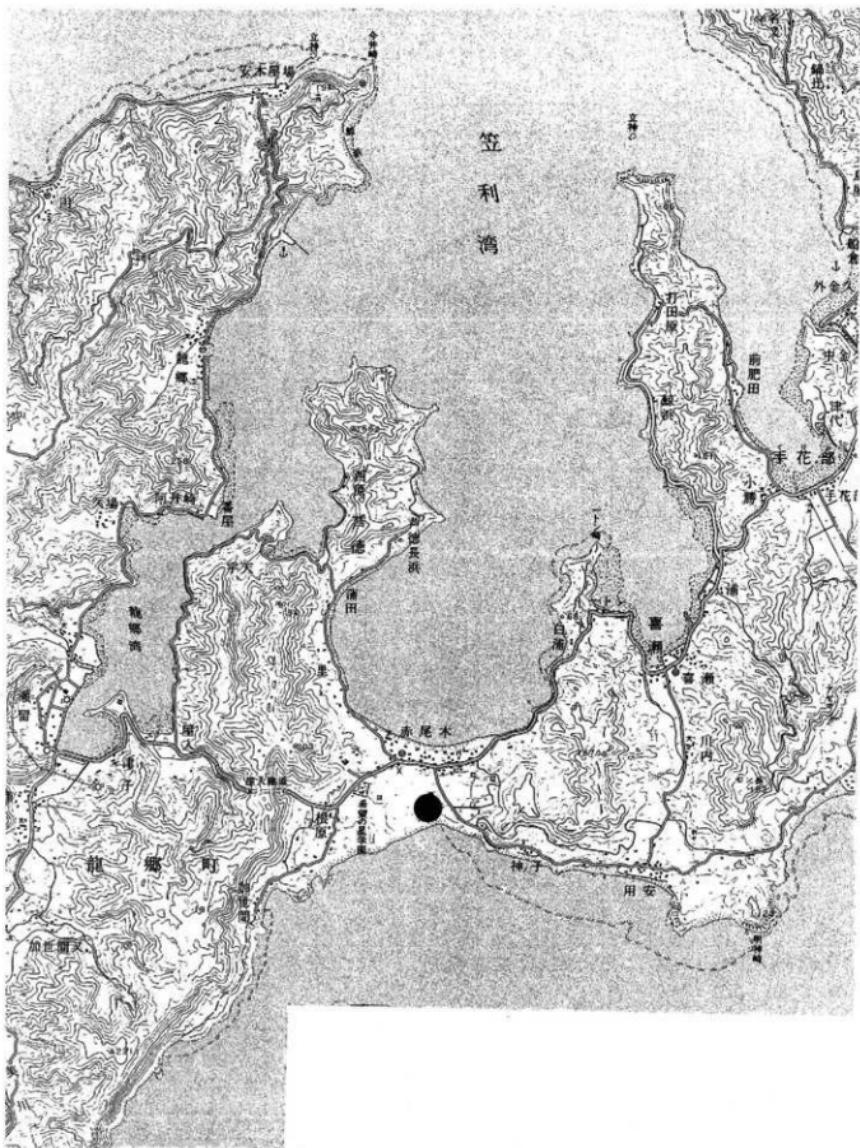
本報告書発刊に当たり、発掘調査や整理報告書作成に至るまでご尽力を賜りました県教育庁文化財課及び県立埋蔵文化財センター、笠利町教育委員会、大島支庁土地改良課、発掘作業・整理作業に携わっていただきました関係者の皆様方に深く感謝の意を表します。

平成14年3月

龍郷町教育委員会

教育長 山田 至

笠利湾



ウフタⅢ遺跡位置図

報告書抄録

ふりがな	うふたⅢいせき							
書名	ウフタⅢ遺跡							
副書名	一般過疎基幹農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	1							
シリーズ名	龍郷町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)							
シリーズ番号								
編集者名	青崎和憲・松村智行							
編集機関	龍郷町教育委員会							
所在地	〒894-0104 鹿児島県大島郡龍郷町浦110 TEL 0997-62-3111							
発行年月日	西暦2002年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
ウフタⅢ遺 跡	鹿児島県大島郡 龍郷町	市町村	遺跡番号	27°41'28" ~ 27°41'48"	128°56'31" ~ 128°57'19"	19951031 ~ 19951125	300m ²	一般過疎 基幹農道 整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
ウフタⅢ遺 跡	貝塚	縄文時代～ 弥生時代	貝塚、石圓い竪穴住居	土器、石器、貝製品、骨角器				

例　　言

1. 本報告書は、龍郷町教育委員会が、県農政部大島支庁、県立埋蔵文化財センターの協力を得て、平成7年度に発掘調査を実施した一般過疎基幹農道整備事業に伴う龍郷町埋蔵文化財調査報告書である。
2. 調査の組織は調査の経過の中で記した。
3. 本書で用いたレベル数値は、すべて海拔絶対高である。
4. 本書の執筆は次の通りである。
第Ⅰ・Ⅲ章・まとめ－青崎和憲
第Ⅱ章－松村智行
第Ⅲ章第2節2(2)－桑波田武史
貝類の分析－行田義三
動物遺体－西中川駿・小山田和央
5. 出土遺物は通し番号とし、押印番号、図版番号は一致する。
6. 分析資料（貝の分析）については、行田義三（県立博物館非常勤）、（獸骨の分析）については、西中川俊（鹿児島大学農学部長）の玉藻を賜った。
7. 出土遺物、写真等資料は、本報告書刊行後、龍郷町教育委員会が保管・収蔵し、活用する。

目 次

序 文	
ウフタⅢ遺跡位置図	
報告書抄録	
例 言	
第Ⅰ章 調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査の組織	1
第3節 日誌抄	2
第Ⅱ章 遺跡の位置及び環境	5
第Ⅲ章 調 査	7
第1節 調査の概要	7
第2節 遺構・遺物	7
1 遺構	7
2 出土遺物	15
第3節 石積み石圓い竪穴住居	39
ま と め	44
自然遺物分析	
(1)貝類の分析	79
(2)動物遺体	93

挿 図 目 次

第1図 ウフタ(Ⅲ)遺跡周辺地形・調査地点	6	第14図 出土土器(塊形土器)	23
第2図 周辺遺跡	4	第15図 出土土器(浅鉢形土器)	24
第3図 グリッド・遺構遺物配置図	8	第16図 出土土器(底部)	25
第4図 遺物出土状況	9	第17図 出土土器(底部)	26
第5図 土坑実測図	10	第18図 出土土器(有文刻目文土器)	28
第6図 土坑1, 3号出土遺物	12	第19図 出土土器(土盤形土製品)	29
第7図 土坑4号出土遺物	13	第20図 出土石器(石鏃等)	31
第8図 土坑5号出土遺物	14	第21図 出土石器(磨石・磨製石斧他)	33
第9図 出土土器(鉢形土器)	16	第22図 出土石器(石皿)	34
第10図 出土土器(鉢形土器)	17	第23図 出土遺物(貝製品)	36
第11図 出土土器(鉢形土器)	19	第24図 出土遺物(骨製品)	38
第12図 出土土器(鉢形土器)	20	第25図 石積み石圓い竪穴住居	41
第13図 出土土器(壺形土器)	21	第26図 住居内出土遺物	43

表 目 次

表 1 周辺遺跡地名表	6
表 2 石器観察表	30
表 3 刃片石器石材別重量表	32
表 4 磨石・叩石観察表	35
表 5 貝玉計測表	37
表 6 貝加工品計測表	37
表 7 骨角器計測表	38

図 版 目 次

巻頭カラー 石圓い竪穴住居	
図版 1 調査地点外	49
図版 2 土坑検出状況	50
図版 3 貝出土状況外	51
図版 4 遺物出土状況	52
図版 5 獣骨出土状況外	53
図版 6 石積み石圓い竪穴住居跡	54
図版 7 石積み石圓い竪穴住居跡	55
図版 8 石積み石圓い竪穴住居跡	56
図版 9 石積み石圓い竪穴住居跡	57
図版10 石積み石圓い竪穴住居跡	58
図版11 石積み石圓い竪穴住居跡	59
図版12 石積み石圓い竪穴住居跡	60
図版13 出土遺物	61
図版14 出土遺物	62
図版15 出土遺物	63
図版16 出土遺物	64
図版17 出土遺物	65
図版18 出土遺物	66
図版19 出土遺物	67
図版20 出土遺物	68
図版21 出土遺物	69
図版22 出土遺物	70
図版23 出土遺物	71
図版24 出土遺物	72
図版25 出土遺物	73
図版26 出土遺物	74
図版27 出土遺物(土盤型土製品)	75
図版28 出土遺物(石器)	76
図版29 出土遺物(貝玉、骨角器他)	77
図版30 出土遺物(石圓い竪穴住居跡出土遺物)	78
図版31 出土遺物(貝)	83
図版32 出土遺物(貝)	84
図版33 出土遺物(貝)	85
図版34 出土遺物(貝)	86
図版35 出土遺物(貝)	87
図版36 出土遺物(貝)	88
図版37 出土遺物(貝)	89
図版38 出土遺物(貝)	90
図版39 出土遺物(貝)	91
図版40 出土遺物(貝)	92
図版41 出土遺物(獣骨)	97
図版42 出土遺物(獣骨)	98

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

鹿児島県農政部は、大島郡龍郷町赤尾木において県営一般過疎基幹農道整備事業（赤尾木～手広間）を計画し、龍郷町教育委員会へ埋蔵文化財の有無について照会した。これを受けた龍郷町教委は、農道建設計画路線内にはウフタ遺跡（1982年主要地方道龍郷奄美空港線拡幅工事に伴う熊本大学考古学研究室調査「ウフタⅡ遺跡」）ウギヤウ遺跡などが隣接して所在していることから、その取り扱いについて県教育庁文化財課（以下、文化課）と県農政部と協議した結果、当事業区は、熊本大学が調査したウフタⅡ遺跡と砂丘を挟んだ西側にあたることから、平成6年7月4日～8日にかけて工事計画路線内の埋蔵文化財確認調査を実施した。確認調査はモクマオの樹木が繁茂する防砂・防風林にあたる標高約20mの砂丘部分に2カ所を設定し、深さ約2mまで掘り下げた結果、遺物等は確認されなかった。今後の対応として、農政部へは工事中に遺物等が発見された場合は工事中発見の措置を講ずることとして報告した。

平成7年9月18日、龍郷町教育委員会（以下、町教委）へ基幹農道整備事業予定地の県道との交差点から約50m西側にあたる龍郷町赤尾木ウフタで標高約20mの砂丘を約10m掘り下げた掘削工事中に土器が発見されたとの通報があり、町教委は現地で確認した。翌19日一町教委は県文化課へその旨の報告をし、20日一県文化課職員が現地で事実確認をした。

工事中発見時の状況は、標高約20mの現砂丘を深さ約10m、標高約10mまで緩やかな傾斜でカットして掘り下げて農道を建設する事業であり、一部北・南面はブロック積みの要壁工事もほぼ終わり、遺物は道路面高に近い北側要壁部で発見されたものである。

ただちにその取り扱いについて3者で協議し、試掘調査を実施した。その結果、遺跡は土器発見地点より西に約40mの範囲に広がりをもつ貝塚であることを確認した。遺跡名は「ウフタⅢ遺跡」とした。貝塚は砂丘に形成され、道路工事計画高面より下位に潜るように東側から西側に緩やかに傾斜して残存していた。なお、貝塚は土器や貝が砂とともに混在する混土貝層となり、大島における貝塚遺跡特有の様相を呈する。

さらに試掘調査の結果をふまえ、この遺跡の取り扱いについて、町教委・大島支庁土地改良課・県文化課と協議し、龍郷町教育委員会が調査主体となり、県立埋蔵文化財センターの協力を得て、発掘調査を実施することになった。調査は平成7年10月31日～11月24日までとした。なお、貝塚は周辺の砂丘にも広がることが予想される。工事に伴う発掘調査対象面積約300m²である。

第2節 調査の組織

（発掘調査 平成7年度）

調査主体 龍郷町教育委員会

調査責任者	〃	教育長	田畠 米秀
調査事務担当	〃	社会教育課長	碇山 幾郎
	〃	補佐	牧 智登美
	〃	派遣社会教育主事	斎藤 博

龍郷町教育委員会	社会教育指導員	水野 哲哉
発掘調査担当 鹿児島県教育庁文化課	文化財主事	青崎 和恵
(兼)鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財調査員	松村 智行
鹿児島県立埋蔵文化財センター		(現龍郷町役場)

その他、調査の企画・実施にあたっては県文化財課及び県立埋蔵文化財センターの指導助言をはじめ、大島支庁・笠利町教育委員会(中山清美氏)、名瀬市教育委員会(高梨修氏)の協力を得、発掘調査の作業については地元龍郷町や笠利町の方々の協力を頂いた。なお、調査の指導については、田中哲雄文化庁主任調査官、白木原和美元熊本大学文学部教授、高宮広衛沖縄国際大学教授、河口貞徳県文化財保護審議委員の方々にご指導を賜った。

(整理・報告書作成 平成13年度)

調査主体 龍郷町教育委員会	教育長	山田 至
調査責任者	教務局長	宮田 孝廣
調査事務担当 龍郷町教育委員会事務局	次長兼社会教育係長	前田不二男
担当 当 県立埋蔵文化財センター	第一調査係長	青崎 和恵
整理・報告書作成については、県立埋蔵文化財センターの全面的な協力を得、自然遺物の貝についての分析・執筆は行田義三先生、獸骨については西中川俊(鹿児島大学農学部教授)の玉稿を賜り、出土遺物については池田榮史氏、高梨修氏、橋口尚武氏、石田日出志氏の指導助言を頂いた。		

第3節 日誌抄

10／31(火) 調査対象地は、標高約20mの砂丘を県道の高さまで約10mをカットした掘削工事はすでに終了し、付帯工事も進行していた。遺跡の調査は工事中発見の措置で対応した。調査開始。町教委、町耕地課、埋蔵文化財センター打ち合わせ、調査区は砂丘のため、事前に3面を矢板を設置していた。表土剥ぎ作業。

11／1(水) 遺物包含層層は混貝土層からなる貝塚遺跡である。包含層検出作業。焼土、貝溜り等検出。遺物出土状況平板実測。遺物取り上げ。

2(木) 遺跡は東から西へ緩やかに傾斜した砂丘に位立地する。グリッド設定。遺物出土状況図面作成。遺構と思われる石組遺構を検出された。

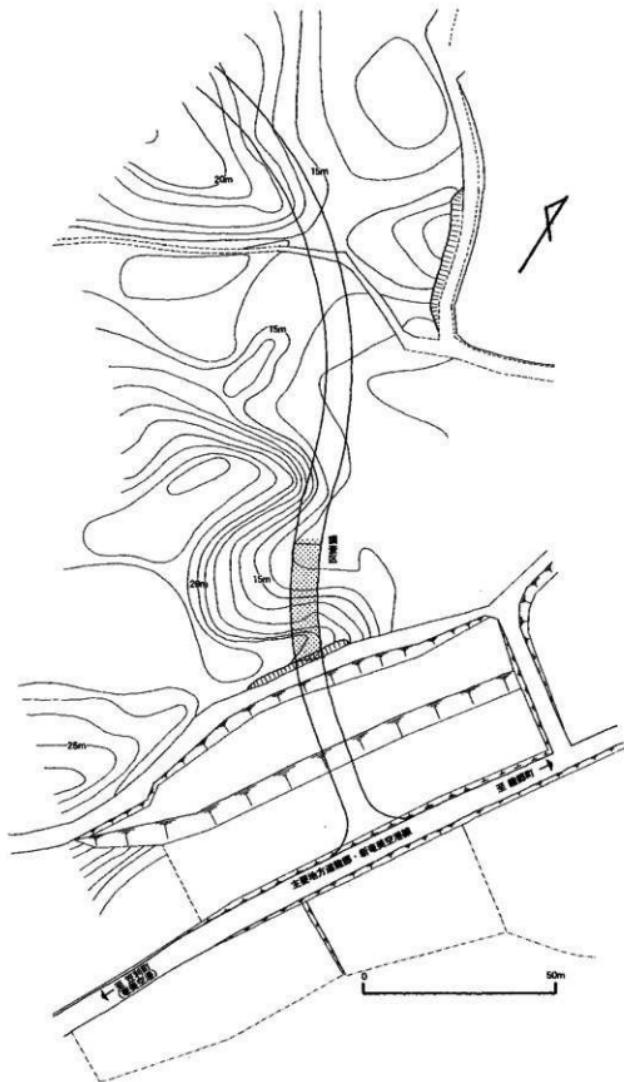
6(月) 貝層の範囲確認のため全面掘り下げ作業。及び石組遺構検出作業。貝層は調査区全体に分布しているが南側に集中して見られる。ベルトコンベアー搬入。鋼矢板補強。グリッド設定のためポイント設置。

7(火) 2m四方でグリッド設定。貝層掘り下げ作業。石組遺構は住居の形態や規模から可能性がある。

8(水) 貝層遺物包含層、石組遺構掘り下げ。写真撮影。

9(木) 石組遺構掘り下げ。北側堀り込み確認。B7区、10層全て取り上げ。

- 13(月) 遺物包含層層掘り下げ。石組遺構（竪穴住居）掘り下げ。亀甲羅出土。写真撮影。
- 14(火) グリッド拡張。土坑検出。凝固剤で獸骨、貝溜り検出。
- 15(水) 遺物包含層掘り下げ。竪穴住居検出作業（積み石遺構である）。平板実測。
- 16(木) 遺物包含層掘り下げ。平板実測。竪穴住居検出作業、床面に焼土検出。
南海日日新聞取材。
- 17(金) 遺物包含層、竪穴住居、土坑検出作業。貝層と竪穴住居切り合い関係を確認した。
写真撮影及び実測作業。赤徳小学校5～6年遺跡見学。
- 20(月) 竪穴住居、土坑掘り下げ。竪穴住居及び貝層実測作業。住居は複合住居である。住
居内から磨製石斧出土。
- 21(火) 土坑掘り下げ。竪穴住居遺物出土状況撮影。遺物平板実測。
笠利町「宇宿貝塚遺跡保存委員会議」のメンバー、田中哲雄（文化庁主任調査官）、
白木原和美（元熊本大学教授）、高宮広衛（沖縄国際大学教授）、河口貞徳（県文化財保
護審議委員）来跡。
- 22(水) 土坑検出作業。竪穴住居実測。白木原先生現地指導。赤徳小中学校見学。
- 23(木) 祝日
- 24(金) 土坑1～4実測。竪穴住居実測。遺物取り上げ。
大島支庁本山氏外2名現地視察。今後の取り扱いについて現地協議。
- 25(土) 遺物取り上げ。竪穴住居実測。遺物包含層の貝層すべて土養袋に取り上げ。
本日で発掘作業終了。



第1図 ウフタIII遺跡数縦地形と調査区

第Ⅱ章 遺跡の位置及び環境

奄美大島北端の笠利半島は陸繫島を呈し、遺跡は笠利半島陸繫部にあたる笠利町との町境、龍郷町赤尾木に所在する。陸繫部は標高約2~10mで、北は笠利湾が迫り、南は太平洋に面して長さ約600mで繋がっている。太平洋沿いの海岸線は、南から吹き上げられて形成された、標高約10~20mの小高い砂丘の丘陵が連なり、丘陵地は北側に傾斜して低地の赤尾木集落、笠利湾へと続く。笠利半島側からは一部琉球石灰岩を基盤とするが大半は砂礫層からなる山峠や海岸段丘を源とする小河川が低地の赤尾木平野を形成する。なお、赤尾木海岸は隕石の発見地で「奄美クレーター」と呼ばれ、南の海岸線は珊瑚礁が発達し、浜辺や珊瑚礁、干潟は南島の伝統的な生活空間でもあった。

赤尾木地区には、半川遺跡・ウフタ遺跡・ウギャウ遺跡・赤尾木保育所遺跡・手広遺跡等が位置する。

主な遺跡を紹介すると、半川遺跡は砂丘遺跡で、土器片や貝類、貝岩製の磨製石斧が発見されている。ウフタ遺跡はウフタⅢ遺跡の東側、県道万屋～赤尾木線沿いの砂丘地に所在。1981年龍郷町を事業主体に熊本大学が発掘調査。条痕文土器、面縄前庭式土器、嘉徳Ⅱ式土器、面縄西洞式土器、夜臼式土器、縄文晩期後半、弥生中期・後期土器、石斧、凹石、石鑿、砥石、スクレイパー等の石器をはじめ、掘り込み遺構が発見された縄文時代後期から弥生時代に相当する砂丘遺跡である。赤尾木保育所遺跡は類須恵器、兼久式土器、貝小玉などが採集されている。ウギャウ遺跡は、赤尾木地峡部のほぼ中央付近から西部にかけての砂丘上の畑地及び防風林地帯から面縄西洞式系土器、磨製石斧、磨石等が採集されている。手広遺跡は町道大美～赤尾木線の手広橋付近の太平洋沿岸に形成された小規模な海岸砂丘地に位置する。昭和54年に町名称天然記念物指定。発掘調査は昭和51、60年に龍郷町、熊本大学によって実施された。遺物包含は第1～第7文化層からなり、遺構には弧状配列ピット（第1文化層～兼久式に伴う平地住居跡）、石組遺構（第3文化層～3基のうち1、2号は住居址を想定、第6文化層～1基）、集石遺構（第3、第7文化層）、遺物としては第1文化層（兼久式土器）、第2文化層（刻目凸縦文類似土器、板付類似土器、長頸壺形土器、外耳土器など）、第3文化層（リボン突起付き土器、長頸壺形土器、丹塗研磨壺形土器等）、第4文化層（宇宙上層式土器、喜念I式土器条痕文土器、黒色研磨土器）、第6層（面縄西洞式土器、浅鉢形土器、壺形土器、外耳土器）、第7層（嘉徳I・II式土器）など、弥生時代前期から縄文時代晩期・後期後半の砂丘遺跡である。その他、石器、貝製品、骨製品などが出土した。ウフタⅡ遺跡は、ウフタⅢ遺跡の東側の主要地方道龍郷奄美空港線沿いの砂丘地に位置する。1981年・1995年に地方道の拡張工事によって発掘調査が行われた。面縄西洞式、嘉徳式土器、下山田タイプ、兼久式土器、類須恵器、貝等が出土しているが、小規模な遺跡で遺物散布地であった。

文献 「手広遺跡」（概報） 研究室活動報告20 熊本大学文学部考古学研究室 1986年

「ウフタ遺跡」 熊本大学考古学研究室 1982年

「ウフタⅡ遺跡」 龍郷町教育委員会 1995年

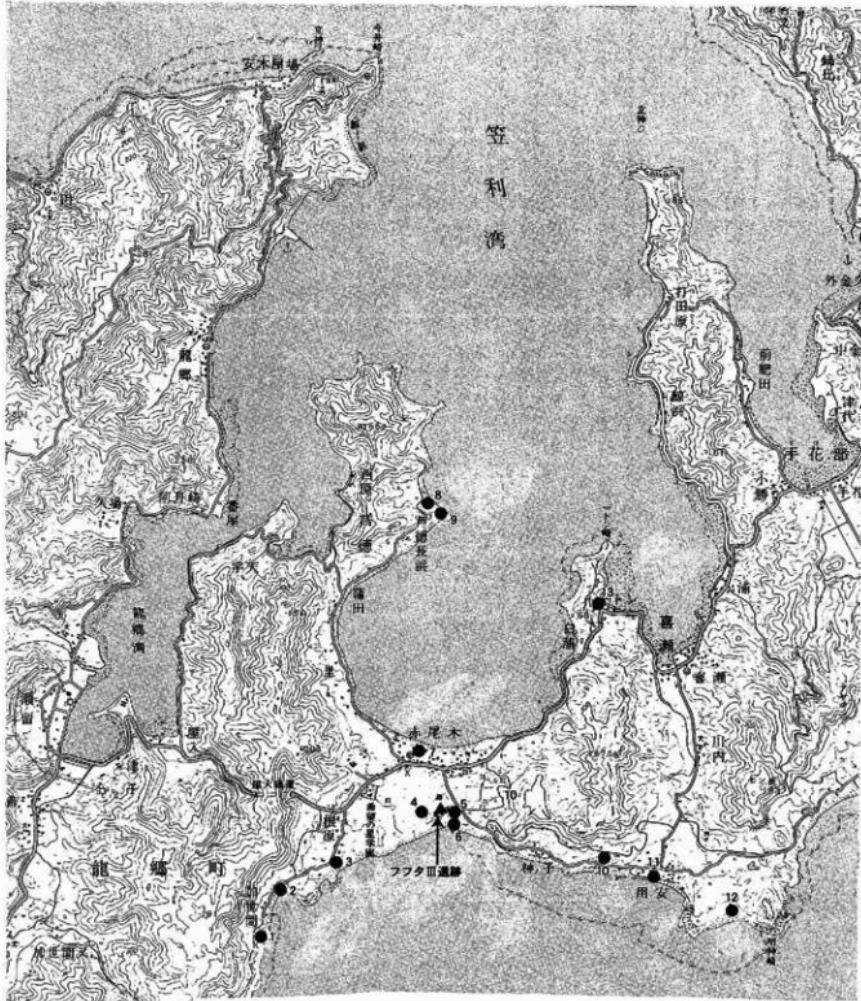


表1 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	番号	遺跡名	所在地	地形	時代
1	コシマ	龍郷町加世間		歴史近世	8	世連	笠利町芦徳	砂丘	不明
2	手広	龍郷町赤尾木千広	砂丘	縄文古墳	9	世連Ⅱ	龍郷町芦徳	砂丘	縄文
3	野原	龍郷町赤尾木野原	砂丘	古墳～	10	淡城	笠利町用安	丘陵	中世
4	ウギヤウ	龍郷町赤尾木	砂丘	縄文	11	用安	笠利町用安	砂丘	縄文弥生
5	ウフタⅠ・Ⅲ	龍郷町赤尾木	砂丘	縄文弥生	12	明神崎	笠利町用安	砂丘	縄文弥生
6	半川	龍郷町赤尾木	砂丘	不明	13	サウチ	笠利町善瀬	砂丘	弥生
7	赤尾木保育所	龍郷町赤尾木	砂丘	不明					

第2図 周辺遺跡

第Ⅲ章 調査

第1節 調査の概要

遺跡は、奄美大島本島の最北端、笠利町との町境、赤尾木集落の南側にあたり、南側海岸砂丘後背地にあたる大島郡龍郷町赤尾木ウフタに位置する。当地は奄美本島と笠利半島を繋ぐ、南は太平洋、北は赤尾木湾に面し、最短距離で長さ約700mで繋がった陸繫部にあたる。南の海岸線は太平洋から吹き上げられて形成された砂丘が標高約20m～30m級の海岸段丘となって東西に走り、砂丘北側後背地の内陸部は比較的平坦な低地形の畠地帯となって、赤尾木集落へ続く。

調査地点は、この陸繫部の中程を基点とする本基幹農道が、赤尾木交差点から南北に走る主要地方道龍郷奄美空港線（以下、県道）と「T字」に交わる地点から約50m西側寄りにあたる。なお、調査前の地形は標高約20mの砂丘地で、モクマオ等の樹木が繁茂している。遺跡は砂丘北側後背地の東側丘陵袖部にあたる。

調査対象区域は、幅7m、長さ40mとし、面積は約300m²である。2m四方のグリッドを設定した。遺跡は、砂丘に立地するため3面を縦30m、横7mの範囲に矢板で囲み発掘作業の安全対策を講じた。

調査の結果、東からやや西に緩やかに傾斜した厚さ約20cm前後の混貝黒色砂層を遺物包含層とする、砂丘地に形成された縄文晩期～弥生時代相当期にかけての貝塚遺跡である。

砂丘に形成された貝塚（貝と砂が混在した混貝砂層）は、調査区一面に広がり、東側の最も高い地点が遺物も安定した状況で出土し、調査区西側末端で薄くなる。貝塚（遺物包含層）の保存状態は良好で、調査区外の南北方向に広がることが予想される。遺物包含層からは、イソハマグリを筆頭にチョウセンサザエ、アマオブネ、オオヤマタニシ、オハグロガイ等、約130種に及ぶ貝が出土し特に4区～5区にかけてチョウセンサザエの集積が見られた（第4図）。また、比較的保存が良好な状態で亀の甲羅が数か所点在していた。

遺構には土坑や石積み石圓い竪穴住居跡1基が発見された。

出土遺物には小型の突起を施したカメ・壺・鉢形土器をはじめ、突起に穴を穿ち紐を通した特異な土器や石皿・磨石・磨製の石斧等の石器、亀や魚骨類の他、サザエ、ゴホーラ、シャコ貝、二枚貝等、多数量出土した。特記するものとして片方に穴を穿ち先端を尖した骨格器が出土した。

第2節 遺構

1 遺構

（1）土坑（第5図）

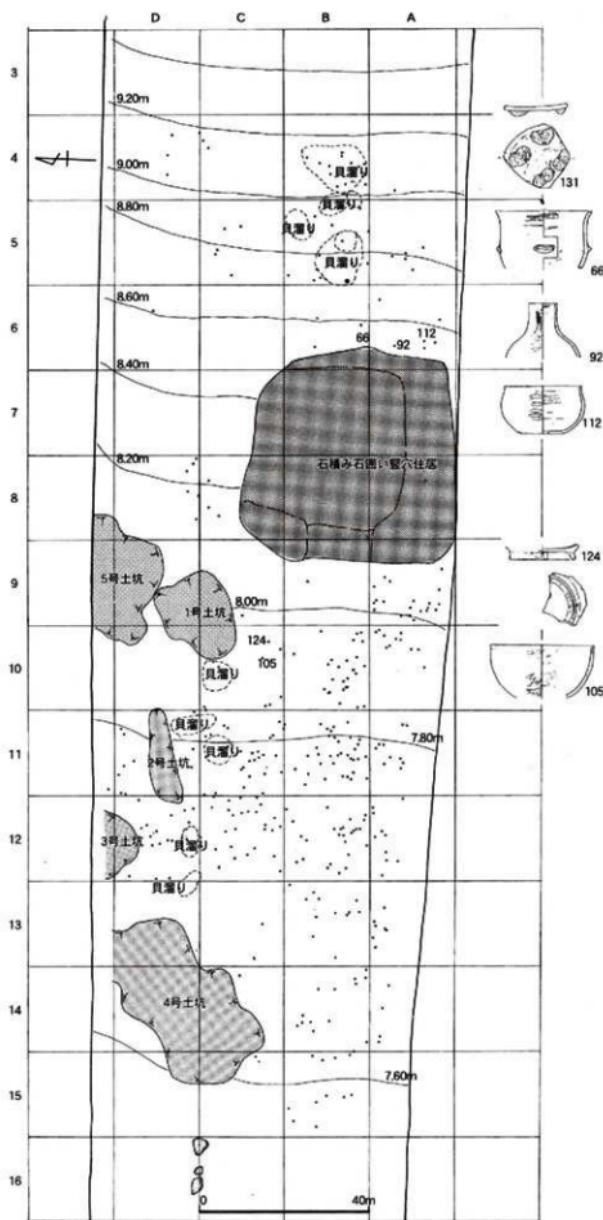
土坑は、混貝砂層の下層（明褐色砂層）を掘り込んで、5カ所（土坑1～5）が発見された。いずれも平面の形状は不定形を呈し、緩やかな窪み状となる。

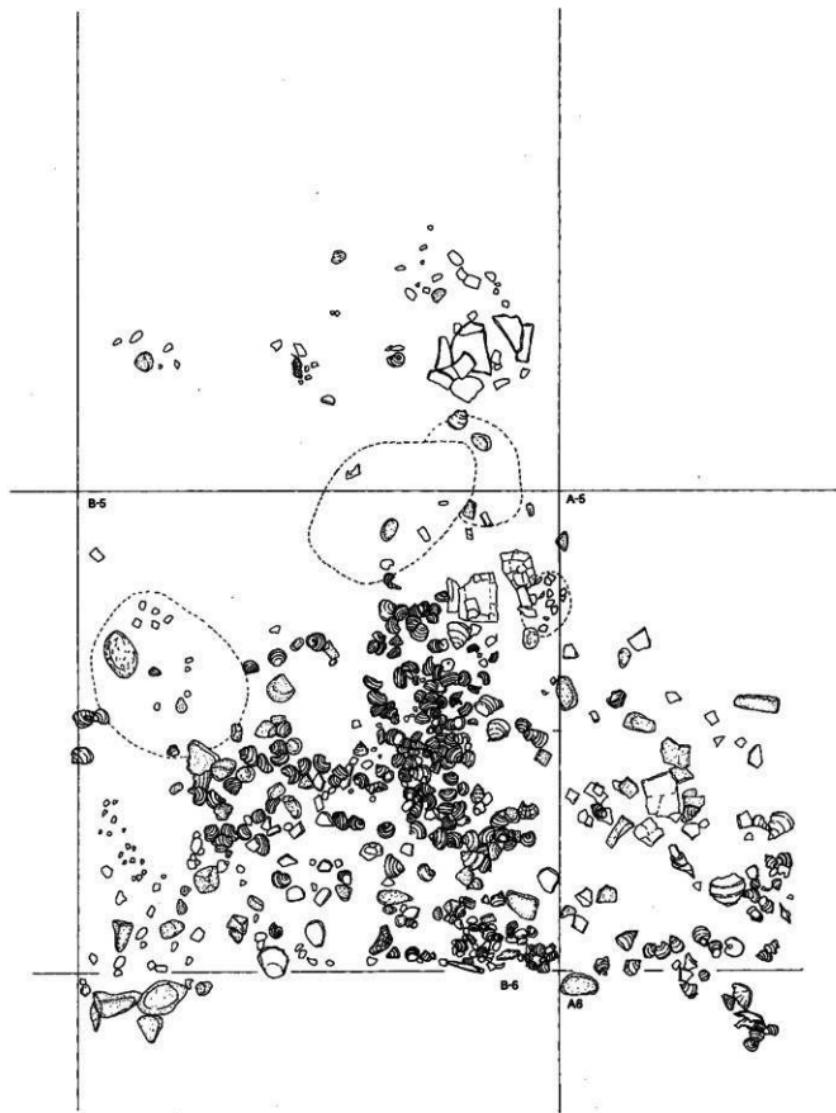
1号土坑（第5図・第6図1～13）

B・C-10・11区で検出。長径約200cm、短径180cmで深さ約40cmの浅い窪みを有す。

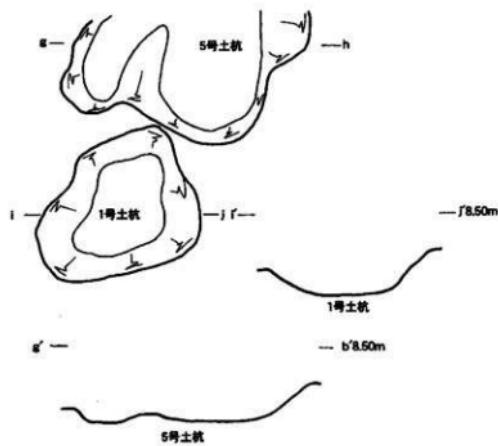
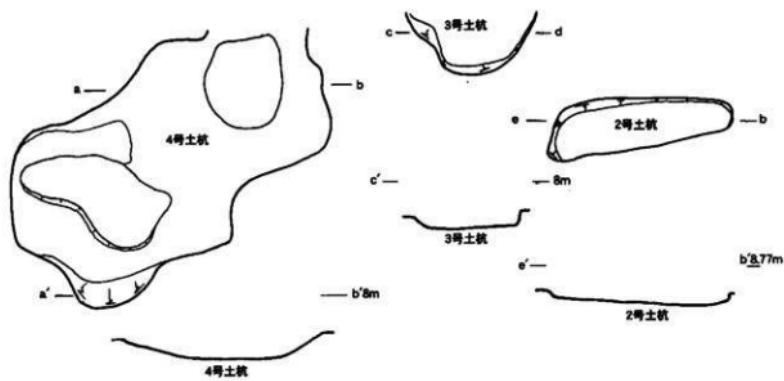
1は復元口径19cmの鉢形土器である。胴部は丸みを帯び、口縁部はやや内湾して端部は外反して薄く仕上げる。口唇部に小型の山形突起を付す。外面はヘラ調整。胎土には石英を含む。

第3図 グリッド遺構遺物配置図





第4図 遺物出土状況



第5図 土坑実測図

焼成は軟弱、色調は赤褐色を呈す。2は復元口径16cmの鉢形土器である。胴部はやや膨らみ、口縁部はわずかに外反し、口唇部は平坦に仕上げる。口縁部の上下に平行な2本の横線・縦線の浅いヘラ描き線文を有す。器面はヘラ調整。胎土には石英を含み、焼成は良好、色調は赤褐色を呈す。3は復元口径22cmの鉢形土器。外開きの口縁部である。器壁はやや厚く口唇部は薄く仕上げる。口縁部下部に縦位に小型の外耳を付す。横位の指ナデ調整の凹凸痕がみられる。胎土は石英、小礫粒を含み、焼成は良、色調は褐色を呈す。4は復元口径15cmの鉢形土器である。5は復元口径17cmの鉢形土器である。6は鉢形土器の胴部。器面には横位のヘラ調整痕を顯著に残す。器肉は厚い。焼成は堅緻。

7は胴部に横位の外耳を有す鉢形土器である。8は口縁部が外反する広口の壺型土器と思われる。復元口径14.7cm。外面は弱いヘラ研磨、内面の頸部付近はヘラ削り調整。9は縦4cm、横2cmの小破片である。口縁部は直行し、口唇部には山形状の小形凸起（刺込み）を有す浅鉢形土器と思われる。口縁部には細線で工字状文が施されている。研磨土器である。胎土は細砂の細粒と石英を含む。焼成は良。色調は淡黄褐色を呈す。10はやや外反する土器片である。外面には横位、内面には縦位に細線文を有す。また、小さな穿孔文がみられる。胎土は砂粒・石英粒を含み全体的に器肌は荒い。焼成は良。色調は赤褐色を呈す。11・12は低い高台付きの底部である。いづれも貼り付け高台で、高台部に4つの穴を穿っている。器面には研磨が施される。11は復元底径11cm、整形はやや粗雑に仕上げる。胎土は石英粒を含み、焼成はやや堅緻、色調は明褐色を呈す。12は復元底径8cm、整形は丁寧に仕上げる。外底部は平坦となる。胎土は砂粒を含み、焼成はやや軟弱、色調は赤褐色を呈す。

13は尖底の底部である。内外面は弱いヘラ調整。胎土は石英粒を含み、焼成は軟弱、色調は外面は赤褐色、内面はススが付着し黒色。

2号土坑（第5図）

長径約220cm、短径60cmで長楕円形を呈す。底面は比較的平坦で深さ6cmを計る。貝殻等が出土した。

3号土坑（第5図・第6図14~17）

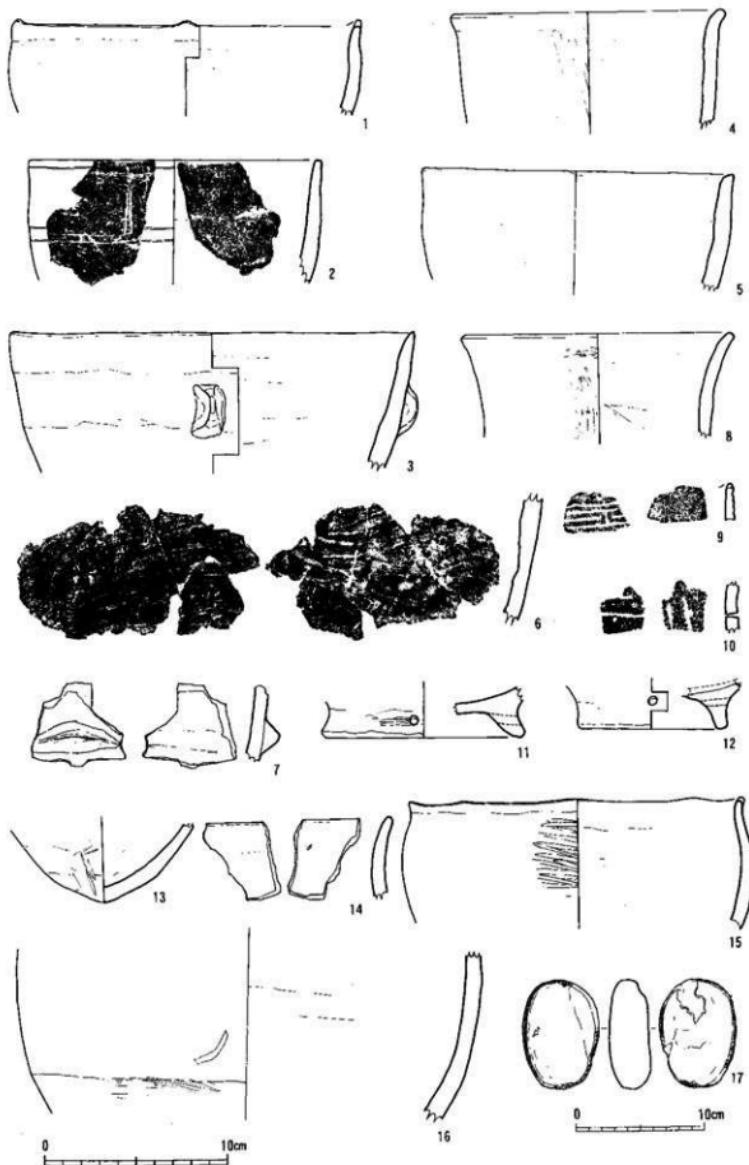
長径約150cm、短径80cmで調査外へ延びる。深さ20cmを計る。

14は外反する口縁部である。口唇部は丸く仕上げる。15は復元口径18cm。胴部は丸く口縁端部で内湾して、僅かに外反し、浅い波状口縁部となる。弱いヘラ調整。胎土は砂粒を含み、焼成はやや軟弱、色調は赤褐色を呈す。16は鉢形土器の胴部である。ヘラ削り調整。胎土は小礫粒を多く含み、焼成は堅緻、色調は褐色を呈す。17は砂岩製の磨石、叩石で側面は細かな叩き痕がみられる。

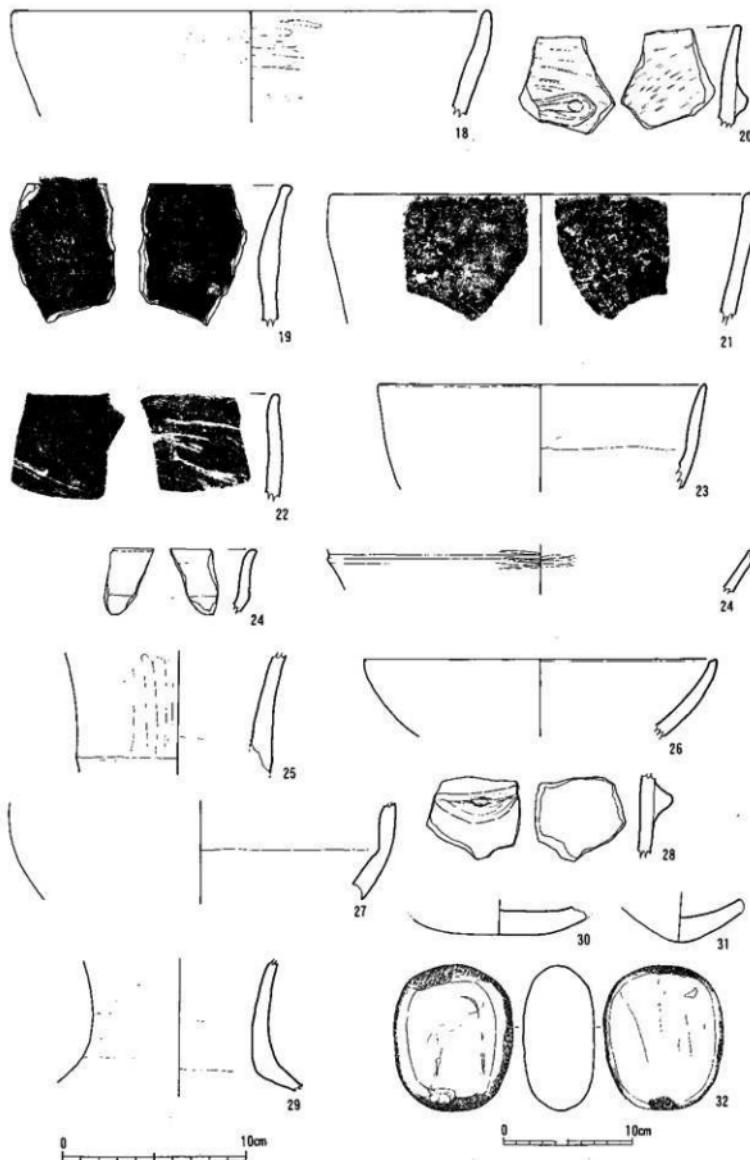
4号土坑（第5図・第7図18~27）

長径約450cm、短径200cm前後の不定形土坑である。両端には深さ約10~30cmの浅い窪地を有す。

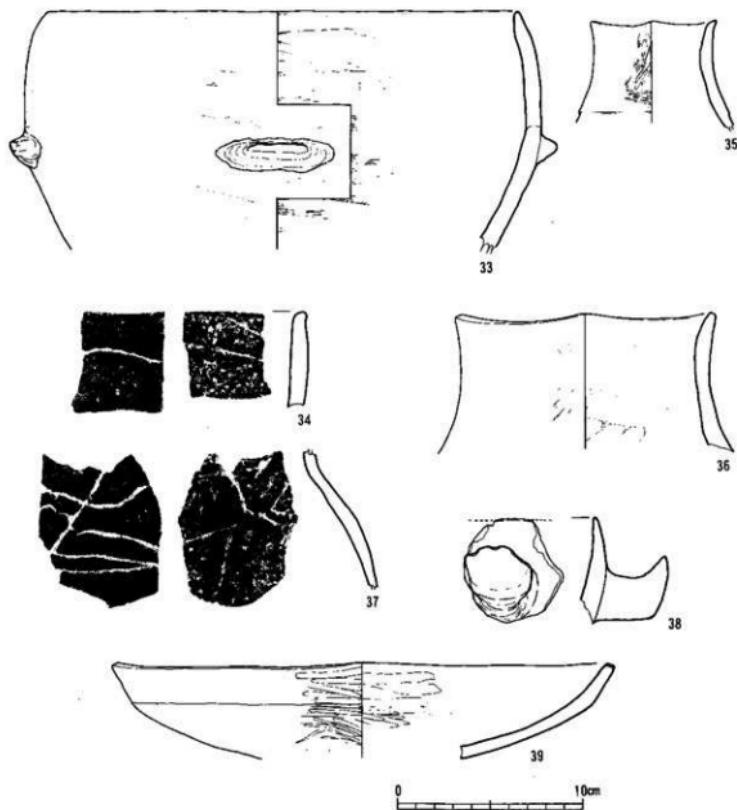
18は復元口径25.5cmの浅鉢形土器である。口縁端部で僅かに内湾する。浅い研磨で仕上げる。胎土は砂粒や微粒の石英を含む、焼成はやや軟弱、色調は赤褐色を呈す。19は外反する鉢形土器の口縁部である。口唇部は平坦に仕上げる。胎土は小礫粒を多く含み、焼成は良、色調は褐色。20は横位の外耳を有す鉢形土器。口唇部は平坦に仕上げる。器面はヘラ削り調整を施す。21



第6図 土坑1(1~13)・3(14~17)号出土遺物



第7図 第4号土坑出土遺物



第8図 第5号土坑出土遺物

は復元口径23cm。22, 23は鉢形土器である。23は復元口径18cm。24は研磨土器の浅鉢形土器である。胎土は緻密な砂粒を含み、焼成は良、色調は明褐色を呈す。25, 29は壺の頸部ある。25の下位には浅い凹線文を巡らす。外面はヘラ研磨。内面は粗く仕上げる。26は口縁部はわずかに内湾する復元口径19cmの浅鉢形土器である。口唇部は平坦に仕上げる。全体的に弱いヘラ研磨を施す。27は胴部内面が屈曲する。細石英を含む。28は外耳土器である。30, 31は底部である。30は丸平底、31は尖底となる。32は砂岩製の磨石、叩石で側面は細かな叩き痕がみられ、特に両短辺部はその使用が顕著である。

5号土坑（第5図・第8図33～39）

長径約280cm、短径約170cmの略円形を呈し、調査区外へ延びる。両端に窪地を有し、深さは約10～40cmを測る。

33は復元口径25.5cmの鉢形土器である。内湾する口縁部で、やや尖り気味の口唇部となる。胴部の最も張った部位に外耳を付す。全体的に雑な仕上がりである。内面は横位のヘラ調整。胎土は石英や礫粒を多く含み、焼成は良、色調は外面は褐色、内面は赤褐色を呈す。34は鉢形土器である。35は復元口径7cmの壺形土器である。口縁部はやや外反し、波状口縁となる。頸部付近には浅い段を有す。外面は横・縦位に丁寧なヘラ研磨調整が施される。色調は外面は暗褐色、内面は赤褐色を呈す。36も同様な波状口縁となる壺形土器で、復元口径14cmである。内面はヘラ削り調整。37は壺型土器の胴部片で、研磨調整である。38は口縁部は内湾し、口唇部は尖り気味で薄く仕上げる。口縁部下位には円柱状把手を有し、端部は円形に拡張する。胎土は砂粒状で緻密。焼成はやや軟弱。色調は内外面とも淡褐色を呈す。39は復元口径29cmの浅鉢形土器である。口縁部は「く」字状に屈曲し、波状口縁となる。内外面とも丁寧なヘラ研磨調整が施される。

2 出土遺物

土器、石器、土盤形土製品、石器（石鏃、磨石、凹石、石斧）、貝製品（小玉）、骨製品、自然遺物として131種類の貝と動物遺体（魚類、ほ乳類、爬虫類）が出土した。

（1）土器（第9図～18図）

土器には鉢形土器、壺形土器、塊形土器、浅鉢形土器等が出土した。

① 鉢形土器（第9～12図 40～91）

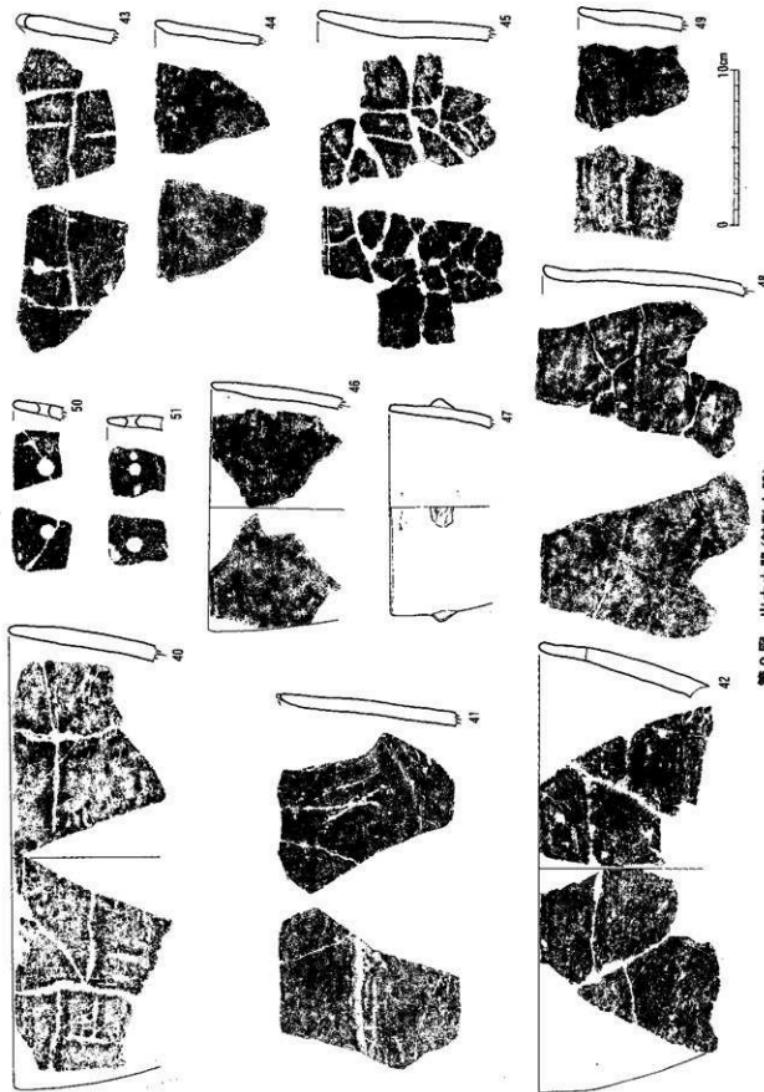
40～49は口縁部が直行し、口縁端部は細く仕上げる。40は復元口径29.5cm、42は復元口径29.8cm、43の口唇部には小突起を付す。46は復元口径16.4cmで小型鉢形土器である。47は復元口径14cmで小型鉢形土器で、口縁部下位には横位の小外耳を有す。50・51には円形の補修孔が穿かれ、また51には補修孔に隣接して内側から補修孔未貫通の跡もみられる。

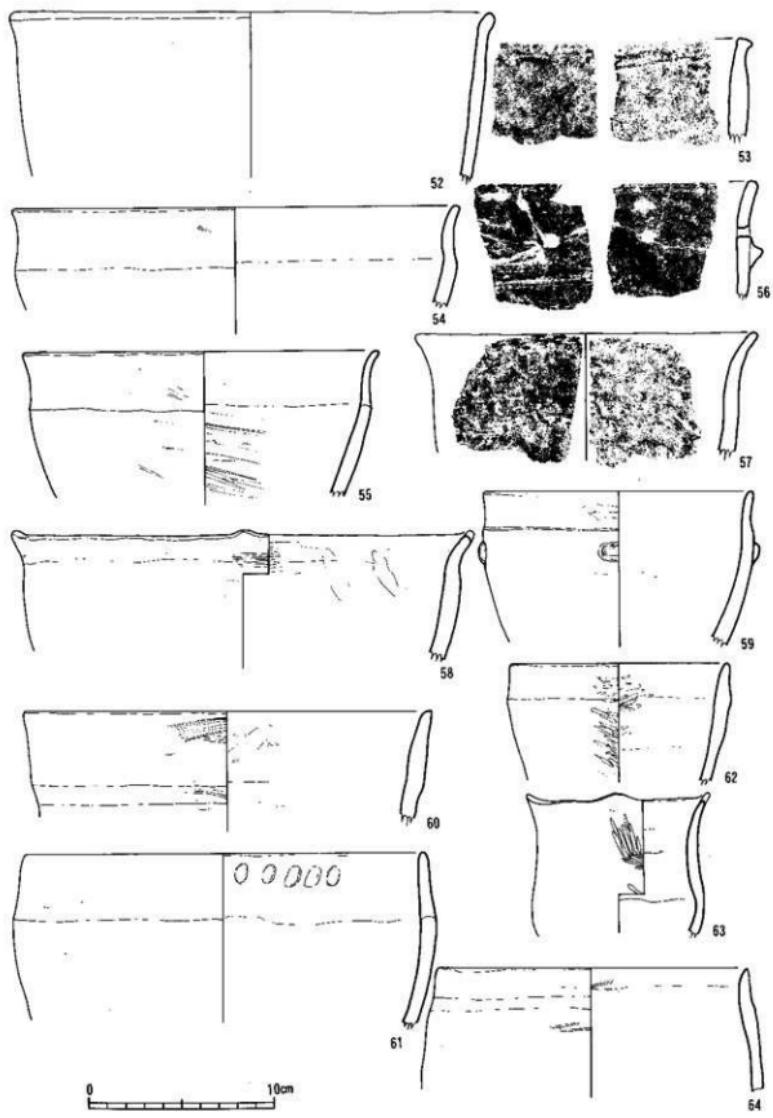
52は復元口径26cm、53は口縁端部で外側に小さく屈曲する。53の口唇部は平坦となる。

54～56・59は外反する口縁部で、胴部の境に弱い稜が付される。54は復元口径23.3cm。55は復元口径19cm。56には口縁部下部に断面が三角形の突帯文が巡る。突帯文の上位には円形補修孔を施している。59は復元口径14.5cm。胴部上位にビーナツ形の外耳を有す。

57・58は口縁部は短く、外反する口縁部である。58の復元口径は25cmで、口唇部に小型の山

第9圖 出土土器(斜形土器)





第10図 出土遺物(鉢形土器)

形突起を持つ。

60・62は肥厚する口縁部である。60は復元口径21.4cm。62は復元口径11.4cm。

61・64は口縁部は内碗及び内傾する。61の復元口径は21.6cm。胴部はやや丸味を帯びる。内側口縁部には指圧痕がみられる。63の復元口径16.6cmで、器面はヘラ調整。

63は復元口径9.8cmの小型鉢形土器である。丸味を帯びた胴部から比較的長い口縁部は外反する。口縁部は山形口縁を呈す。器壁は薄く、外面は継、横、斜めに丁寧な研磨が施される。胎土は石英を含み、焼成は堅緻、色調は灰褐色を呈す。

65～91は外耳を有す鉢形土器である。外耳には3種類があり、65～76はビーナツ殻状、77～79、81～87、89～91は所謂耳形、80、88は三日月状の形状となる。なお、85は胴部に三角形の貼り付け突帯が巡る。65は復元口径26cm。口縁部はほぼ直行し、口唇部は先細に仕上げ、波状口縁となる。内面に指調整痕を残す。66は復元口径10.6cm。丸味を帯びた胴部から比較的長い頸部で、口縁部は外反する。口唇部は丸く仕上げ、小型の山形突起を施す。ビーナツ殻状の外耳を有す。内外面ともに横位に弱い研磨が施されている。77は復元口径21cm。丸味を帯びた胴部から口縁かけて緩やかに外反する口縁部となる。口唇部は平坦に仕上げ、平縁となる。頸部に所謂耳形の外耳が付され、内外の器面は横位にヘラ調整がみられ、研磨土器である。

② 壺形土器（第13図92～104）

92～94は長頸壺である。肩部で絞まり緩やかにカーブを呈す。92は頸部から口縁にかけてやや垂直に立ち上がりわずかに口縁部は外反する。復元口径5.5cm。器壁は薄い。丁寧な研磨が施される。93はやや外反する口縁部で、復元口径8.4cmを測る。山形口縁を呈す。研磨土器である。94はやや直行する外開きの口縁部へと移行する研磨土器である。口縁部は山形口縁となる。口縁端部と頸部には四角形のヘラ描き文を有す。復元口径6.5cm。

95～97は短頸壺である。口縁部は内外反する。95、97は弱い器面調整に研磨痕が見られる。

98は内傾する口縁部で、復元口径10.5cmである。器壁は厚い。外器面は弱い研磨痕がみられる。

99は垂直に直行する口縁部となる復元口径10.5cm。肩部はヘラ調整。

100は広口壺の小型壺である。100は復元口径10.4cm、胴部径14.8cm。胴部は丸く拡張し、肩部には弱い段を持つ。口縁部は内斜して外反する。弱い研磨土器である。

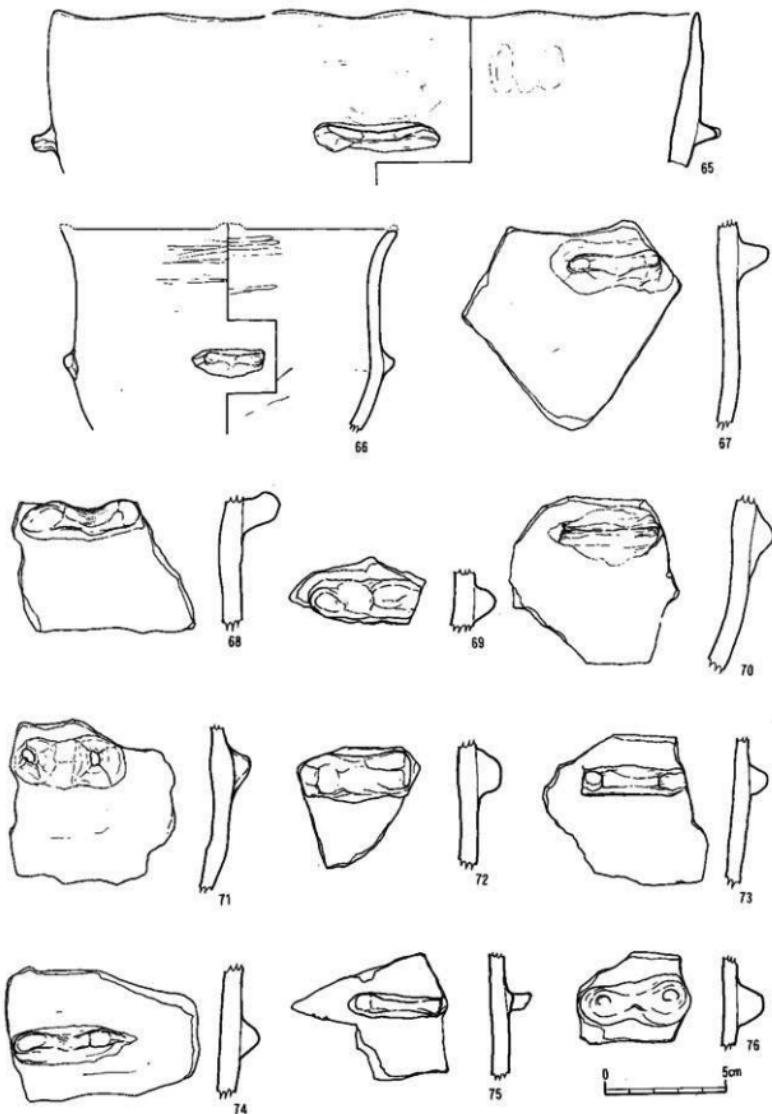
104は無類に近い短頸壺である。短い口縁端部は外側に「く」の字に屈折する。口唇部は先細に仕上げる。復元口径18.4cm。胴部上位には突帯文を巡らす。外側器面には弱い研磨痕がみられ、内燃はヘラ調整を施す。

101～103は胴部から頸部にかけての壺形土器片である。なお、103の胴部には外耳の痕跡がみられる。いずれも弱いヘラ調整痕を残す。

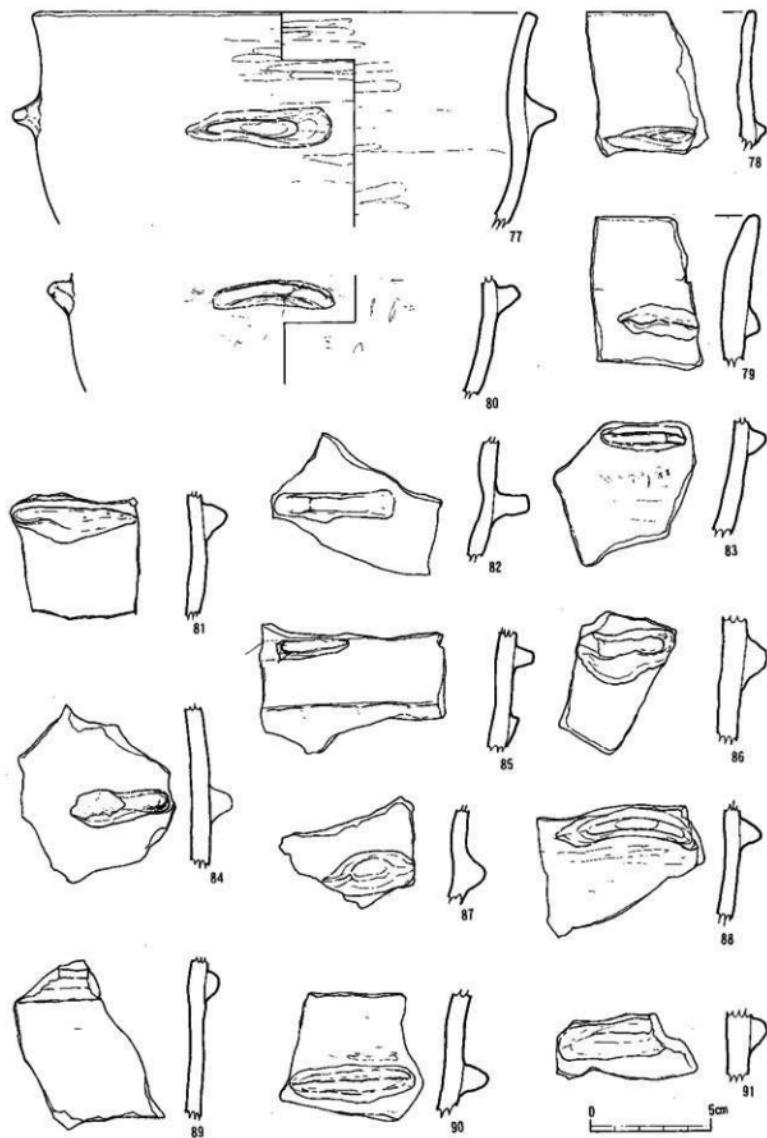
③ 埋形土器（第14図105～115）

106～110は口縁部がやや内湾する。106は復元口径18.8cm。107は復元口径21cm。108は復元口径18cm。109は復元口径12.5cm。110は復元口径12.5cm。いずれも弱い研磨土器である。

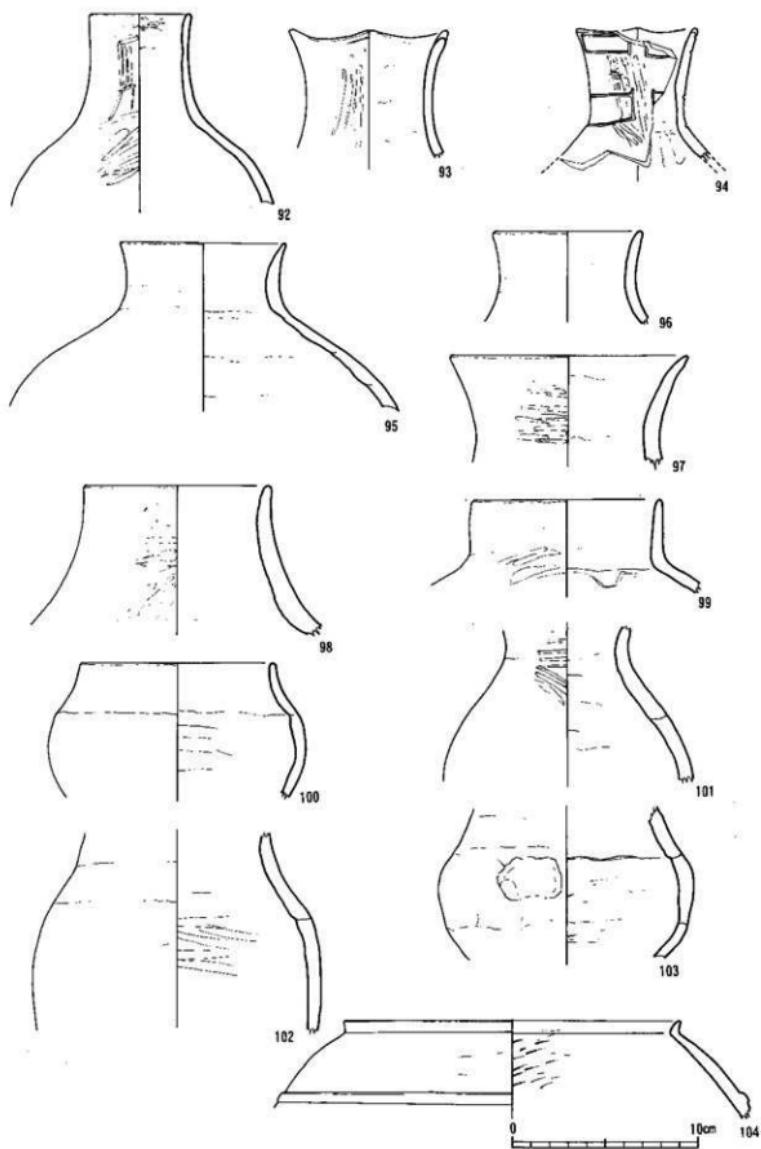
105、111、113は口縁端部がわずかに外反する。105は復元口径20cm。111は復元口径18.5cmで山形口縁である。いずれも研磨土器である。113は復元口径15.5cm。底部は丸平底で復元底部



第11図 出土遺物(鉢形土器)



第12図 出土遺物(鉢形土器)



第13図 出土遺物(壺形土器)

径8cm。口唇は丸く仕上げ、約5cm間隔に9~10個の小型山形突起を施し、波状口縁となる。胸部のほぼ中央部に半球状の外耳を4個付け、外耳には縦に穴が穿かれている。紐通しの穴と思われる。器壁は全体的に厚い。内外器面ともに研磨状にヘラ調整。胎土は石英を含み、焼成は良、色調は外面が明褐色、内面は赤褐色を呈す。

112は丸味を帯びた胸部から内湾する口縁部となり、底部は丸平底を呈するマリ形の碗である。口縁径は胸部径より小さい。口14.7径cm、胸部径16cm、底部径8.5cm。器面は弱いヘラ研磨調整が施される。

114は外開きに直行する口縁部である。胸部には縦に穴を穿った半球状の外耳が付される。115も同様な外耳土器片である。

④ 浅鉢形土器（第15図 116~121）

116は復元口径40cm。口唇部に太型の押圧文を付す。口縁端部に孔列文を施す。内面は研磨、外面は横位にヘラ調整を行う。胎土は石英を含み緻密。焼成は良。色調は内外面は赤褐色、器肉は黒色を呈す。117は復元口径22.8cm。平縁口縁である。外面の口縁部はわずかに屈曲し、弱い稜が見られる。内面は研磨、外面はヘラ調整を施す。118は復元口径23.6cm。内湾気味の口縁部となる。口縁部端部には小山形突起を付す。弱い研磨土器である。119~121は全体的に器壁は厚く、口縁端部に略方形の小突起を有す。いずれも外器面は研磨が見られる。119は復元口径19.8cm。120は復元口径25.6cmで、丹塗り土器の可能性がある。121は復元口径20.2cm。

⑤ 底部（第16、17図 122~147）

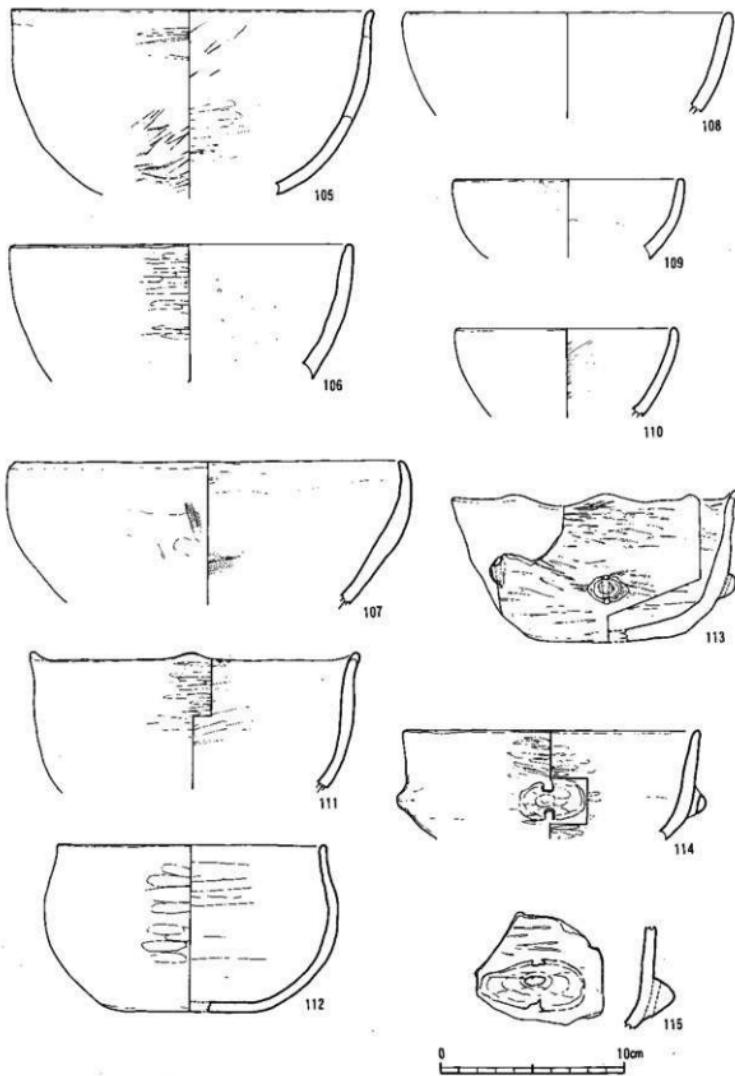
底部は大別して7種類がある。

A類（122~130）貼付け高台の底部である。土器の全体像は把握できないが、鉢形土器の底部と想定される。122は底部径8.3cm。高台はやや外開きの貼付け高台で、底面は平坦となる。内底部は平坦面を保ち、大きく開いて丸味を帯びて胸部へ移行する。比較的雑な仕上がりである。胸部との接合部の高台には径2mm~4mm前後の2個の穴を接近させた4個の穴を外側から内側に穿っている。2個の穴を対とし、穴は直線的に穿つ。器面調整はヘラ調整及びヘラ研磨が施される。123は底部径6cmの小型で外開きの貼付け高台である。底面は丸味を帯びて外開きの胸部へと移行する。2個の穴を1対とする4個の穴が穿かれている。124~130も122と同様に内底面は平坦に仕上げ、同様な穿孔を施す。126は摩耗を受けているが、他はいずれもヘラ調整を施す。124は底部径12.4cm。125の底部径10cm。126は底部径12.2cm。127は底部径9cm。128は底部径6.8cm。129は底部径6.4cm。130は底部径7.4cm。これらの2対の4個の穿孔は紐通しに用いたものと思われる。

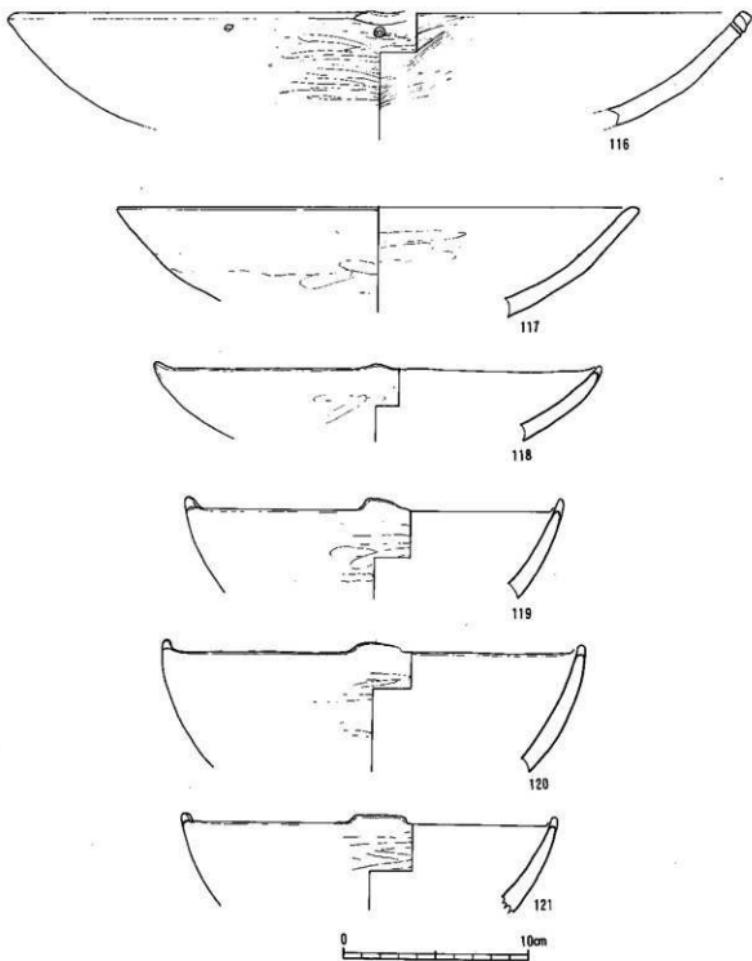
B類（131）底部径は約11cmで平丸底を呈す。外底面には直径が2.5cm~3cm前後、高さ約1cmで瘤状の突起を7cm間隔に4個貼り付けた脚を有する土器である。相対する2個の脚には直径が3mm~4mmの紐通しの穴が直線上に並ぶように外底面に沿って穿かれている。外器面はヘラ調整。胎土は石英を含む。焼成は良好。色調は内外面は赤褐色、器肉は灰黒色を呈す。

C類（132~137）尖底土器である。なかでも134~137は乳房状を呈す。いずれもヘラ調整が施される。なお、土器作成時の粘土の纏ぎ目を顯著に残す。

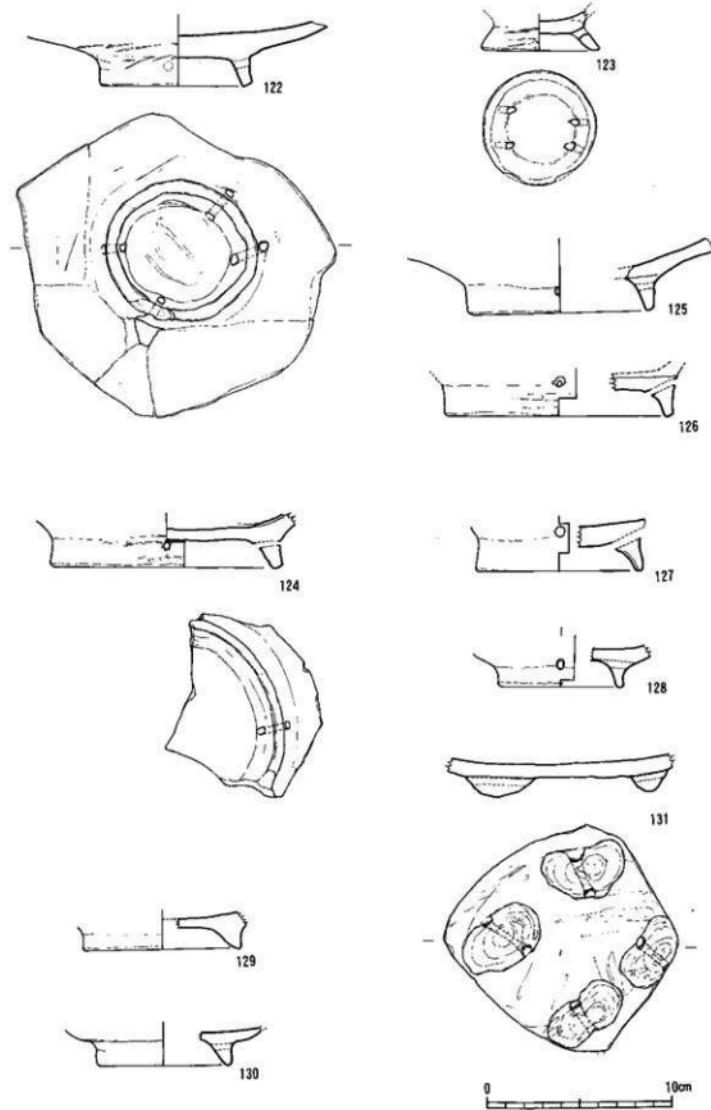
D類（139~142）円盤状の丸平底である。140の底部約16径cmの大型から142の底部径3cmの



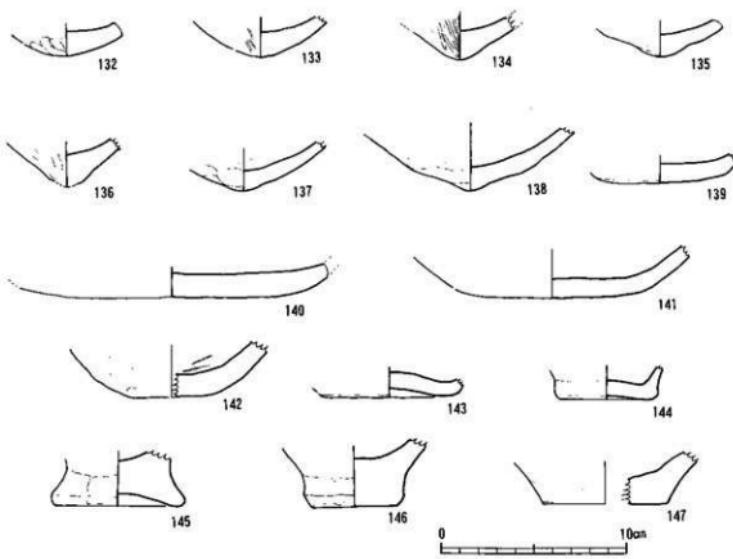
第14図 出土遺物(埴形土器)



第15図 出土遺物(浅鉢形土器)



第16図 出土遺物(底部)



第17図 出土遺物(底部)

小型がある。140は丹塗り土器で、胎土は石英を含み粒子が細かい。焼成はやや軟弱。色調は灰色を呈す。

E類(143, 144) 上げ底である。143は底部径7.5cm。144は底部5.6径cm。

F類(145) 低い高台付きの底部である。底部7径cm。底部は比較的充実し、外開きで高さ7mmの低い高台を持つ。

G類(146, 147) 充実した底部で平底となる。146の底部は厚さ2.8cmで充実し、外底部は立ち上がりながら外反する肩部へ移行する。全体的に雑なヘラ調整がみられる。

⑥ 有文土器(第18図 148~161)

A類(148~161) は深鉢形土器である。

口縁部が直行し平縁口縁の148・150~152・159、口縁部が外反する149・155・156・158・161がある。162は復元口径9cmで山形口縁の小型鉢形土器である。文様はヘラ描きによる綾杉文

の（148・150・151・153・154・155），横線文の（149・159・160），横線文と縦線文で方画文（158・156），横線文と斜行線文の組み合わせの（152），工字状文（161）がある。149・157は復元口径11.4cmで小型の鉢形土器で，口縁部は外反する。口縁端部に横位に2本のヘラ描き文2本を施す。いずれも器壁は薄く，胎土は微粒の石英を含む。161はやや外反する口縁部の破片である。大型の工字状文の文様を呈する。器壁は比較的厚い。胎土には石英を含む。焼成は良好。色調は内外面ともに赤褐色，器肉は暗褐色を呈す。東日本系の土器に属するか。162は復元口径9cmの山形口縁を呈する。研磨土器である。口縁部には縦横にヘラ描き沈線文を有す。胎土は砂粒を含み，焼成はやや堅緻，色調は暗褐色を呈す。

B類（163～166）は壺形土器である。

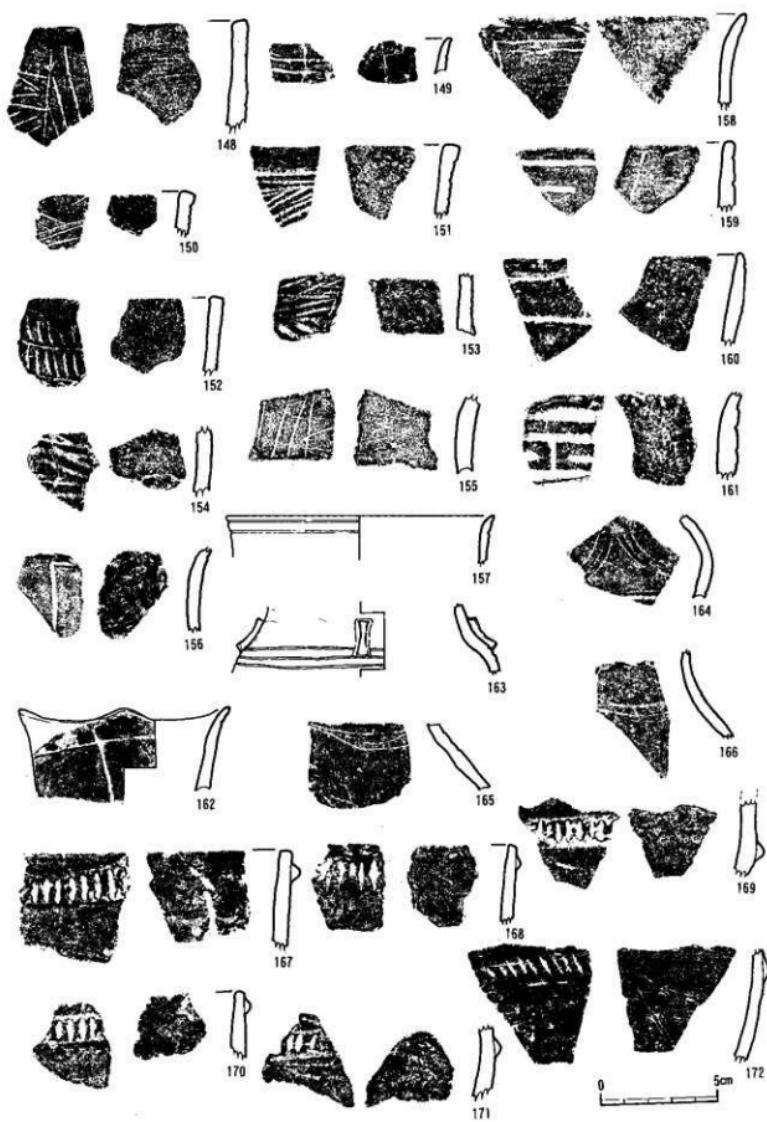
163は頸部は絞まり丸味を呈し，口縁部へと移行する胴部の復元径約11cm小型の壺形土器である。胴部上位には3本のヘラ描き沈線文が巡る。頸部には縦位にリボン形の貼付け突帯文を有す。胎土には砂粒を含み，焼成は良，色調は明褐色。164は胴部片で，下位に重弧文，上位にヘラ描き沈線文を施す。165・166は肩部にヘラ描き沈線文を巡らす。いずれも弱い研磨調整を施す。

⑦ 刻目凸帯文土器（第18図 167～172）

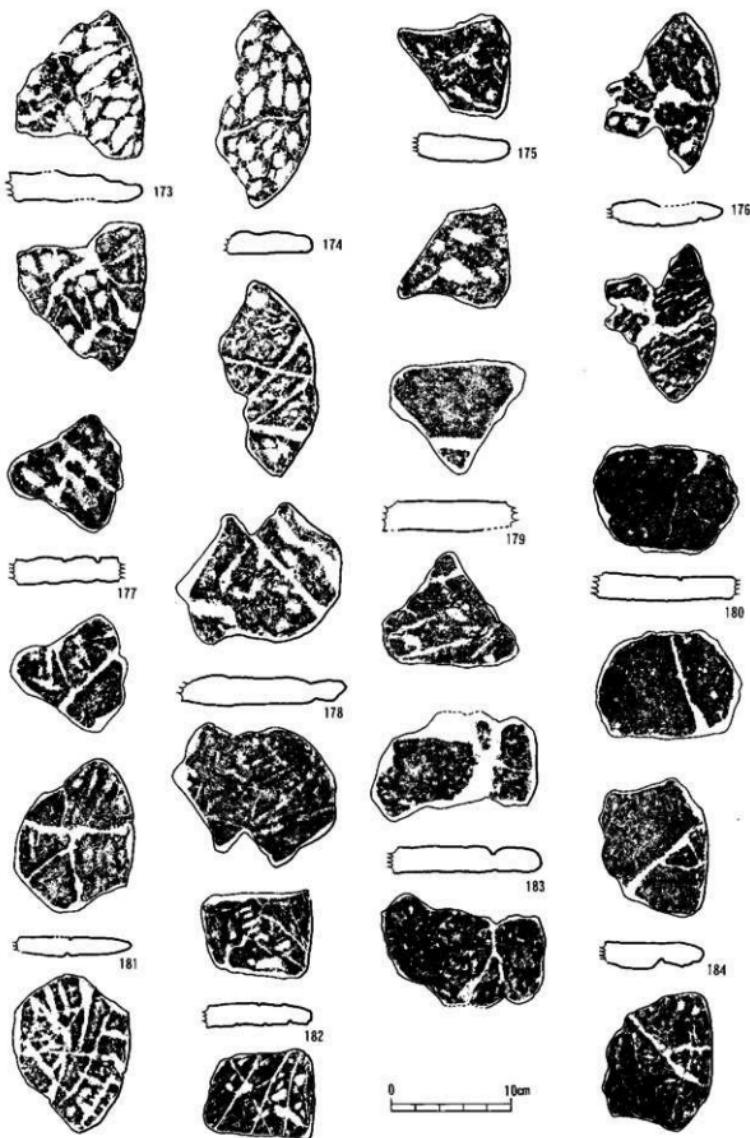
口縁部は直行し，口唇部は平坦に仕上げる。167・168の口縁端部の下位に断面三角形の貼付け刻目凸帯文を有す。167の胎土には石英，長石，雲母を含む。焼成は良。色調は褐色。172は弱いヘラ調整が施される。

⑧ 土盤形土製品（第19図 173～184）

全体の半分以上が欠損しているため原形は定かでないが，粘土塊を円盤状に平らに引き延ばしたものと想定する。径は20cm以上の比較的大型の土盤形土製品と思われる。土製品の縁辺は丸味を帯び，両面はほぼ平坦に仕上げ，作りは雑で軟弱なものである。厚さは1～2cmと分厚く，表裏の両面（173・174・177・182）と片面（175・176・178～181・183・184）には木の葉の圧痕（183）や指頭圧痕（173・174），凹線（181）を施している。片面はナデ調整を施す。胎土には石英や砂粒を含み，焼成は軟弱で脆く，色調は赤褐色を呈す。破片のみであったがパンケース2箱分が出土した。用途は不明である。



第18図 出土遺物(有文・刻目文土器)



第19図 出土遺物(土盤形土製品)

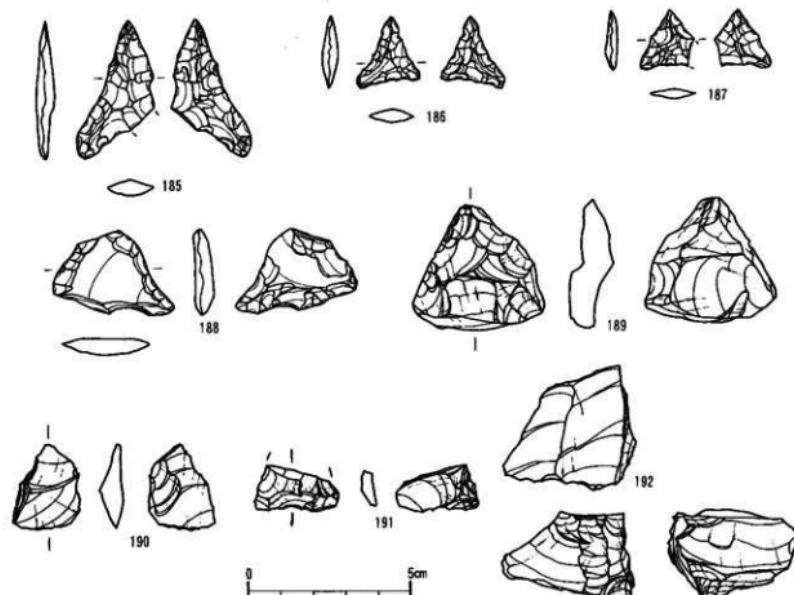
(2) 石 器 (第20~22図)

石器には石鎌, 薄片石器, 磨石, 石皿, 石斧が出土した。

A 石 鎌(第20図)

185は土坑4の埋土から出土したチャートA製の石鎌である。抉りの深い長身の鎌で、脚部の片側が欠損している。重量は0.96gである。186は土坑1の埋土から出土したチャートA製の小型の凹基無茎鎌である。重量は0.34gである。187はB-7区から出土したチャートA製の小型の凹基無茎鎌である。脚部の片側が欠損している。重量は0.24gである。188は土坑4から出土したチャートB製の石鎌未製品である。厚手の剥片の片面に周縁から調整が施され、三角形を呈している。

重量は5.22gである。189は土坑4から出土したチャートA製の石鎌未製品である。薄手の剥片の周縁に調整の跡が観察される。2カ所に破損が確認される。重量は1.44gである。190は土坑4から出土したチャートA製の石鎌未製品である。薄手の剥片の片側縁に急角度の調整が施され、反対側の側縁には平坦な調整が施されている。重量は0.86gである。191は土坑4から出土したチャートA製の石鎌未製品である。薄手の剥片の側縁に調整が施されている。約3分の1は欠損している。重量は0.65gである。192はB-7区から出土したチャートC製の石核である。打面を転移させながら剥片を剥出している。重量は11.3gである。



第20図 出土遺物(石鎌等)

表2 石器観察表

番号	出土区	器種	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	石材	備考
185	土坑4	石 磨	28	16	4	0.96	チャートA	
186	土坑1	石 磨	15	13	3	0.34	チャートA	
187	B-7	石 磨	12	11	3	0.24	チャートA	
188	土坑4	石磨未製品	17	24	4	5.22	チャートB	
189	土坑4	石磨未製品	25	27	11	1.44	チャートA	
190	土坑4	石磨未製品	17	14	5	0.86	チャートA	
191	土坑4	石磨未製品	9	17	3	0.65	チャートA	
192	B-7	石 核	18	27	26	11.3	チャートC	

B 剥片石器

遺物包含層、土坑内覆土を篠いにかけて抽出した結果、総数180点の剥片石器が出土した。遺構ごと、グリッドごとに分類した。各地点ごとの内訳はA-10区で1点、B-7区で83点、B-14区で1点、C-12区で3点、D-12区で5点、土坑1で13点、土坑4で74点である。

石材は、黒曜石、チャート、石英、瑪瑙、頁岩である。特にチャートは多様であり、以下に石材の特徴と分類及び石材重量比率を記述する。

黒 曜 石：黒色ガラス質で良質の黒曜石である。佐賀県腰岳産の黒曜石に類似する。石材総重量は13gで、5.0%を占める。

チャートA：緑色を基調とする色調を呈し、薄いところは白色にみえる。良質である。石材総重量は71.2gで、27.3%を占める。

チャートB：暗灰色を呈する良質のものである。石材総重量は24.2gで、9.3%を占める。

チャートC：青灰色を基調とし、黒色の縞が無秩序に見られる。やや質が悪い。石材総重量は105.9gで、40.6%と本遺跡での主流を占める。

チャートD：灰色を基調とし、白色の横縞が多数見られる。やや質が悪い。石材総重量は26.5gで、10.2%を占める。

チャートE：赤褐色を基調とし、白色の縞が無秩序に見られる。質が悪い。石材総重量は1.7gで、0.7%を占める。

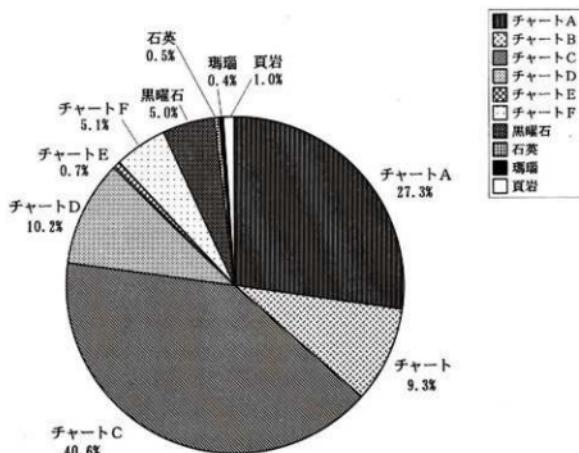
チャートF：白色と青灰色のまだら模様を基調とし、縞状の摺理が密に入る。質が悪い。

石 英：石材総重量は1.3gで0.5%を占める。

瑪 瑙：赤褐色を呈する。石材総重量は1.1gで0.4%を占める。

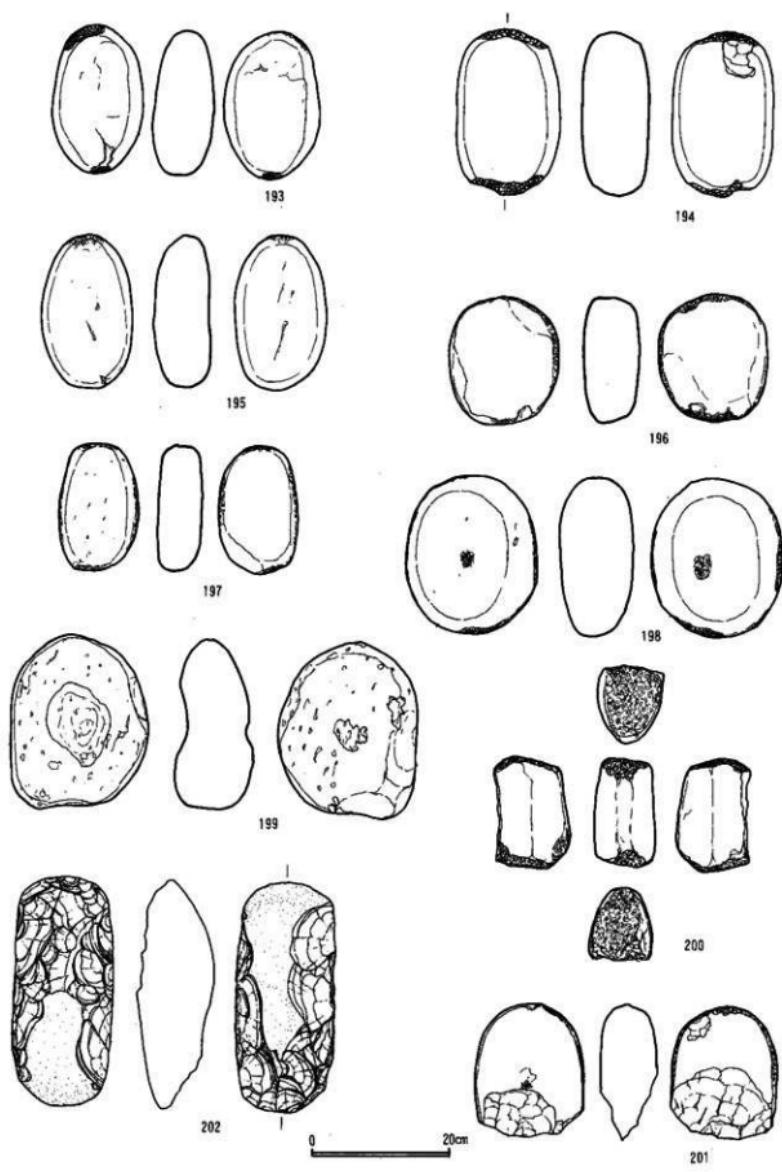
頁 岩：石材総重量は2.6gで1%を占める。

表3 剥片石器石材別重量表



出土区	層	石 材										合 計
		chA	chB	chC	chD	chE	chF	obs	qua	jas	sh	
A-10	貝						1					1点
							13.2					13.2 g
B-7	貝	69	6	6				6	1	1		83点
		45.9	5.3	14.3				9	1.3	1.1		76.9 g
B-14	貝			1								1点
				3.2								3.2 g
C-12	貝			2			1					3点
				9.9			1.7					11.6 g
D-12	貝			1			2			2		5点
				2.6			2.3			2.6		7.5 g
土坑1	埋土	2		7	4							13点
		1.4		60.8	26.6							88.7 g
土坑4	埋土	40		4		1						74点
		23.9		15.1		1.7						59.6 g
合 計	g	111	35	21	4	1	1	9	1	1	2	180点
		71.2	24.2	105.9	26.5	1.7	13.2	13	1.3	1.1	2.6	260.7 g

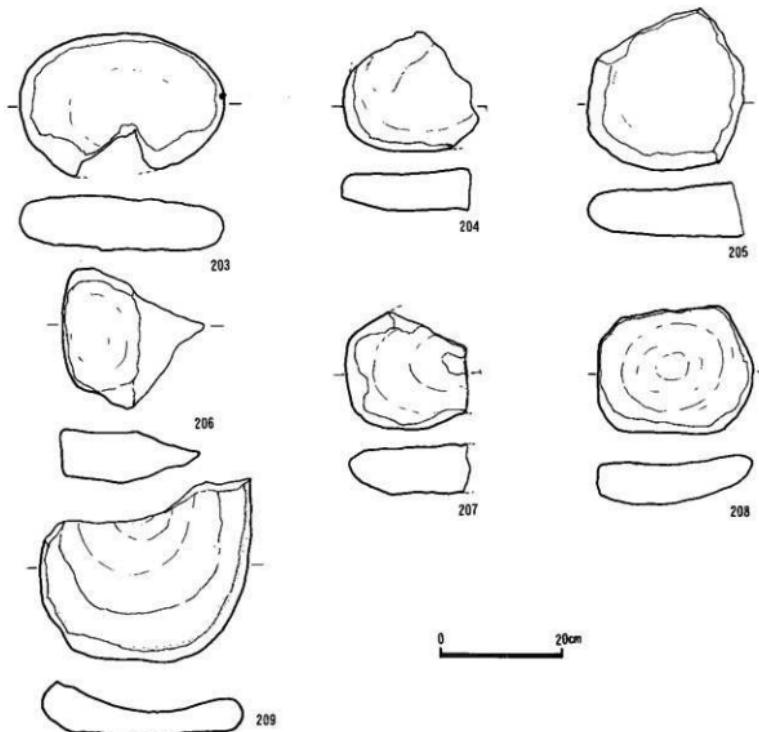
ch : チャート obs : 黒曜石 qua : 石英 jas : 瑪瑙 sh : 頁岩



第21図 出土石器(磨石・磨製石斧他)

C 磨石・叩石等（第21図）

193～198は磨石・叩石である。いずれも表裏両面に研磨痕がみられる。敲打痕の部位については両端部の193、194、195、ほぼ側面の197、198、側面全体199がある。なお198は両面に浅い凹み痕がみられ、凹石との併用となる。199は両面に使用痕を有す凹石である。200は五面体からなる三角錐形の叩石である。底辺は調整痕を顕著に残し、頂部は研磨された僅かな平坦面となる。2側面は弱い研磨がみられ、両端の全面には細かな敲打痕が認められる。202、203は砂岩製の石斧未製品と思われる。202は表裏の相対する面に自然面を残し、両面には丁寧な剥離調整が施される。



第22図 出土石器(石皿)

D 石皿（第22図）

203～209は石皿である。203、206は石積み竪穴住居内、他は竪穴住居覆土内から出土した。208を除いた他は欠損品であるが、203はほぼ完形に近く橢円形を呈す。これらは片面に摩耗した浅い窪みの使用痕を有す。なお、209は大型の石皿で窪みも深く使用頻度の多さを示している。

表4 磨石・叩石観察表

番号	出土区	種類	長さmm	幅 mm	厚さmm	重量g	備考
193	A-4	磨石・叩石	11	7	4.4	480	
194	B-12	磨石・叩石	13.5	8.5	5.6	1,039	
195	C-14	磨石・叩石	9	5.4	3.4	245	
196	D-8	磨石・叩石	7.5	6.5	3.3	257	
197	B-15	磨石・叩石	10.5	6.4	3.7	358	
198	B-14	磨石・叩石	11.8	9.5	5.5	977	
199	B-11	磨石・叩石	12.9	10.2	9.7	900	
200	A-4	磨石・叩石	8.4	5.5	4.6	384	三角鑿形
201	A-12	磨石・叩石	10.9+	8.7+	4.8+	612+	
202	A-4	石斧	18.8	8.2	6.3	1,370	
203	住居内	石皿	34	22+	8.8	8,200	欠損
204	住居覆土	石皿	22+	20+	6.2	3,500	欠損
205	住居覆土	石皿	25+	26+	9	7,450	欠損
206	住居内	石皿	23+	20+	8.4	5,150	欠損
207	住居覆土	石皿	20+	19+	7.2	4,000	欠損
208	住居覆土	石皿	25	20	6.6	5,560	
209	住居覆土	石皿	24+	34.4	4	9,400	欠損

(3) 貝製品

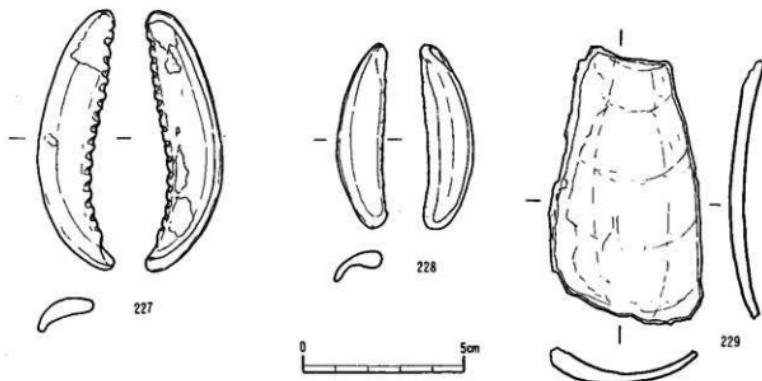
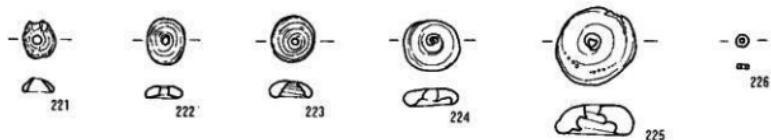
① 貝玉（第23図）

17個が出土した。210～220・222～225はアンボンクロザメ（イモ貝科）の貝玉である。

直径は10.2mm～24mmの円形で、厚さは3mm～9.7mm。頂部は平坦に磨られ、般頂部に径1.5mm～9mmの孔を穿ったものである。221はコウダカラマツ（ツタノハガイ科）で、直径10.2mm、厚さ4.5mm、孔径3mm。226は径4mm、厚さ1.7mmの円柱の小玉である。穴の径は1.5cm。

② 貝加工品（第23図）

227・228は縦長の貝製品である。227は長さ80mm、幅23mm。ホシタカラの腹背両面を丁寧に研磨して整形する。228は長さ57.2mm、幅16mm。ヤクシマダサカラの腹背両面を丁寧に研磨して整形する。229は長さ87mm、幅47mmである。イモガイを加工し、周囲は研磨して整形している。



第23図 出土遺物(貝製品)

表5 貝玉計測表

番号	出土区	種類	直径mm	厚さmm	孔径mm	貝種	貝名
210	B-7	貝玉	21.0	7.5	8.0	イモガイ科	アンボンクロザメ
211	A-8	貝玉	18.2	5.1	9.0	イモガイ科	アンボンクロザメ
212	C-4	貝玉	18.5	5.2	9.0	イモガイ科	アンボンクロザメ
213	土坑4	貝玉	19.1	6.0	9.0	イモガイ科	アンボンクロザメ
214	A-8	貝玉	19.5	6.5	7.0	イモガイ科	アンボンクロザメ
215	A-7	貝玉	17.0	5.1	7.5	イモガイ科	アンボンクロザメ
216	B-7	貝玉	18.0	4.6	8.0	イモガイ科	アンボンクロザメ
217	A-7	貝玉	14.0	4.0	7.0	イモガイ科	アンボンクロザメ
218	D-7	貝玉	10.2	4.3	3.5	イモガイ科	アンボンクロザメ
219	B-7	貝玉	11.4	4.0	3.6	イモガイ科	アンボンクロザメ
220	A-7	貝玉	12.0	3.0	4.0	イモガイ科	アンボンクロザメ
221	B-7	貝玉	10.2	4.5	3.0	ツタノハガイ科	-
222	A-1	貝玉	13.0	3.8	2.2	イモガイ科	アンボンクロザメ
223	A-1	貝玉	13.0	5.1	2.0	イモガイ科	アンボンクロザメ
224	A-1	貝玉	17.0	5.3	2.0	イモガイ科	アンボンクロザメ
225	土坑	貝玉	24.0	9.7	4.5	イモガイ科	アンボンクロザメ
226	土坑4	小玉	4.0	1.7	1.5	不明	不明

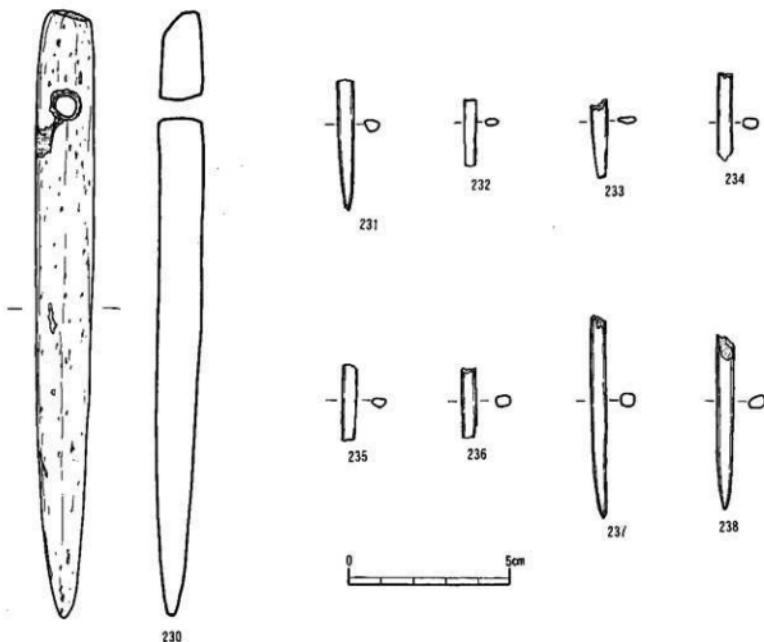
第6表 貝加工品計測表

番号	出土区	直径mm	厚さmm	貝種	備考
227	-	80.8	23.0	ホンダカラ	腹背両面は丁寧に研磨
228	C-13	57.2	16.0	ヤクシマダカラ	腹背両面は丁寧に研磨
229	-	87.0	47.0	イモガイ科	割れ口は研磨

(4) 骨製品（第24図）

230は長さ18.5cm、最大幅188.5mm、最大厚18.5mmを測る骨製品である。頂部は長軸に対しやや斜めに削り、丸く調整する。頂部の基部から先端部にかけて先細となり、先端部は円錐形に尖らす。断面は梢円形を呈す。頭部には、円孔が穿かれている。円孔は両サイドから穿ち一方が径9mm、片方が径8mm、内径で6mmを測る。全体が入念に研磨されて精巧な造りである。このような形態から、刺突機能をもつ太型針の骨角器と思われる。動物骨種名は定かではなが、クジラかジュゴンの海性動物であろう。

231～238は骨製針で計8本が出土した。231・237・238は針先を残し、断面は円形、先端部は円錐形に尖されている。他は両端が欠損している。いずれも全体的に丁寧な研磨整形が施こされている。なお237は黒灰色を呈し被熱化している。



第24図 出土遺物(骨製品)

表7 骨角器計測表

番号	出土区	種類	厚さmm	径 mm	備考
230	-	針	188.0	18.5	完全品
231	土坑1	針	40.5	5.2	上端部は欠損
232	土坑5	針	20.7	3.6	上下端部は欠損
233	土坑5	針	24.2	5.2	上下端部は欠損
234	-	針	27.3	4.6	上下端部は欠損
235	B-7	針	23.9	4.3	上下端部は欠損
236	-	針	22.0	4.2	上下端部は欠損 被熱し黒色に変色
237	-	針	63.1	4.3	上端部は欠損
238	-	針	59.0	5.5	上端部は欠損

第3節 石積み石囲い竪穴住居（第25図）

石積み石囲い竪穴住居は、調査地点の東側A～9区～C～6～9区に位置する。

住居全体の平面形は隅丸を呈し、南北約5m×東西4.9mを測り、ほぼ正方形を呈し、隅丸となる。面積は約25m²。砂層を床面とする。主軸はN-5°-E。

本住居は①母屋（竪穴住居の主体部で石積み石囲い竪穴部）を主体に、西側には②「出入口」・③「石積み構円形遺構」、南側には④「ベッド状遺構」から構成され、でこれらが一体となった多重構造の住居である。保存状態は極めて良好である。

石積みの素材には、主に縦約40～50cm前後、横約20～30cm前後大の扁平石や円礫の砂岩や珊瑚塊、ビーチロック塊を使用している。

構築にあたっては、東から西に緩やかに傾斜する砂丘傾斜面に形成された縄文晩期相当の遺物包含層（混土貝層）を掘り込んで、竪穴住居と出入口、石積み構円形遺構設置部分を確保する。なお、住居南側の縁辺の石囲い遺構（ベッド状遺構）の部分には掘り込みは無い。竪穴住居の最もレベルが高い東側では砂層をほぼ垂直に掘り、深さ約70cmである。なお壁面部分の積み石の裏面は、掘り込み面と密着する。

①「母屋（竪穴住居の主体部）」の規模は、約3.3m四方の隅丸で正方形を呈す。壁は砂岩や珊瑚塊、ビーチロック塊を6～8段にほぼ垂直に丁寧に積み重ねた石積みとなる。隙間には小石を詰め、積み石の補強にもなっている。高さは約60～70cmである。なお、東壁の右半分からコーナーにかけての積み石の上部は、若干崩落を受けて内側にせり出していた。北壁の最下部積み石には幅約45cm～40cmの大型石2個を用い、平坦面を化粧面とする。西壁は、ほぼ中央部にあたる開口した出入口と北側の石積み構円形遺構、南側のベッド状遺構が接する。なお、四方の壁面全体は火を受けたと思われる薄く赤色化していた。

住居床面の中央よりやや東側寄りに炉が設置されていた。炉は長径約80cm、短径約70cmの円形の炉穴に7個の石で囲った円形石組炉である。炉穴内には下位に焼土、上位に木炭が混在する灰層が堆積していた。深さは約25cmである。

炉を中心とした床表面には同心円状に約2mの範囲に焼土や灰・炭を含んだ硬化面がみられた。住居内には柱穴は存在していないが、西壁の出入り口付近に径12cmのピット1個が検出された。なお、床面中央部の南・北端には径約25～30cmの扁平な円礫2個（砂岩と珊瑚塊）が置かれていた。

②「出入口」は、住居西側のほぼ中央部に設けられ、縦77cm、横100cm～110cmを測り方形を呈す。外側には、幅約40cm前後、厚さ約17cm前後の平石2個と幅約25cmの平石の3個を横一列に立てて埋め込み、踏掛け石としている。内側は4個の平石を水平に横一列に据え置いて、住居主体部との境石としている。

③「石積み構円形遺構」は、住居主体部の西側の出入口と並列して設け、周囲は石積みで囲んだ独立した遺構である。西側面は積み石が露呈した石垣構造で、住居の外壁部にあたる。遺構の規模は長さ約120cm、幅約60cmの長楕円形を呈し、北側の積み石は崩落を受けているが深さは約55cmで、3～5段からなる積み石で造られている。床面は住居主体部と同レベルである。遺構の形態や床面から1本の磨製石斧（243）が出土したことから、倉庫的性格のものとして捉えたい。

④「ベッド状遺構」は、竪穴住居主体部の南側に設けられ、住居主体部の床面より約50cm一段高

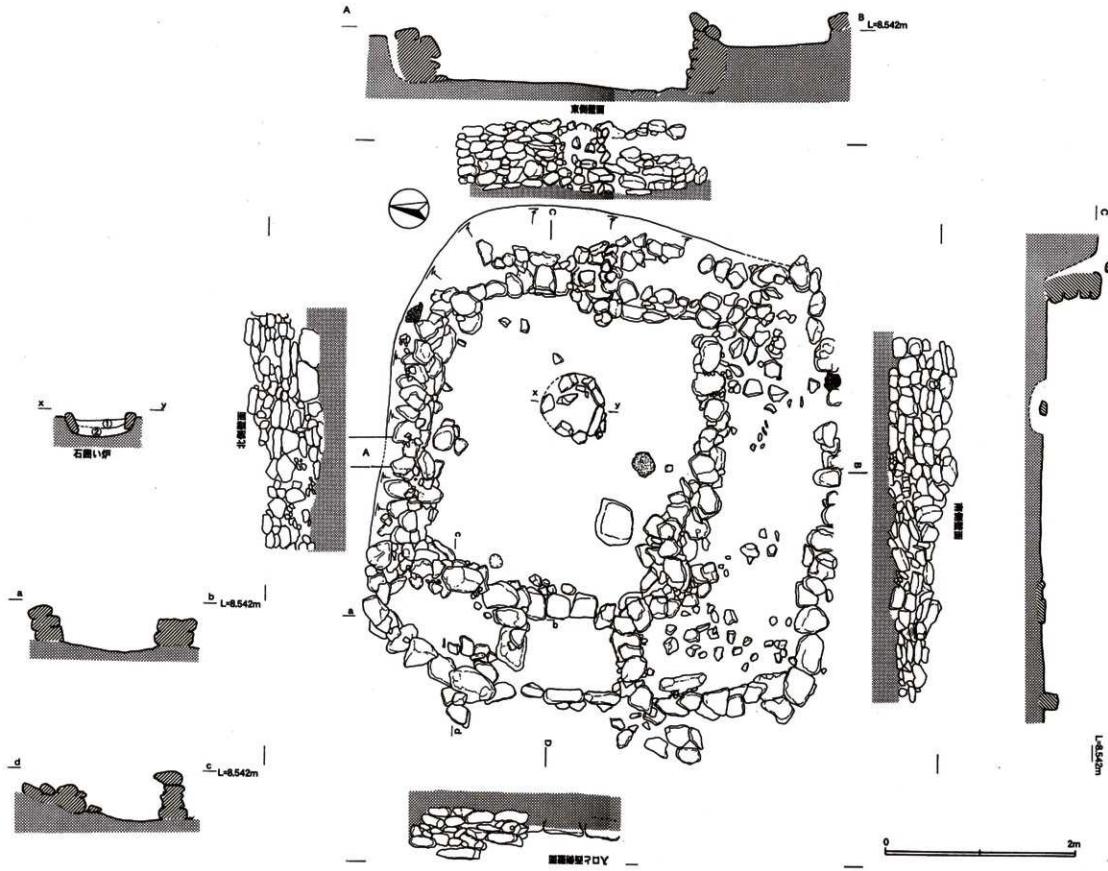
くなり、東・西側の両端は鎌型に屈折した「コ」字の形状を呈す。東・南側の外周の縁石は比較的大振りの礫を隙間無く一段を一列に据え置き、西側は崩壊して原形を留めないが数段の積み石からなり、外面は露出した石垣構造となる。遺構の規模は長さ4.4m、幅約1mの縦長で、東側端で縦約45cm、横約1m、西側端（出入口と接す）で縦約80cm、横約80cmを測る。

出土遺物（第26図）

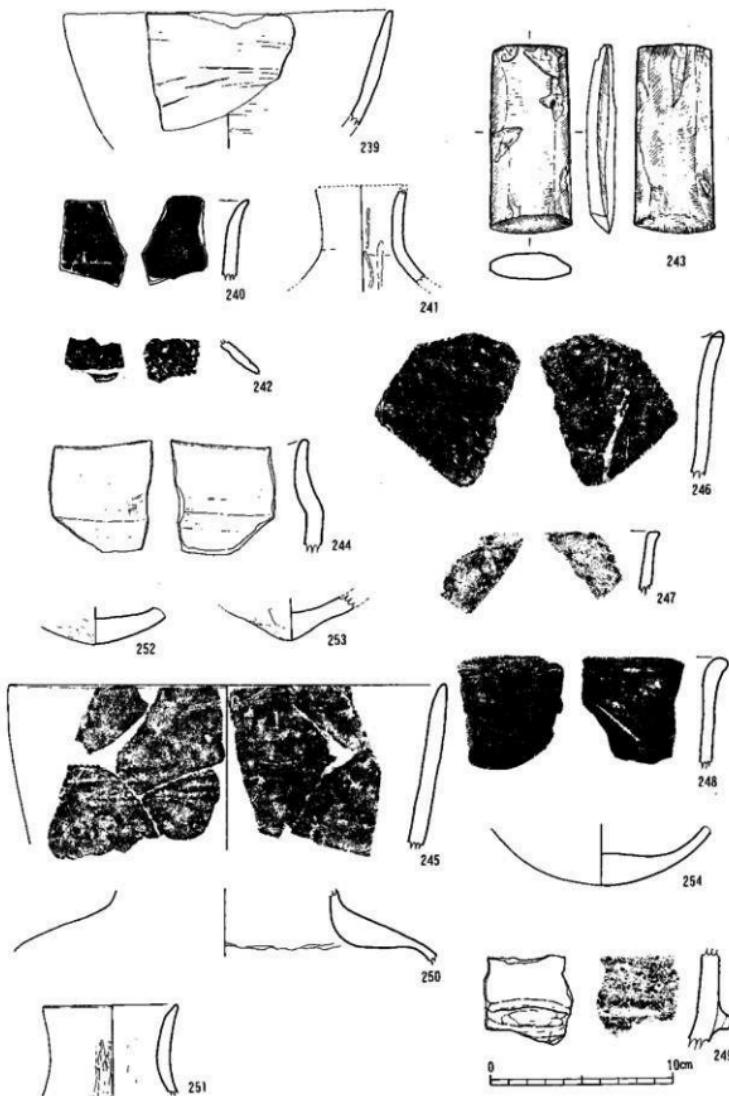
239～243は竪穴住居主体部から出土した。239は復元口径21.5径cmの鉢形土器である。口縁部は直行し、口縁端部は先細る。内外器面は弱いヘラ調整を施す。胎土は石英を含み、焼成は良、色調は内面面は赤褐色、器肉は暗灰色を呈す。240は口縁端部が外反する鉢形土器で、胎土は石英を含む細粒、焼成は良、色調は赤褐色、器肉は暗灰色を呈す。241は復元口径5cmの壺の口縁部である。口縁部はやや外開きで緩やかなカーブの頸部となる。外面はヘラ調整、内面はヘラ整形を施す。胎土は石英を含む細粒、焼成は軟弱、色調は赤褐色、器肉は暗灰色を呈す。242は壺の肩部片で、沈線文を施す。外器面は弱いヘラ研磨調整。胎土は砂粒を含む。焼成は良、色調は外面は赤褐色、内面は灰色。

243は石積み格円形遺構の床面に密着して出土した。短冊形の片刃磨製石斧である。長さ10.3cm、基部幅4cm刃部幅4.4cmで刃部で極僅かに拡張する。重さ150g。基部の頭と両側面は平坦、体部の縦横断面はともに緩やかに丸味をおび、裏面はやや平坦で、刃部は弧状の片刃となる。全面は丁寧な研磨が施されている。蛇文岩製。ノミ型磨製石斧である。

244～254はベッド状遺構から出土した。244～249は鉢形土器で、口縁部は内傾して外反する244、直行する口縁部の復元口径24cmの245、口縁部が外反する246～248がある。249はリボン形の外耳を持つ鉢形土器で、内面にススが付着している。250と251は壺である。251は復元口径7cmで研磨調整を施す。252、253は乳房状底部である。内外面共にヘラ調整で、252は胎土に金雲母を含む。焼成は堅緻、色調は赤褐色。254は丸底で、内底部は平坦に仕上げる。制作時の粘土織ぎ目を残す。胎土は砂粒を含み、焼成はやや軟弱、内外面の色調は赤褐色で器肉は黒色となる。



第25図 石積み石囲い竪穴住居



第26図 住居内出土遺物

ま　と　め

龍郷町の主な遺跡は町北部、笠利町と接する陸繫部にあたる低地砂丘地に集中して所在する。

本格的な遺跡の発掘調査は、1984年に龍郷町教育委員会を調査主体とする白木原和美熊本大学考古学研究室による手広遺跡がある。調査の結果、砂丘に立地する手広遺跡は、石組遺構をはじめ、面縄西洞式から兼久式土器などが出土し、層位との関係からその変遷過程など奄美における先史文化を明らかにした重要遺跡な遺跡として注目された。また、近年、ウフタ遺跡やウフタⅡ遺跡の調査も行っているが、いずれも砂採取や道路拡幅工事に伴う緊急発掘調査を起因とし、町は、熊本大学や笠利町等に調査依頼や協力を得て、開発と埋蔵文化財保護との調整を図りながら埋蔵文化財保護行政を進めているところである。

今回のウフタⅢ遺跡は、県営一般過疎基幹農道整備事業に伴う緊急調査である。遺跡は標高約20mの海岸段丘北側後背地の西側に緩やかに傾斜する標高約10m弱の砂丘地に位置し、縄文晩期～弥生前期相当期の貝塚遺跡である。なお、遺跡は南北側に抵がるものと予想される。

遺構にはチョウセンザザエ等の9か所の貝集積や土坑5基、南西諸島で初めての石積み石囲い堅六住居を検出した。遺物には鉢形・壺形・碗・浅鉢等の土器、打製石斧・磨石・石皿等の石器、貝製品、骨角器、チョウセンザザエやイソハマグリ等131種におよぶ貝類、シカ・イヌ・クジラ等の哺乳類、ウミガメの爬虫類、サメ・ブダイ等の魚類が出土した。

出土土器について、有文土器の10,148～155は小片で全体像は掴めないが縄文後期の神野貝塚出土の嘉徳Ⅱ式系と思われる。18,19,20,21,22,23,40～51は阿波連浦下層式を想定し、167～192は夜白式系刻目凸帯文、116(孔列文土器)～129は縄文晩期研磨の浅鉢形土器である。21,60,62はカヤウチパンタ式。54～59の口縁部がく字状に屈折する鉢形土器や92～103の壺形土器、132～138の乳房状及び尖底の底部、145の脚台は沖縄土器形式から仲原式及び阿波連浦下層式相当期のものと思われる。仲原式及び阿波連浦下層式相当期の編年については、現在奄美・沖縄両諸島における暫定編年の前V期末に位置づけられており、その終末は弥生時代まで下ることも想定されている。なお、奄美における壺形土器の出現については喜念I式以降とされているが、手広遺跡の調査では嘉徳I・II式、面縄西洞式、サモト遺跡では面縄西洞式に伴って出土し、喜念I式との中間を埋める仲原式・阿波連浦下層式相当期の壺形土器として好資料となった。

外耳土器については、本遺跡で特徴的な土器であり、器形は口縁部が直行する20,47,65,78,79と口縁部が外反する66,77の2タイプがある。この一群で多数を占めるビーナツ型の外耳は、土器の胴部上位に4つ持つ33,47,56,59,65～91、さらにこれらの外耳の中には紐通しの孔を持つ113,114,115、その他、縦長の外耳3、横長の外耳7,28がある。同類の土器は手広遺跡第6・5層に見られる。また、11,12,122～130は低い高台付き底部に紐通しの2対の穿孔を有するもので手広遺跡第9・6層に同様な土器が出土している。なお131は外底面に4つの瘤(脚)に穴を穿っている。これら穿孔を有する外耳土器や高台付き底部の土器は、土器の装飾を意味するほかに、いわゆる紐通しのための穴であることから、土器を釣り下げて使用したことが窺われ、注目される資料である。外耳土器の出現については面縄西洞式まで遡るとされているが、本遺跡ではビーナツ型の外耳が主流であり、仲原式の三日月を呈する外耳とは若干の違いが見られるものの、また手広遺跡では第9,6,5

層のカヤウチバンタ式や刻目凸帯文と共に伴して出土していることから、弥生前期まで存在していることがわかる。

9. 161については工字状文土器に關係する南島における初現の土器として留意したい。工字状文について、石川日出志先生の所見によると【浅鉢(9)の工字状文の左端部に復元できる上下の縫スリット(区切り線が、工字状文の上端をなす横線に直結する点に違和感を覚える。しかし、口縁部のB突起状刺り込みが、土器中央部の工字状文縫スリットと対応する位置にある点を重視して、東日本の工字状文と關係があると判断したい。深鉢(161)は文様描出が粗大であり浅鉢例から派生したものであろう。浅鉢は、東北地方を除く(地方内面沈線がないので)いずれかの地域から搬入された可能性はあるが判断しかねる。むしろ文様描出は違うとも浅鉢と深鉢ちで同じ構図がみられるることは重要で、すでに近畿地域で工字状文が在地化している可能性を考えたい。同じく美大島手広遺跡熊本大学調査(熊大動報告20)地点第6層の有孔土製円盤(第13図上)の工字状文や土器(第9図8)の類似構図も一連の状況である可能性を考慮したい。その際に、高橋貝塚の工字状文土器(『考古学集刊』)なども同じ土俵に載る可能性がある。大洞C 2式新段階からA 1式古段階に至る段階に工字状文を含む東日本系土器が高知県居德遺跡や福岡市板付遺跡・雀居遺跡にみられるが、これが南九州南部にもたらされ、文様構図として当地域で採用されて変化を遂げた仲にウフタⅢ遺跡例を位置づけたい。こうした現象は、『古代吉備』第19集と論集『突帯文と遠賀川』の拙稿(石川1997-2000)で、瀬戸内へ近畿に認められ、近畿ではこれ基礎となつて流水文が成立すると見たこと、また最近では未発表ながら遠賀川式の木葉文も同様に四国・中国地方で成立したと考えるのと一連のもとであろう。】との見解を述べている。

以上、当遺跡は、手広遺跡第9・6・5層との関係からカヤウチバンタ式類似土器や刻目凸帯文土器と共に伴することや仲原式～阿波連浦下層式相当期に比定され、また刻目凸帯文土器との関係や9の浅鉢、161深鉢の東日本系土器想定の工字状文大洞系のものと推定される(注1)など縄文晩期～弥生前期相当の遺跡として位置づけたい。

また出土遺物の中で、大島郡伊仙町喜念クバンシャ岩陰墓出土に極めて類似している231の骨角器の大型針は南島で2例目で大型海洋動物の生息の存在を知る貴重な資料であるとともに、動物遺体として奄美諸島で現存していないシカ(大腿骨、中手骨、足根骨)の出土例は初めてであり貴重な発見となった。

本遺跡の石積み石囲い竪穴住居は、西側に傾斜した遺物包含層である混貝砂層を掘り込んで砂丘に所在する。母屋(竪穴住居の主体部は石積み石囲い竪穴)、出入り口・石積み構円形遺構・ベッド状遺構が一体となった多重構造住居で、深さ約70cmで7段の積み石の状況・炉を持つなど保存状態も極めて良好で全体像を把握できた。このような形態の住居(住居の内部壁面は赤色化を呈し火災を受けた可能性がある)は南島では初現であることなど、南島における住居の有り方に一石を投じた。

これまで奄美・沖縄諸島における縄文時代後期から弥生時代の石組住居や敷石住居は多数の遺跡で発見され報告されている。その一部を紹介すると、從来奄美住居とされた石組住居についてであるが、サモト遺跡の例は石組み住居の典型的なものといわれている。住居は柱穴を伴わず、掘り込みは不明であるが高さ約20cm、幅約20～40cmに帯状に人頭台の石を巡らしたもので、炉跡も検出され

ている。同様な石組み住居は宇宿貝塚や住吉貝塚で検出されている。また、手広遺跡からも2基発見されている。沖縄においては仲原遺跡、43基の住居が検出されたシヌグ堂遺跡の住居は地山を掘り込み、琉球石灰岩の岩盤の一部を床面と壁面に利用している。炉を伴い柱穴が巡る。なお積み石を伴わない住居も存在する。宇佐浜遺跡など多数の遺跡で発見され、柱穴の伴わない住居が多数を占める。ウフタ遺跡の住居でも検出されていないが、大半の遺跡の住居にも伴っていないことは、住居の構造・形態に起因するものか、あるいは遺跡が砂丘占地によるとも考えられる。

表：奄美諸島及び沖縄諸島における縄文時代晩期～弥生時代の住居跡遺跡

遺跡名	住所	立地	規模等	炉	時代
住吉貝塚	沖永良部知名	旧砂丘	2×3m 3.1×2.5m	無	縄文晩期～弥生中期東側3分の1を珊瑚礁面を住居の壁、西側に壁を配す
サウチ遺跡	笠利町サウチ	砂丘	2基 圓丸方形(一辺2.3m 2m)	無	弥生中期
宇宿貝塚	笠利町宇宿	砂丘	2基 圓丸方形(一辺2.3m 一辺2m)	無	縄文晩期～弥生中期
タチバナ貝塚	十島村中之島		8基 円形(4~5m)	屋外炉	縄文晩期～弥生中期
サモト遺跡	住用村サモト	山麓	石組・竪穴住居 6基(3m以下)	火床	縄文晩期
手広遺跡	龍郷町手広	砂丘	平地住居	無	縄文晩期～弥生中期
ハンタ遺跡	喜界町ハンタ	海岸段丘	8基 圓丸方形(一辺3m)	焼土	縄文晩期相当
上城遺跡	与論町	台地	17基 石圓い・敷石	無	縄文晩期相当
塔原遺跡	天城町塔原	断崖	5基 石圓い・竪穴住居(3~4m)	無	縄文晩期
古座間味貝	座間味村古座間味	石灰岩段丘	4基 石組・竪穴住居(2~6m)	無	貝塚時代前期～グスク時代
宇佐浜貝塚	国頭村宇佐浜	段丘	8基 石組圓丸(2m)	無	貝塚時代前期後半～中期
仲原遺跡	与那城町伊計島仲原	段丘	11基 石組・竪穴住居(一辺3m)	無	貝塚時代中期
シヌグ堂遺	宮城村シヌグ	台地	44基 積石住居(3m圓丸)	無	貝塚時代中期
南方遺跡	具志川市田場小学校南方	台地	17基 敷石住居(2~4.5m)	無	貝塚時代中期
地荒原遺跡	具志川市地荒	台地	19基 敷石住居	無	貝塚時代中期
高峯遺跡	与那城高峰	段丘	20基 石積み竪穴住居(2.2~3m)	屋内炉	貝塚時代中期
安座間原遺	宜野湾市真志喜安座間原	砂地	90基 竪穴住居(2~4m)		貝塚時代中期～後期
ヌバタキ遺	宜野湾市喜友名東原	石灰岩	50基 石灰岩塊を運らすタイプ 地山赤土を運らすタイプ		貝塚時代中期

ウフタ遺跡の石積み石圓い竪穴住居については、これまで奄美・沖縄の竪穴住居の特色は石組・敷石住居といわれ、これらは立地は砂丘に構築されている、石圓い石組で構成する、炉を伴う、柱穴を持たない、石は人頭大のものを2段に重ねた例が多いなど共通点があるが、ウフタ遺跡の住居の特徴である積み石の石圓い竪穴住居は、これらと類似性はもつものの、竪穴部(母屋)が深いことや多重構造住居であることなど、ウフタ遺跡の特異性がさらに浮かび上がってくる。

なお、奄美・沖縄の主な住居に関わる遺跡の年代については、白木原和美氏は『伊是名(沖縄)・キガ浜(沖縄)は縄文時代の後期に当てよく、手広第6層(奄美・2690+ - 808.B.P.)・サモト(奄美)・仲原(沖縄)・シヌグ堂(沖縄)などがそれよりやや遅れ、サウチ(奄美)・住吉(奄美)など弥生時代前半に相当するとされている。ウフタ遺跡の住居の年代については、住居に伴う出土土器4点と資料に乏しいが、奄美・沖縄における仲原式、阿波連浦第1層段階に想定される暫定編年の前V期末頃

(晩期後半～弥生)に位置付けされる混貝砂層を掘り込んで構築されていることから、現時点では弥生期に相当するものと位置づけたい。』と述べられている。従って本遺跡の住居の位置づけは、白木原編年による奄美・沖縄の住居編年の仲原・シヌグ堂に平行及び後続するものと思われる。

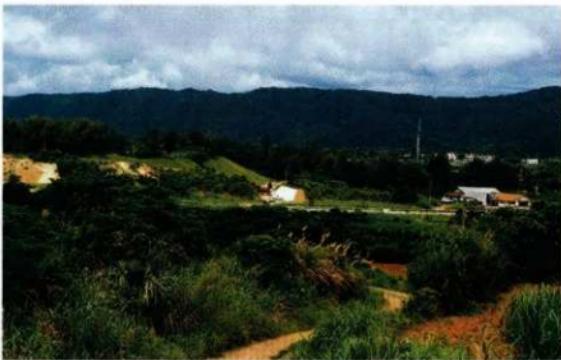
奄美は縄文後期～弥生前期には、沖縄諸島の影響を色濃く受けつつまた、九州・東日本の文化も甘受し相互交流が行われ、奄美特有の文化を築いている。土器様式や住居等についての編年や変遷・整理など今後の課題はつきない。

龍郷町教育委員会は、石積み石囲い竪穴住居の重要性を鑑み、埋蔵文化財の保存活用のため、周辺を取り込んだ展示公開のプランが持ち上がり、町や県農政部局等とその整備方法や道路工事設計変更等(道路整備事業の設計段階から道路計画高は住居遺構突出面より約1～2m下位にあたることから工事による破壊行為には及ばないものであり調査後は埋め戻し、現在は道路面下に現存している)について協議を重ねたが、課題が山積し困難であることとし整備プランは断念せざるをえなかった。しかし、鹿児島県教育委員会の協力で平成14年度にオープンする上野原縄文の森に石積み竪穴住居が復元される計画があり、蘇ることとなった。

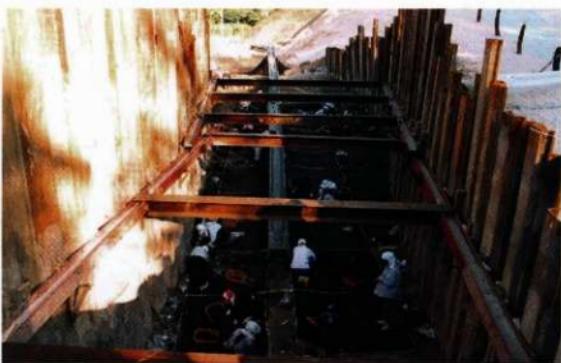
参考文献

- 笠利町教育委員会 「宇宿貝塚」『笠利町文化財報告書』笠利町教育委員会 1978年
熊本大学文学部考古学研究室 「手広遺跡(概報)」『研究室活動報告20』 1986年
熊本大学文学部考古学研究室 「ウフタ遺跡」 1982年
白木原和美 「南西諸島の先史時代」『白木原和美南東関係論文選』龍田考古会 1999年
龍郷町教育委員会 「ウフタ遺跡Ⅱ遺跡」龍郷町教育委員会 1995年
白木原美他 「サモト遺跡(2)」『住用村文化財調査 N.O.2』住用村教育委員会 1984年
沖縄県教育委員会 「仲原式土器の提唱について」『紀要第1号』 1984年
沖縄県教育委員会 「宇佐浜遺跡」『沖縄県文化財報告書 93集』沖縄県教育委員会 1989年
沖縄県教育委員会 「シヌグ堂遺跡」『沖縄県文化財調査報告書第67号』 1985年
伊是名村教育委員会 「伊是名遺跡」『伊是名村文化財調査報告書大4集』 1973年
石川日出志 「岡山県出土刻目突帯文期の東日本系土器」『古代吉備第19集』 1997年
石川日出志 「突帯文期・達賀川期の東日本系土器」『土器持寄会論文集』 2000年
伊仙町教育委員会 「喜念クバンシャ岩陰墓」『伊仙町埋蔵文化財報告書(7)』 1988年
中山清美 「奄美諸島における縄文晩期相当の土器について」沖縄・鹿児島県考古学会 1988年
与論町教育委員会 「上城跡 上城遺跡」与論町埋蔵文化財発掘調査報告書(1) 1990年
新里貴之 「南九州島における弥生平行期の土器」『人類史研究11』 1999年
下地安広 「沖縄県嘉門貝塚出土の楽浪系土器」『人類史研究 第11号』 1999年
小田富士雄 「沖縄の弥生時代と外来遺物」『高宮廣衡先生古希記念論集刊行会』 2000年

図 版



ウフタIII遺跡全景



調査風景



調査風景

図版2



土坑2号検出状況



遺物出土状況



遺物出土状況



遺物出土状況
(チョウセンサザエ集積)



遺物出土状況
(骨角器)



貝層・石圓い壁穴
住居の切合状況

新石器石斧
石器石斧
(西周时期)
出土石斧



土器出土状况



土器出土状况

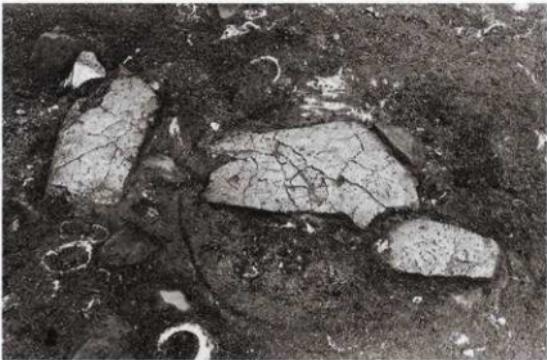




土器出土状況



亀の甲羅出土状況



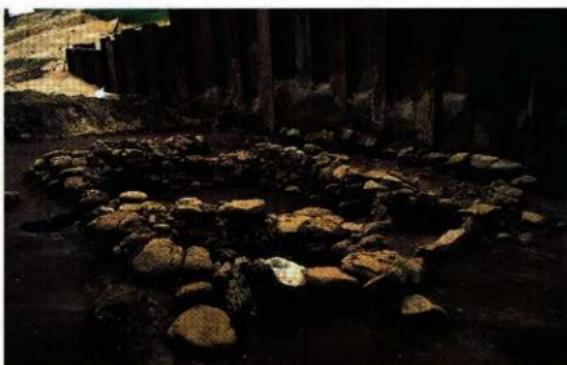
亀の甲羅出土状況



石積み石囲い竪穴住居西側出入口より



石積み石囲い竪穴住居南側より



〈石積み石圓い整穴住居〉
北西より



〈石積み石圓い整穴住居〉
北側より



〈石積み石圓い整穴住居〉
南側より



〈石積み石圓い竪穴住居
出入口〉



〈石積み石圓い竪穴住居
出入口近影〉



〈石積み石圓い竪穴住居
主体部(母屋)〉



〈石積み石圓い竪穴住居〉
出入口の踏掛け石



〈石積み石圓い竪穴住居〉
ベッド状遺構



〈石積み石圓い竪穴住居〉
石積み状況

図版10



(石積み石囲い竪穴住居内)
炉検出状況



(石積み石囲い竪穴住居内)
炉検出状況近影



(石積み石囲い竪穴住居内)
出土遺物



〈石積み石圓い堅穴住居〉
石積み横円形遺構

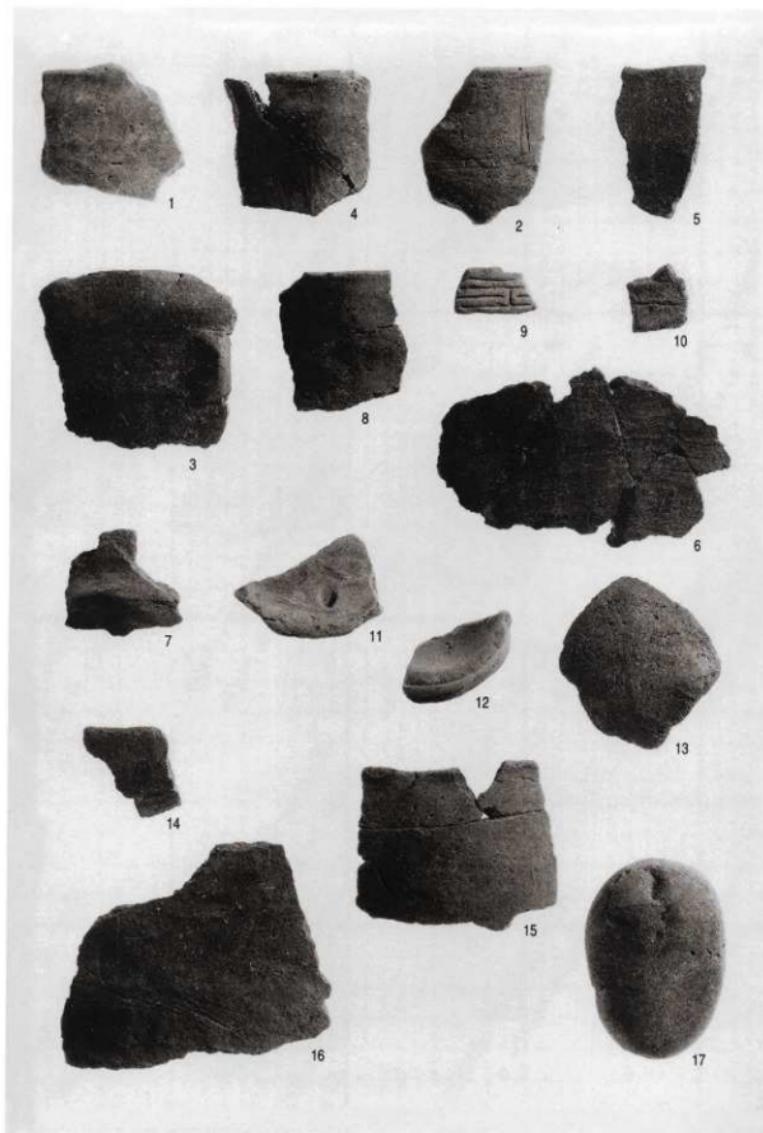


石積み横円形遺構



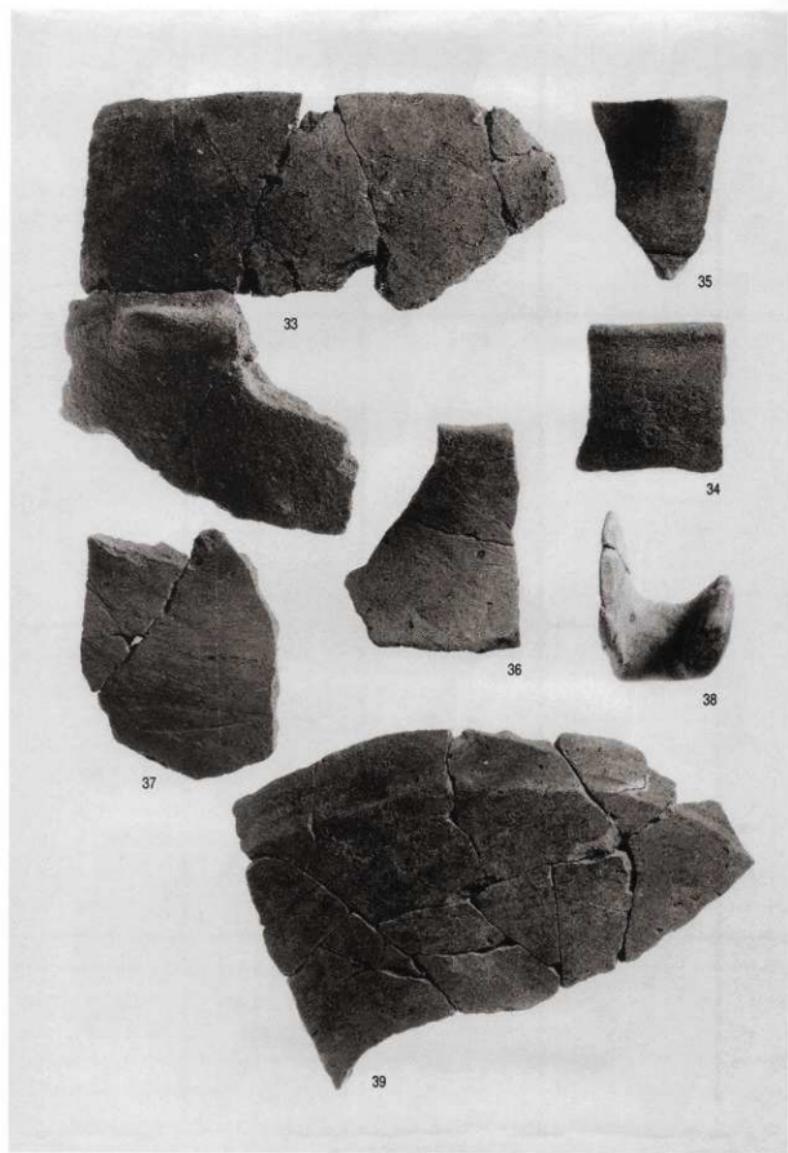
ベッド状遺構



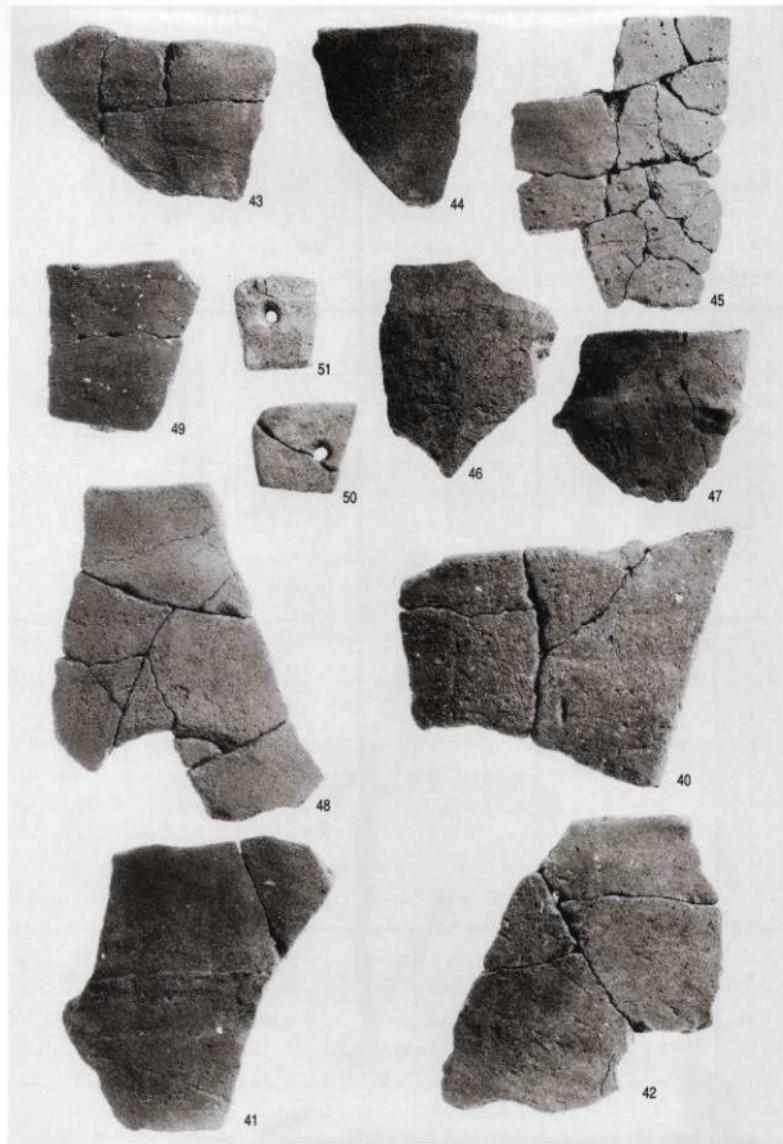


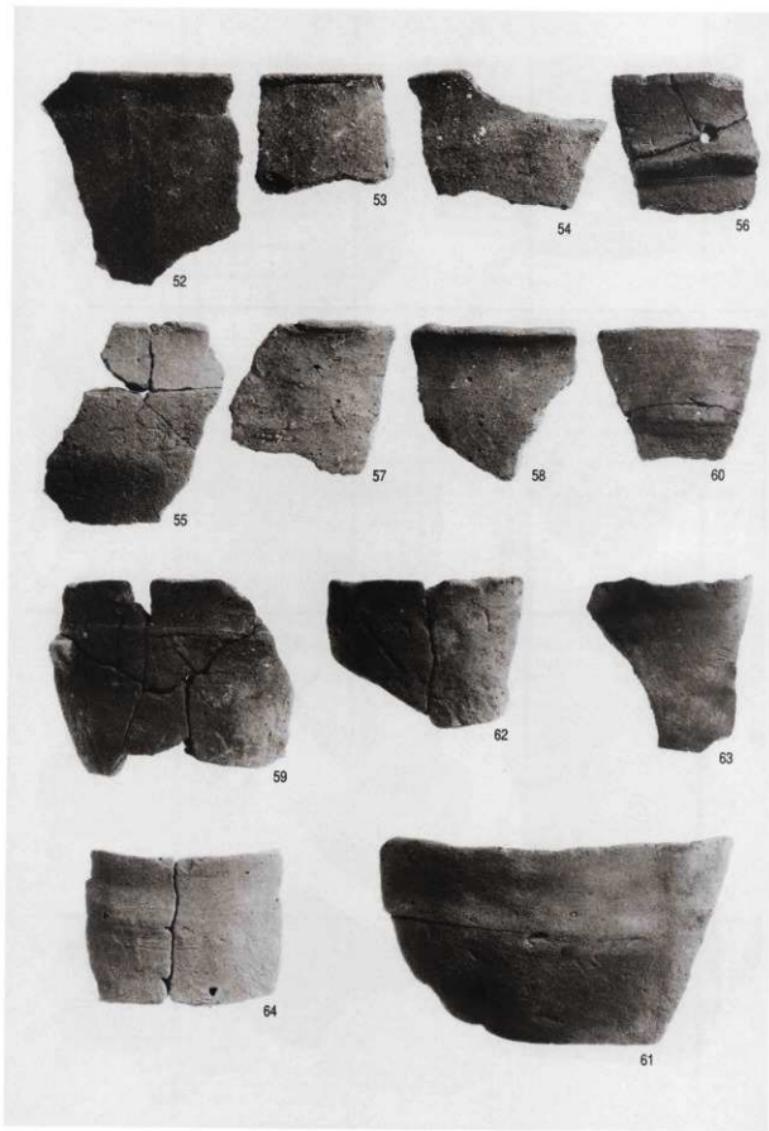
圖版14 土坑內出土遺物



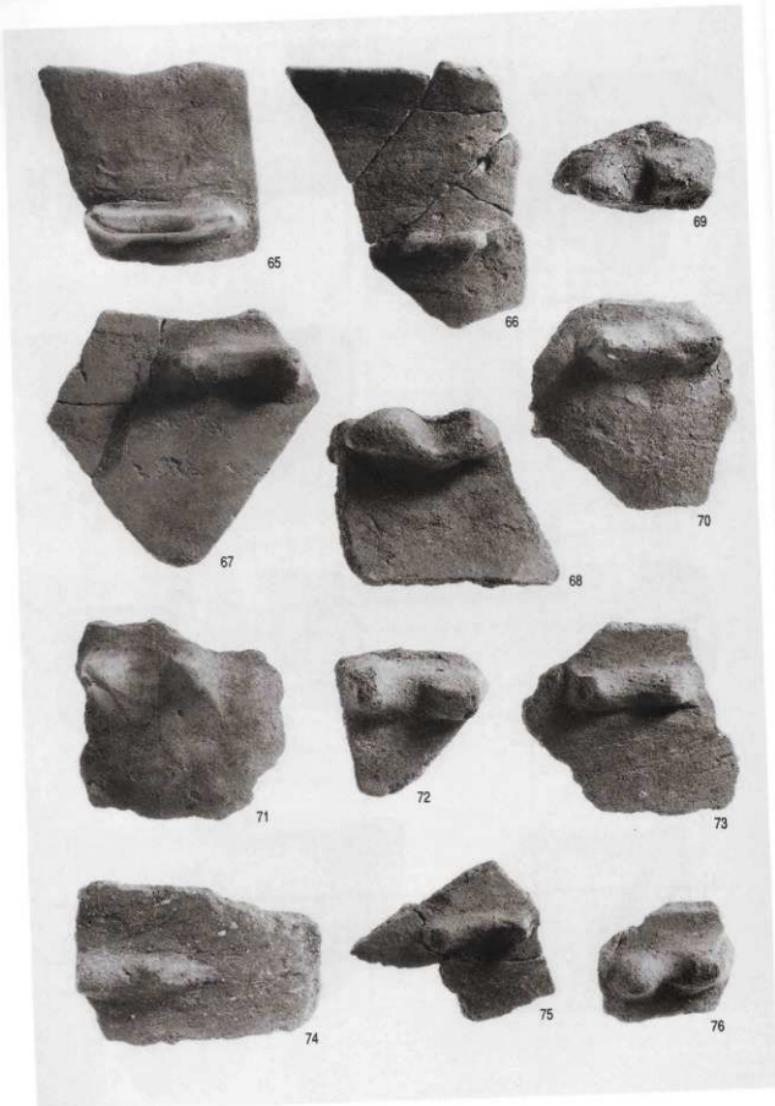


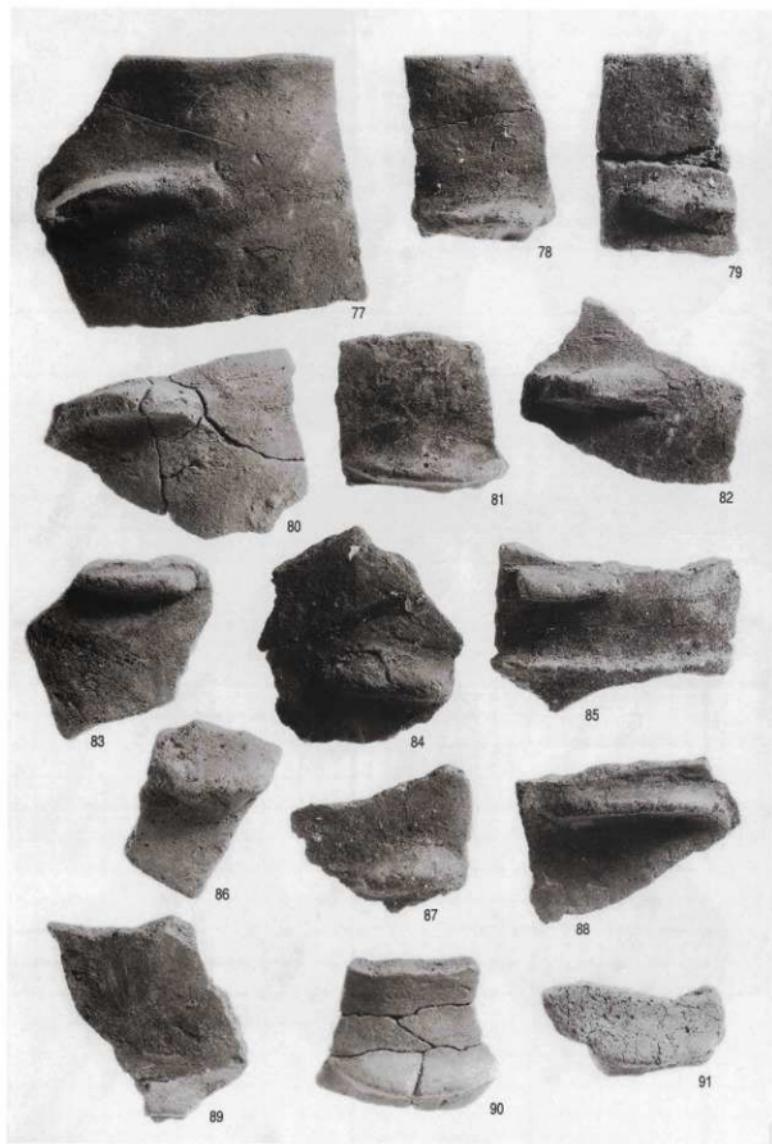
図版16 土器



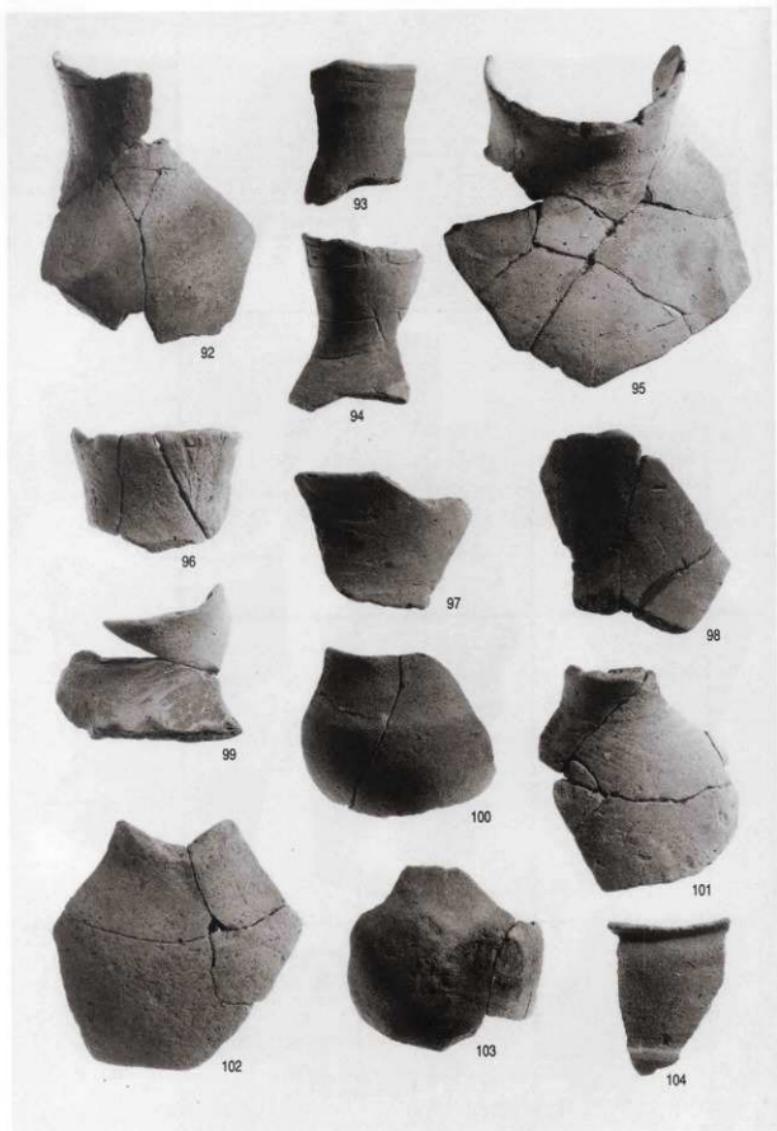


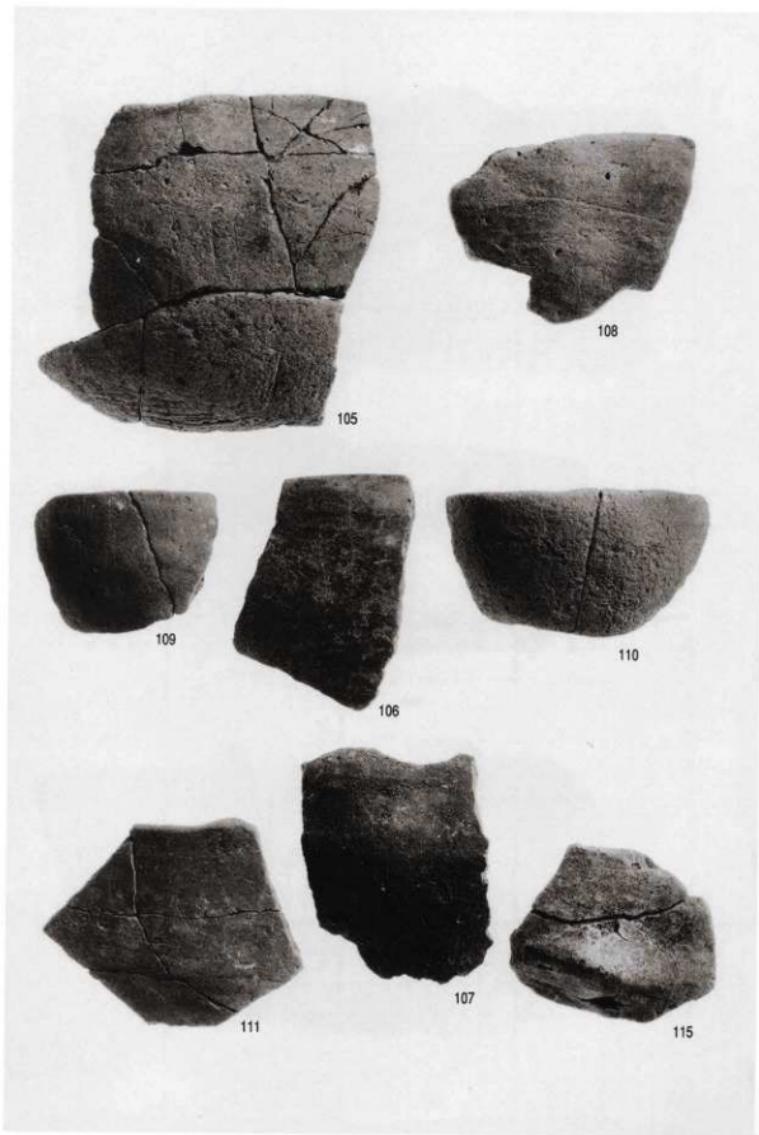
図版18 土器





図版20 土器





図版22 土器



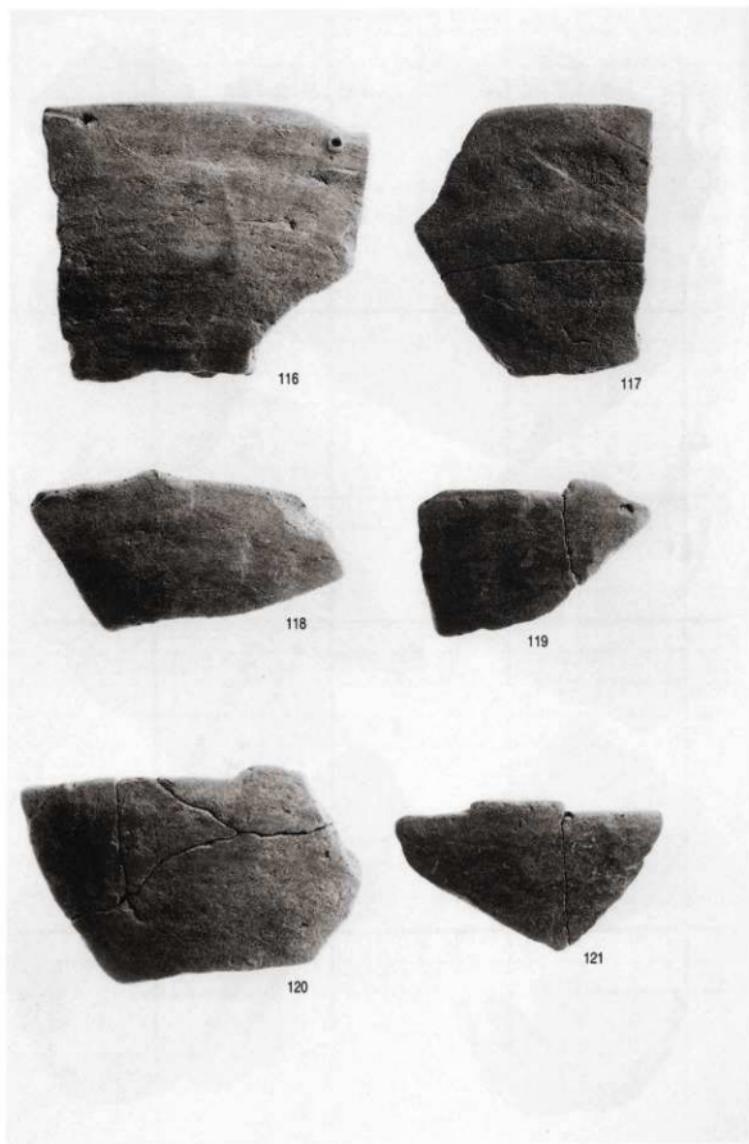
113



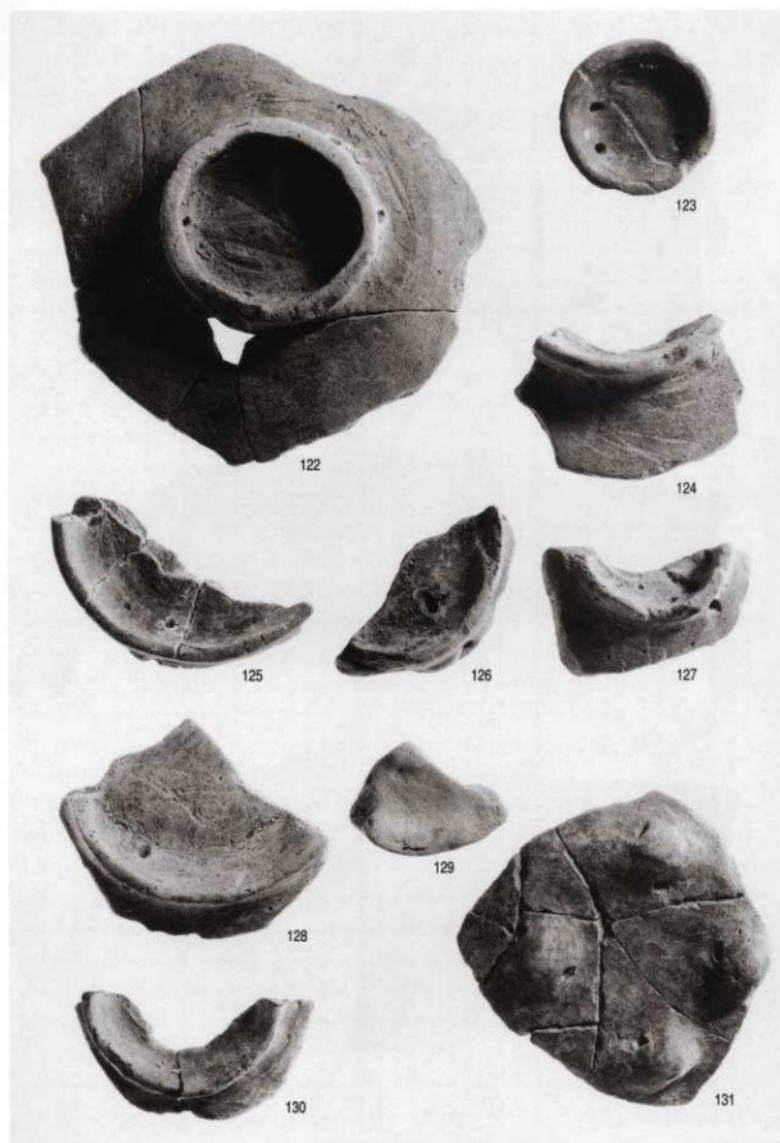
114

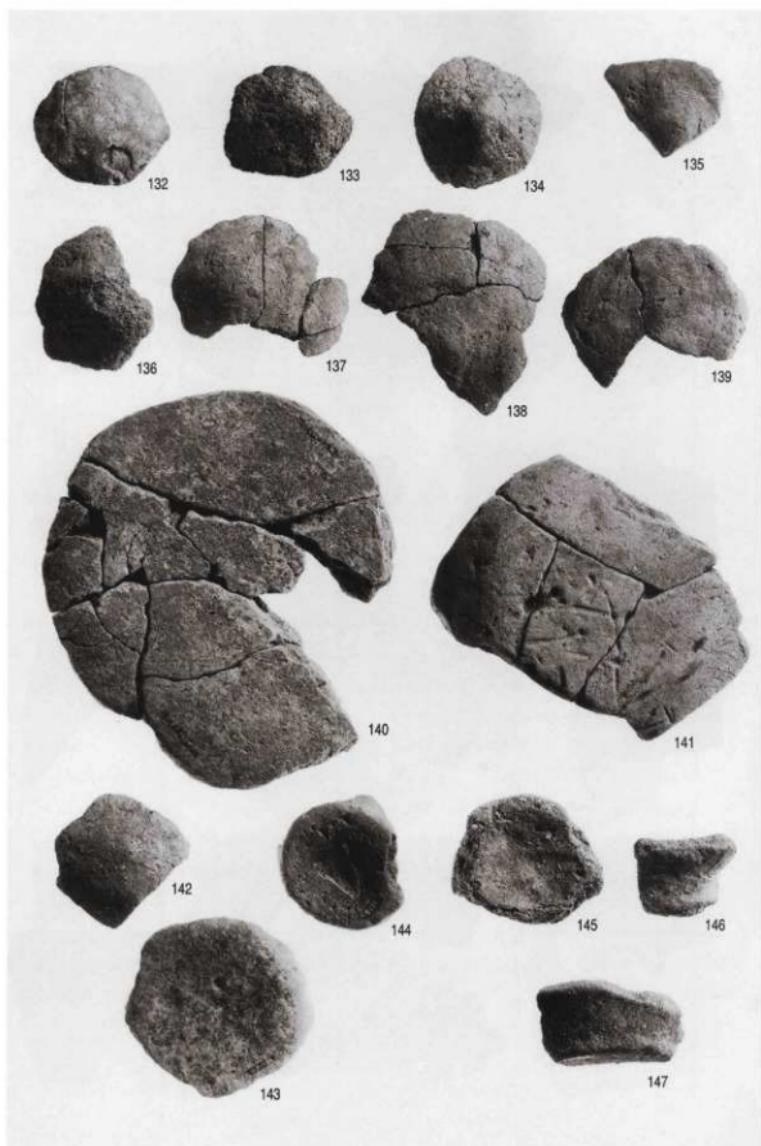


112

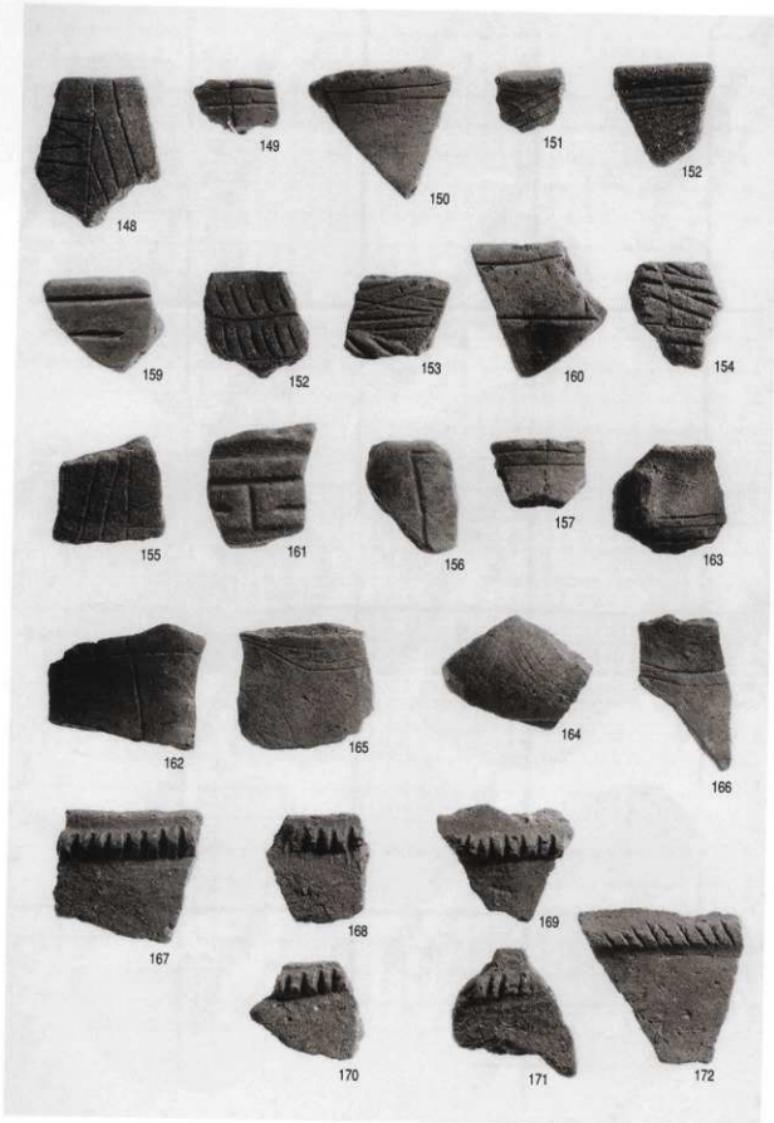


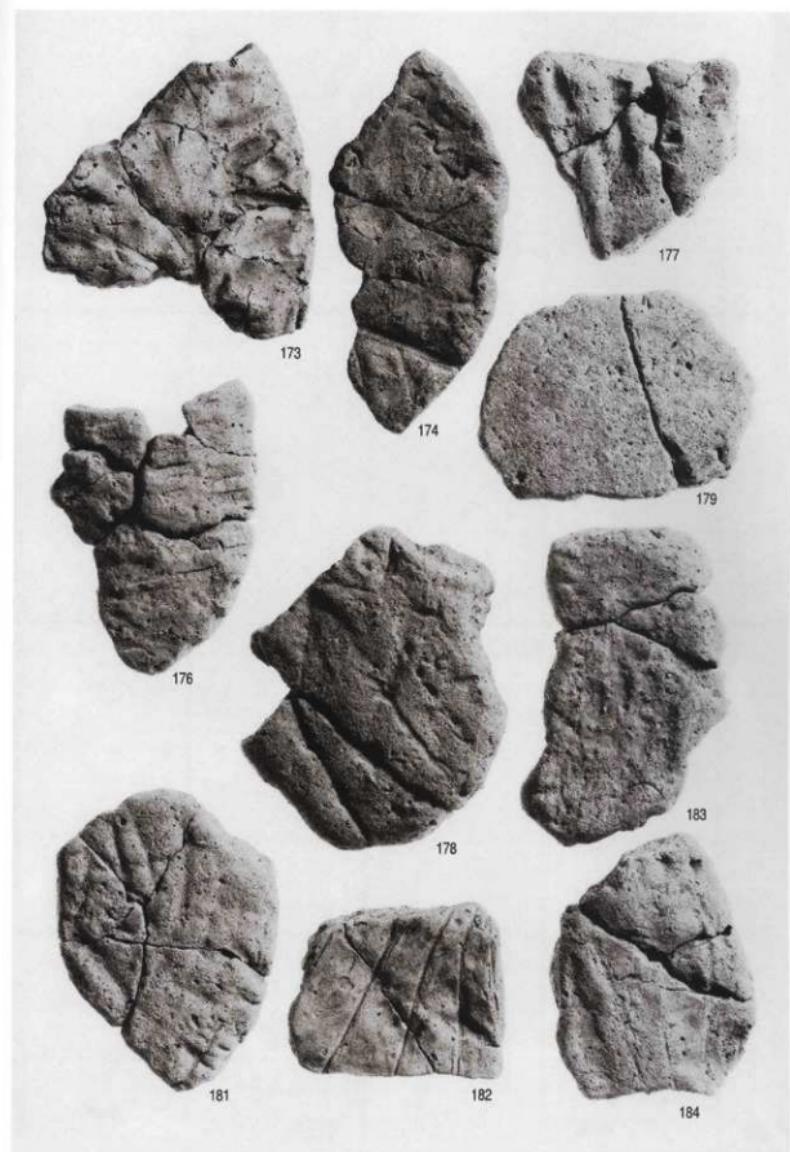
図版24 土器(底部)





図版26 土器



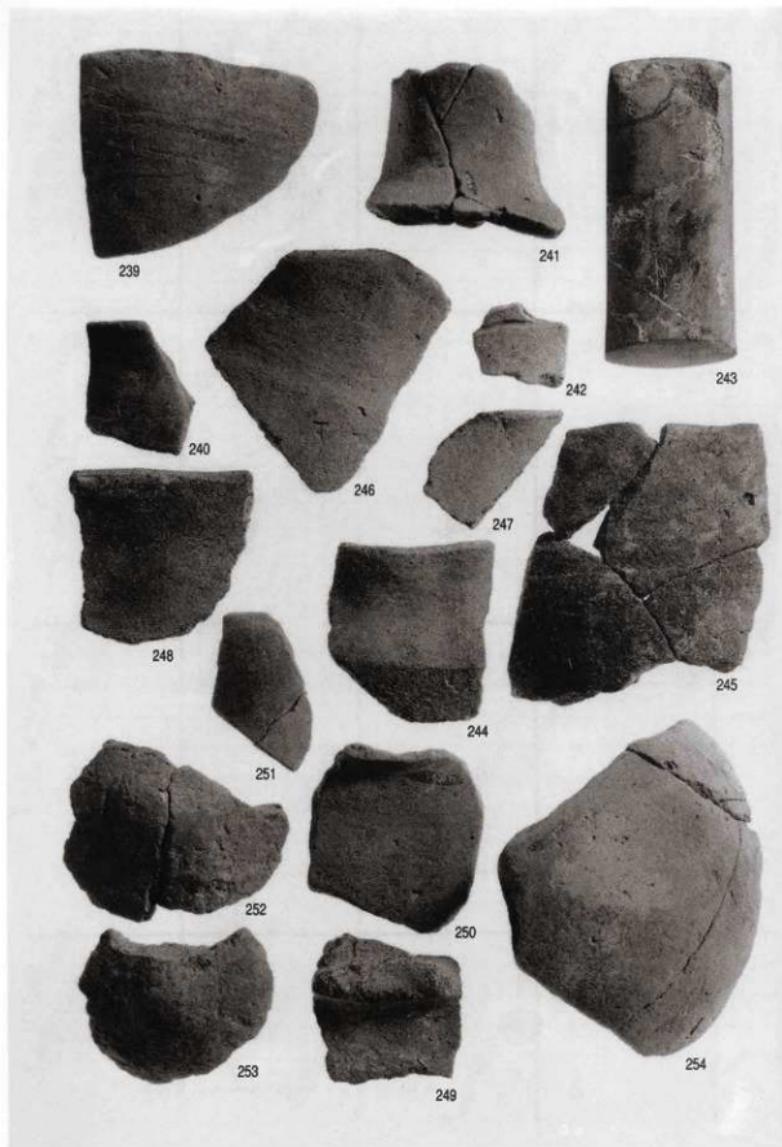


图版28 石器(磨石、凹石等)





図版30 石積み石圓い竪穴住居内出土遺物



貝類の分析

行田義三

ウフタⅢ遺跡から出土した貝類は44科131種で内訳は下記の通りである。

海産	腹足類（巻貝）	25科	88種
	斧足類（二枚貝）	12科	34種
	頭足類（イカ・タコ）	1科	1種
陸貝		4科	6種
淡水産	腹足類（巻貝）	1科	1種
	斧足類（二枚貝）	1科	1種
		44科	131種

出土した貝類の殆どは食用に供されたと思われる。特に出土数の多いイシダタミ、ギンタカハマ、サラサバテイ、ニシキウズ、オオウラウズ、カンギク、コシダカザエ、チョウセンザエ、アマオブネ、オハグロガイ、マガキガイ、スイショウガイ、ハナマルユキ、オキニシ、テツレイシ、コオニコブシ、オハグロガキ、アラスジケマン、イソハマグリ、リュウキュウマスオ、大型のヒレジャコ、シラナミ、ヒメジャコ、ホラガイなどは食用のために好んで採取されたものであろう。

オオツタノハ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、ゴホウラ、スイジガイ、ホラガイ、メンガイの類、は食用のほか加工して貝輪、貝さじ、煮沸器、螺蓋利器などの生活用品としても使われていた形跡がある。

ヤエヤマヒルギシジミは泉川遺跡からも出土している。現在、この貝は八重山諸島、沖縄諸島、奄美大島のマングローブ林床の泥底に生息しており、奄美大島・住用川河口は分布の北限となっている。食用としての価値はそれほどあるとは考えられないし、何をするため住用川河口まで出かけて採取したのだろうか。

オウムガイはフィリピンの深海にすむイカの仲間（オウムガイ目）で、殻の中にいたイカ（身）が死んだ後に海流（黒潮）に流されて海岸に漂着したものを拾ったと考えられる。

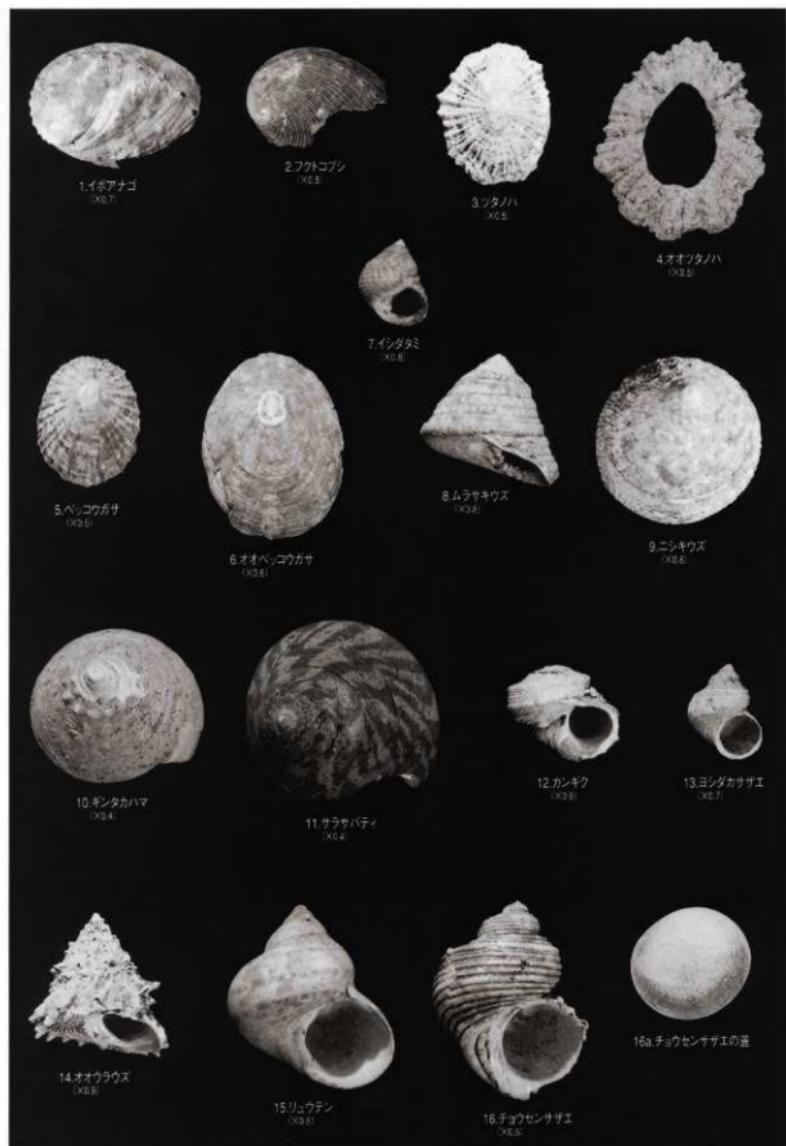
大変不審な点は、陸産のオオヤマタニシ、オオシマアズキガイ、ヒルグチギセル、タメトモマイマイの出土数が多いことである。オオヤマタニシ、タメトモマイマイは食用に出来ないことはないが、オオシマアズキガイは殻高が1cmの微小種、ヒルグチギセルも口が狭く肉を抜くのは至難の技であり、出土品は何れも壊された形跡はない。食用以外の用途も思い浮かばない。ヒルグチギセル、オオヤマタニシは現在、奄美大島（金作原・湯湾岳）・加計呂麻島・徳之島（井之川岳・犬田布岳・天城岳）の深い森林に息んでいる。

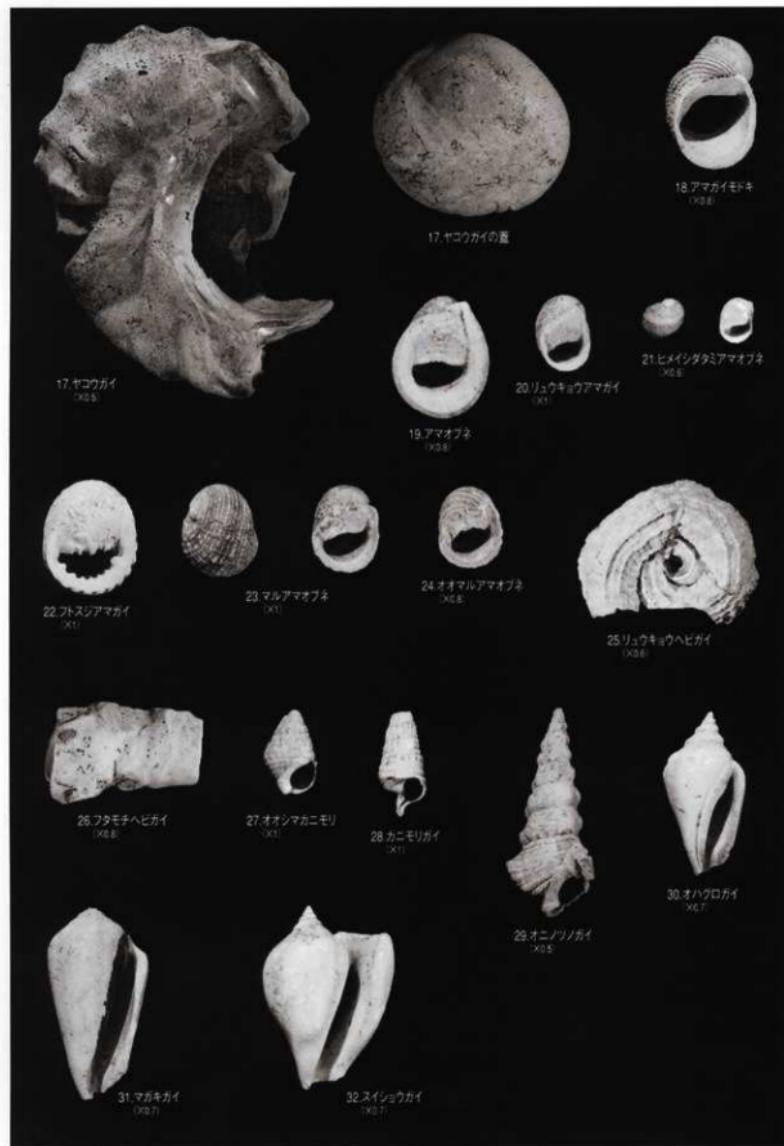
出土貝類一覧表

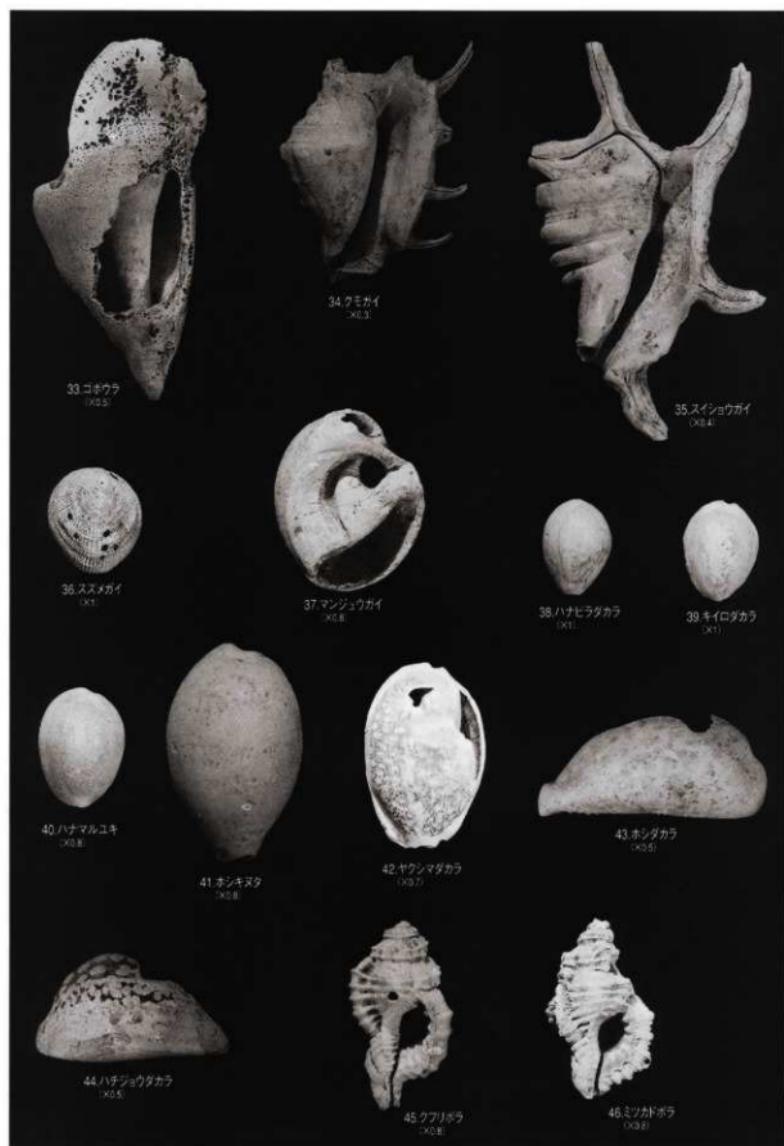
番号	和名(科名)	出土数	生息環境	生息分布	写真の倍率
	腹足類(海産)				
1	ミミガイ科				
1	イボアナゴ	2	潮間帶岩礁	紀伊半島以南	×0.7
2	フクトコブシ	1	潮間帶岩礁	九州南部以南	×0.8
ツタノハ科					
3	ツタノハ	6	潮間帶岩礁	房総半島以南	×0.9
4	オオツタノハ	3	波あたりの強い岩礁	トカラ列島以南	×0.5
5	ベッコウガサ	5	潮間帶上部岩礁	北海道南部以南	×0.5
6	オオベッコウガサ	26	潮間帶岩礁	奄美諸島以南	×0.6
ニシキウズ科					
7	イシダタミ	333	潮間帶岩礁	北海道南部以南	×0.5
8	ムラサキウズ	8	潮間帶岩礁	紀伊半島以南	×0.8
9	ニシキウズ	87	潮間帶岩礁	紀伊半島以南	×0.8
10	ギンタカハマ	98	潮下帶上部・岩礁	房総半島以南	×0.4
11	サラサバティ	214	潮下帶上部・岩礁	奄美諸島以南	×0.4
リュウテン科					
12	カンギク	82	潮間帶岩礁	紀伊半島以南	×0.8
13	コシダカサザエ	91	潮間帶～水深20m・岩礁	房総半島以南	×0.4
14	オオウラウズ	26	潮間帶～水深20m・岩礁	種子島～屋久島以南	×0.9
15	リュウテン	1	潮間帶～水深20m・岩礁	種子島～屋久島以南	×0.8
16	チョウセンサザエの蓋	2197	潮間帶～水深30m・岩礁	種子島～屋久島以南	×0.6
16a	チョウセンサザエの蓋	7098			
17	ヤコウガイ	17	潮間帶～水深30m・岩礁	種子島～屋久島以南	×0.5
17a	ヤコウガイの蓋	74			
アマガイモドキ科					
18	アマガイモドキ	1	海底洞窟内	奄美諸島以南	×0.8
アマオブネ科					
19	アマオブネ	2111	潮間帶岩礁	紀伊半島以南	×0.8
リュウキュウアマガイ					
20	1 岩礁域潮間帶上部	1	岩礁域潮間帶上部	トカラ列島以南	×0.8
21	ヒメシダタミアマオブネ	1	潮下帶上部・岩礁	奄美諸島以南	×0.6
22	フトジアマガイ	3	潮下帶上部・岩礁	紀伊半島以南	×0.8
23	マルアマオブネ	10	内湾的な岩礁地潮間帶	屋久島以南	×0.8
24	オオマルアマオブネ	2	潮間帶岩礁	奄美諸島以南	×0.8
ムカデガイ科					
25	リュウキュウヘビガイ	3	潮下帶潮下帶・サンゴ礁	奄美諸島以南	×0.6
26	フタモチヘビガイ	4	潮下帶潮帶	紀伊半島以南	×0.8
オニノツノガイ科					
27	オオシマカニモリ	6	潮間帶岩礁	房総半島以南	×0.5
28	カニモリガイ	1	潮下帶～水深62m、砂底	房総半島以南	×0.7
29	オニノツノガイ	3	サンゴ礁の砂中	大隅諸島以南	×0.5
スイショウガイ科					
30	オハグロガイ	1158	浅海の砂礫底	紀伊半島以南	×0.7
31	マガキガイ	942	サンゴ礁の潮だまり	房総半島以南	×0.7
32	スイショウガイ	192	サンゴ礁の砂底	房総半島以南	×0.7
33	ゴホラ	2	水深約40m	奄美諸島以南	×0.5
34	クモガイ	26	サンゴ礁の間の砂地	紀伊半島以南	×0.3
35	スイジガイ	36	サンゴ礁・岩礁の砂底	紀伊半島以南	×0.4
スズメガイ科					
36	スズメガイ	1	潮間帶岩礁	房総半島以南	×0.5
タマガイ科					
37	マンジュウガイ	1	潮下帶水深70mの細砂底	紀伊半島以南	×0.8
タカラガイ科					
38	ハナビラカラ	5	潮間帶砂礫底	房総半島以南	×0.5
39	キイロダカラ	1	潮間帶砂礫底	房総半島以南	×0.5
40	ハナマルユキ	113	潮間帶岩礁	房総半島以南	×0.8
41	ホシキヌタ	5	潮間帶～水深150mの岩礁底	房総半島以南	×0.8
42	ヤクシマダカラ	15	潮間帶～水深10mの岩礁	房総半島以南	×0.7
43	ホシダカラ	4	潮間帶～水深40mの岩礁	三浦半島	×0.5
44	ハチショウダカラ	12	潮間帶～水深10mの岩礁	三浦半島	×0.5

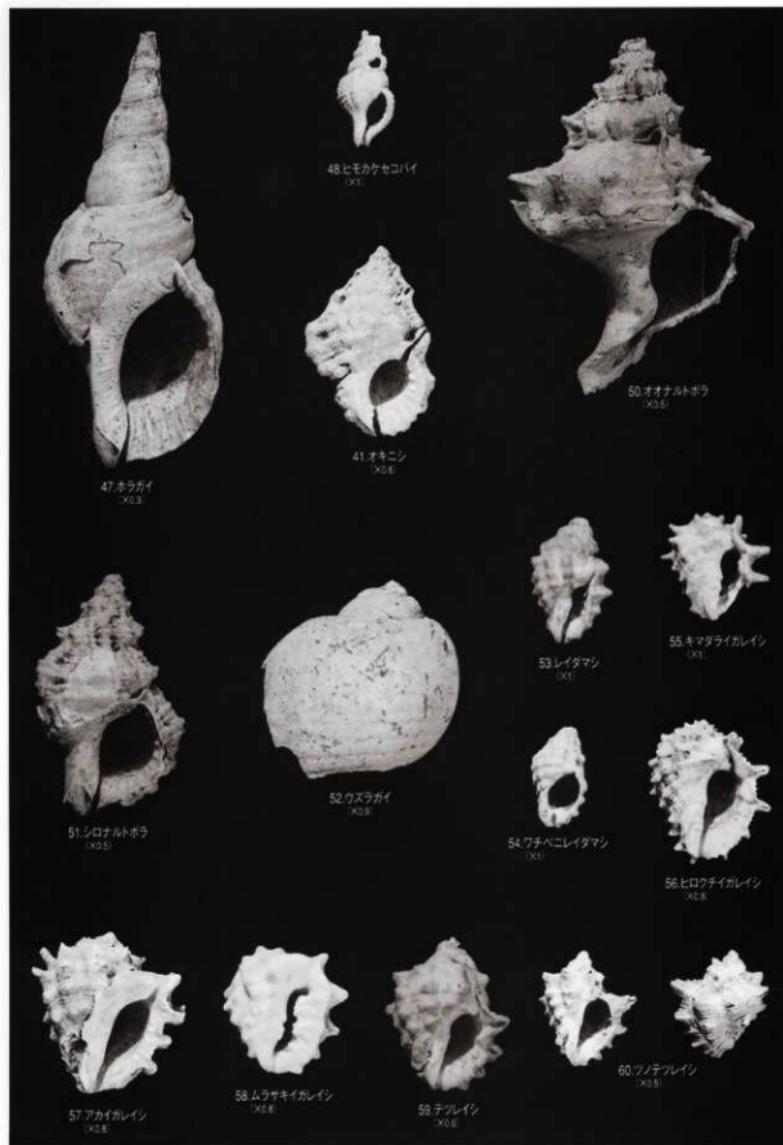
番号	和名(科名)	出土数	生息環境	生息分布	写真の倍率
フジツガイ科					
45	ククリボラ	7	水深50~150m水深の砂礫底	房総半島以南	×0.5
46	ミツカドボラ	1	潮間帯	紀伊半島以南	×0.8
47	ホラガイ	32	潮間帯~水深50mの岩礁	紀伊半島以南	×0.3
セコパイ科					
48	ヒモカケセコパイ	1	潮間帯	紀伊半島以南	×0.5
オキニシ科					
49	オキニシ	27	潮間帯~水深20mの岩礁	房総半島以南	×0.6
50	オオナルトボラ	6	潮間帯下部の岩礁	房総半島以南	×0.5
51	シロナルトボラ	1	潮間帯下部の岩礁	房総半島以南	×0.5
ヤツシロガイ科					
52	ウズラガイ	1	潮間帯~水深50mの岩礁	房総半島以南	×0.9
アクガイ科					
53	レイダマシ	6	波あたりの強い潮間帯	伊豆諸島以南	×0.5
54	クチベニレイシダマシ	1	潮間帯~潮下帯	紀伊半島以南	×0.5
55	キマダライガレイシ	1	潮間帯~潮下帯	伊豆諸島以南	×0.5
56	ヒロクチイガレイシ	1	潮間帯~潮下帯	伊豆諸島以南	×0.8
57	アカイガレイシ	5	潮間帯~潮下帯	紀伊半島以南	×0.8
58	ムラサキイガレイシ	1	リーフエッジの岩盤上	紀伊半島以南	×0.5
59	テツヅレイシ	108	潮間帯	伊豆諸島以南	×0.6
60	ツノテツレイシ	2	潮間帯	伊豆諸島以南	×0.5
61	ツノレイシ	10	潮間帯	紀伊半島以南	×0.7
62	ツツボラ	34	波あたりの強い潮間帯	紀伊半島以南	×0.6
63	ホソスジツツボラ	3	波あたりの強い潮間帯	伊豆諸島以南	×0.6
64	ガンゼキボラ	5	潮間帯~潮下帯岩礁	房総半島以南	×0.6
65	シラクモガイ	51	リーフエッジの岩盤上	種子島・屋久島以南	×0.6
エゾバイ科					
66	シマベッコウバイ	6	潮間帯	伊豆諸島以南	×0.4
オリレイヨフバイ科					
67	ヒメヨフバイ	2	潮間帯	駿河湾以南	×0.7
イトマキボラ科					
68	リュウキュウツノマタ	5	潮間帯	紀伊半島以南	×0.6
69	チトセボラ	1	潮間帯~水深30m岩礁底	伊豆諸島以南	×0.7
70	ツノキガイ	2	潮間帯	伊豆諸島以南	×0.8
71	イトマキボラ	42	潮間帯	紀伊半島以南	×0.5
マクラガイ科					
72	ジュドウマクラ	4	潮間帯~水深20m砂底	紀伊半島以南	×0.8
フデガイ科					
73	ニシキノキバフデ	1	潮間帯	紀伊半島以南	×0.8
オニコブシ科					
74	オニコブシ	107	潮間帯~水深5m水深の岩礁	紀伊半島以南	×0.6
75	オニコブシ	9	潮間帯~水深5mの岩礁	奄美諸島以南	×0.5
イモガイ科					
76	アラレイモ	29	潮間帯~水深20mの岩礁	紀伊半島以南	×0.7
77	サヤガタイモ	27	潮間帯~水深10mの砂底	福島県・山口県	×1.0
78	イボシマトイモ	13	潮間帯~水深20mの岩礁	房総半島以南	×0.7
79	キヌカツギイモ	16	潮間帯~水深20mの岩礁	房総半島以南	×0.8
80	マダライモ	52	潮間帯~水深20mの岩礁	伊豆諸島以南	×0.9
81	コマダライモ	2	潮間帯~水深20mの岩礁	紀伊半島以南	×0.4
87	タケノコガイ	1	潮間帯~水深10mの岩礁	紀伊半島以南	×0.7
88	リュウキュウタケ	2	潮間帯~水深40mの岩礁	紀伊半島以南	×0.5
斧足類(二枚貝)					
フネガイ科					
89	エガイ	34	潮間帯~水深20mの岩礁	北海道南部以南	×0.8
90	ベニエガイ	2	潮間帯~水深20mの岩礁	紀伊半島以南	×0.7
91	オオタカノハ	1	潮間帯~水深5mの岩礁	紀伊半島以南	×0.5
タマガイ科					
92	ソメワケグリ	1	水深3~50m水深の砂泥底	紀伊半島以南	×0.7
イタヤガイ科					
93	リュウキュウオウギ	1	水深20m以後の砂礫底	奄美諸島以南	×0.7

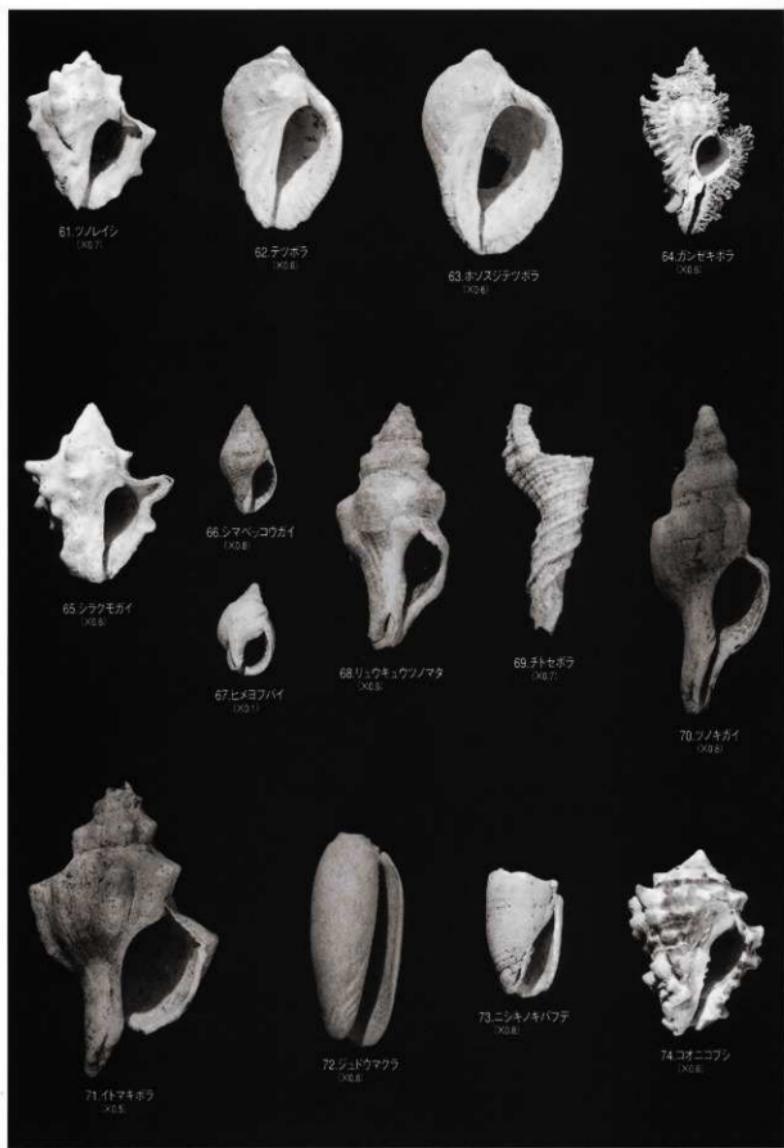
番号	和名(科名)	出土数	生息環境	生息分布	写真の倍率
94	ウミギク科				
94	カバトゲウミギク	3	水深20m以浅	紀伊半島以南	×0.7
95	メンガイ	9	水深30m以浅の岩礁底	紀伊半島以南	×0.5
	イタボガキ科				
96	オハグロガキ	628	潮間帯	紀伊半島以南	×0.7
97	ケガキ	40	潮間帯	岩礁・岸壁	×0.7
98	コケゴロモ	11	潮間帯の岩礁	陸奥湾以南	×0.6
99	コガネガキ	1	水深20m以浅の岩礁底	奄美諸島以南	×0.8
	ツキガイ科				
100	ツキガイ	1	潮間帯～水深20mの砂底	紀伊半島以南	×0.7
	キクザル科				
101	シシガラキクザル	3	潮間帯～水深20mの岩礁	紀伊半島以南	×0.8
102	カネツケキクザル	16	潮間帯～水深20mの岩礁	伊豆諸島以南	×0.7
103	ケイトウガイ	7	潮間帯～水深20mの岩礁	房総半島以南	×0.6
104	ヒレインコ	2	潮間帯～水深20mの岩礁	奄美諸島以南	×0.5
105	ヒトエギク	2	潮間帯～水深20mの岩礁	房総半島以南	×0.6
	ザルガイ科				
106	カワラガイ	12	潮間帯下部のサンゴ礁の間	四国以南	×0.9
	シャコガイ科				
107	ヒメジャコ	24	潮間帯～水深20mの岩礁	紀伊半島以南	×0.4
108	シラナミ	78	潮間帯～水深20mの岩礁	紀伊半島以南	×0.4
109	ヒレジャコ	49	潮間帯～水深20mの岩礁	奄美諸島以南	×0.4
	マルスダレガイ科				
110	ヒメアサリ	13	潮間帯～水深5mの砂礫底	房総半島以南	×0.7
111	アラズジケマン	597	潮間帯～水深20mの砂礫底	奄美諸島以南	×0.7
112	ホソジイナミガイ	3	潮間帯～水深20mの砂礫底	紀伊半島以南	×0.8
113	オノカガミ	1	潮間帯～水深60mの砂底	紀伊半島以南	×0.6
114	サザメガイ	2	潮間帯～水深50mの細砂底	房総半島以南	×0.9
115	スダレハマグリ	1	潮間帯～水深20mの砂底	九州以南	×0.8
116	オオズダレ	1	水深10～100mの砂底	房総半島以南	×0.6
117	ヌノメガイ	1	潮間帯～水深20mの砂底	紀伊半島以南	×0.8
118	アラヌーメ	2	潮間帯～水深20m	紀伊半島以南	×0.6
119	ハマグリ	1	潮間帯～水深20mの細砂底	北海道南部以南	×0.9
	チドリマスオ科				
120	イソハマグリ	5442	潮間帯の粗砂	房総半島以南	
	シオサザナミ科				
121	マスオガイ	15	潮間帯の泥底	紀伊半島以南	×0.6
122	リュウキュウマスオ	222	潮間帯の砂礫底	相模湾以南	×0.6
	頭足類(イカ・タコ)				
123	オウムガイ	3	水深200m	フィリピン近海	×0.7
	淡水産 腹足類				
	アマオブネ科				
124	イシマキガイ	14	川の下流	房総半島以南	×0.8
	淡水産 养足類				
	シジミ科				
125	ヤエヤマヒルギシジミ (陸産)	8	マングローブの生えた汽水域の底	奄美諸島以南	×0.5
	ヤマタニシ科				
126	オオヤマタニシ	1275	落ち葉の下	奄美大島、加計呂麻島、鍋之島	×0.7
	アズキガイ科				
127	オオシマアズキガイ	107	落ち葉、朽木の下	奄美大島、与路島	×1.0
	キセルガイ科				
128	オオシマギセル	1	落ち葉、朽木の下	奄美大島、徳之島	×0.7
129	ヒルグチギセル	153	落ち葉、朽木の下	奄美大島、徳之島	×0.7
	オナジマイマイ科				
130	オキナワスカワマイマイ	1	畑、庭先、道路端	奄美諸島以南	×0.7
131	タメトモマイマイ	442	畑、庭先、道路端	奄美諸島以南	×0.4

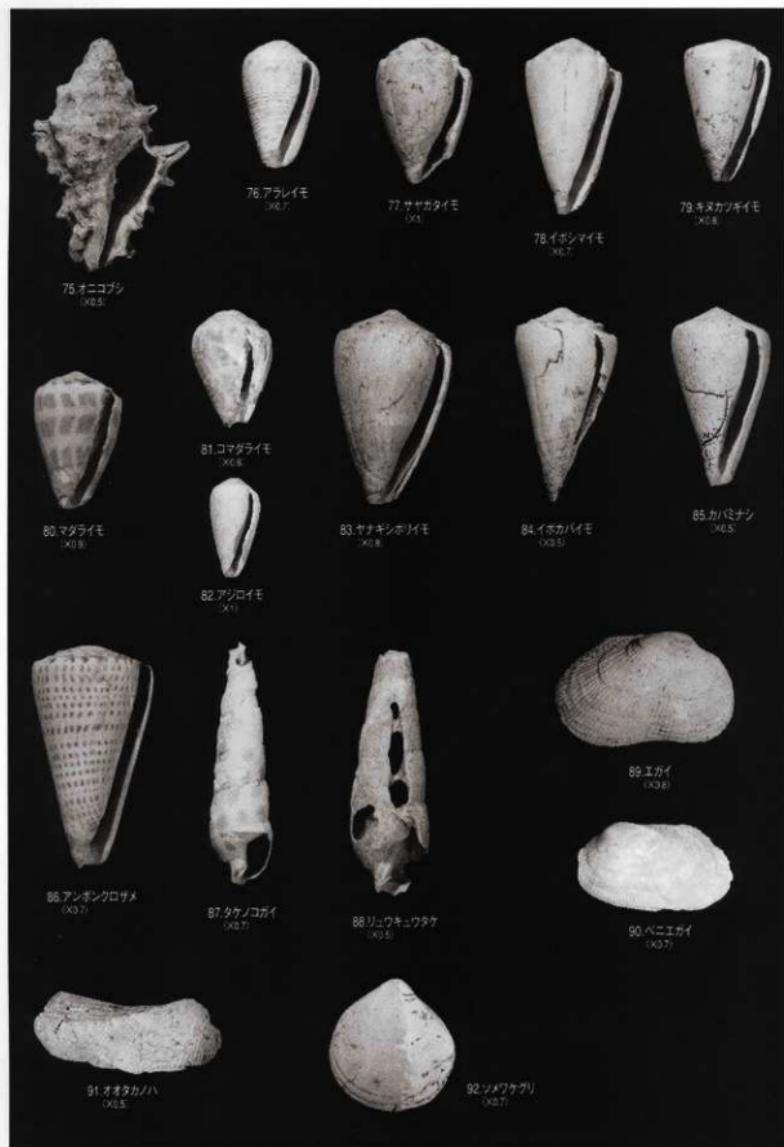


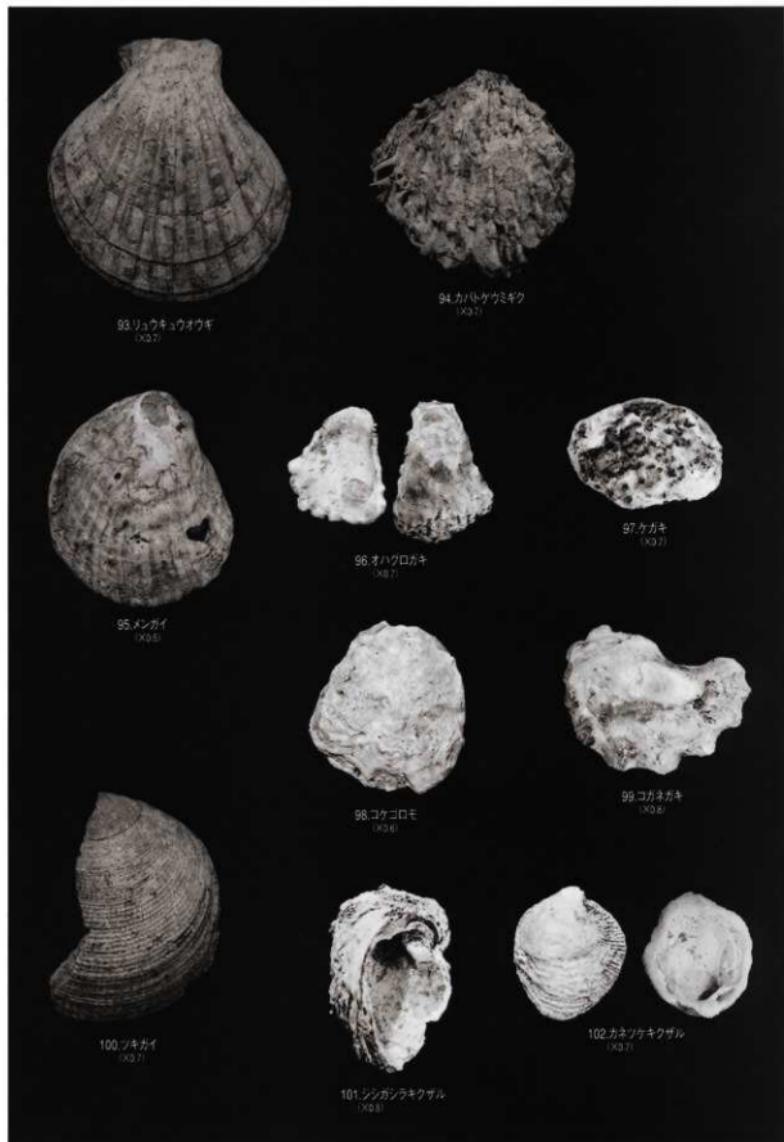




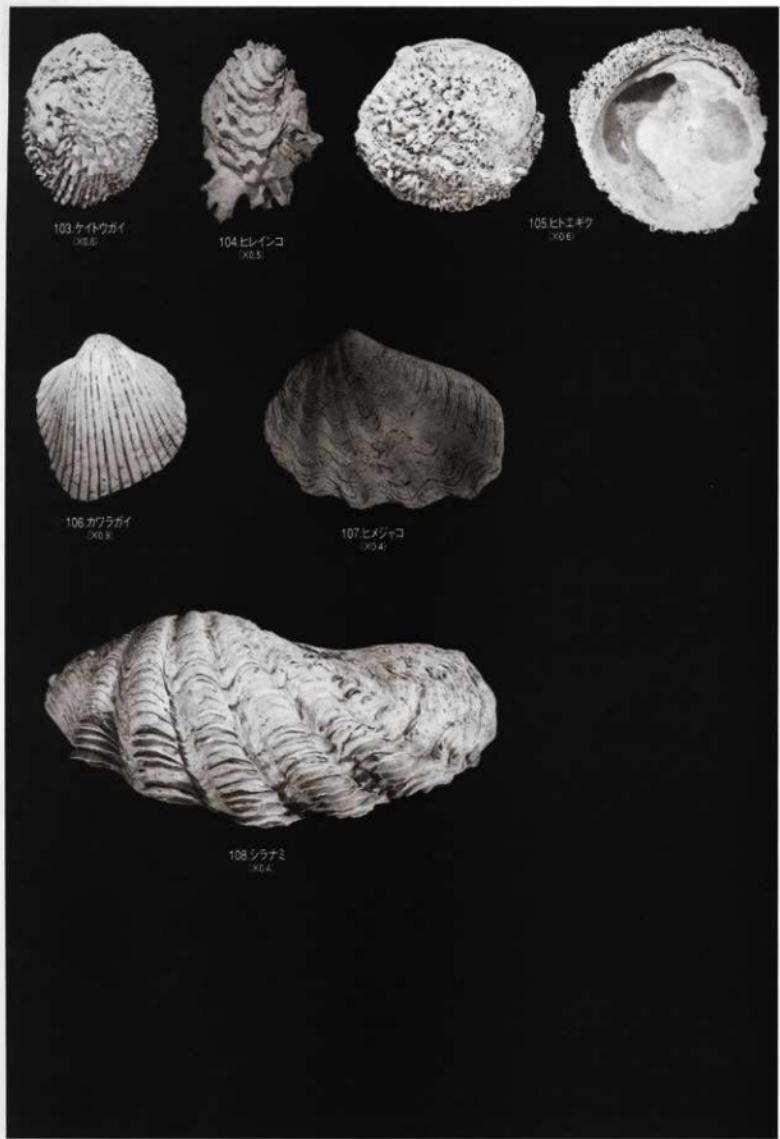


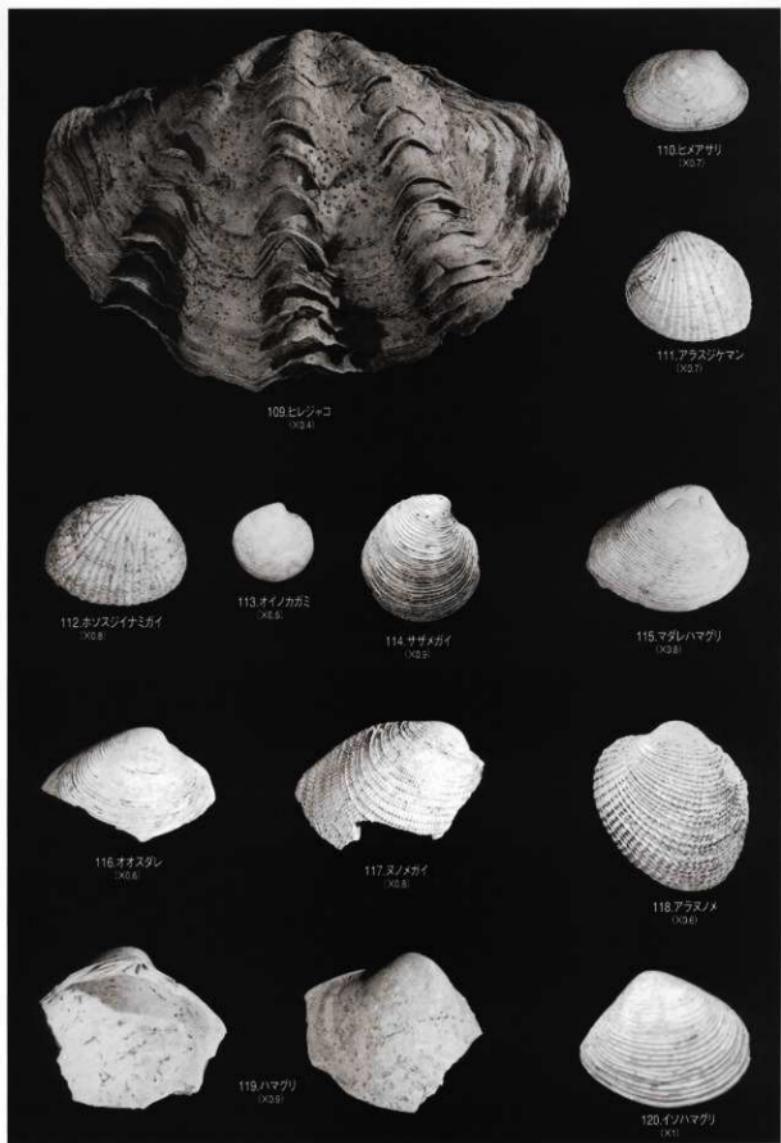






図版38





図版40



ウフタ（Ⅲ）遺跡出土の動物遺体

西中川 駿・小山田 和 央
鹿児島大学獣医学科解剖学教室

1.はじめに

動物遺体の出土した鹿児島県内の縄文、弥生遺跡は81ヶ所あり、そのうち南西諸島からは26ヶ所である。また、奄美大島からは宇宿貝塚、サウチ遺跡など7遺跡からの出土が報告されている。南西諸島から出土した哺乳類遺体は、筆者らの調査ではコウモリ、アマミノクロウサギ、ネズミ類、イヌ、イノシシ、クジラ、イルカおよびジュゴンであり、県本土に比べ極めて少ない動物種である。

ウフタ遺跡は、大島郡龍郷町赤尾木にあり、県営一般過疎基幹農道整備事業のために、龍郷町教育委員会が調査主体となり、県立埋蔵文化財センターの青崎氏の指導のもとに、平成7年10月～11月まで調査をし、弥生相当期の貝塚と石積み竪穴住居1基が発見された遺跡である。依頼された資料は、発掘後、当教室に持ち込まれたものである。ここでは主に哺乳類についてその概要を報告するが、本遺跡で最も多い魚類については、専門家の同定をお願いしたい。

2.出土動物種と出土量

本遺跡から出土した動物遺体は、哺乳類、爬虫類および魚類であり、総重量7285.8gで、魚類が3618.9gで最も多く、全体の49.7%を占め、次いで哺乳類の2882.5gで、爬虫類は784.4gである。発掘区画別および動物別出土重量は、表1に示した。区画別では土坑区が最も多く2615.6gで、次いで不明区画（カードなし）、C区、B区の順であるe哺乳類の遺体はイノシシ、シカ、イヌおよびクジラのもので、イノシシが2518.0gで最も多く、全体の87%を占める。爬虫類はウミカメ類で、魚類はブダイ、フエフキダイ、ベラ、ハリセンボン、エイ、サメ類であるが、詳細は専門家にお願いしたい。

3.動物別出土骨の概要

哺乳類

1)イノシシ（図版1の1～9、14～19、35～48、図版2の1～9参照）

イノシシは全区画から出土しており、本遺跡の主要遺物である。各区画からの出土量は表1に示したように、土坑区が733.5gと最も多い。

骨の種類が同定できた全区画の出土骨を骨格別にみると、頭蓋骨（歯を含む）76、胴骨18、前肢骨78、後肢骨78、合計250個の骨片である。頭蓋の中には遊離した歯が多く55点あり、胴骨は第一頸椎7個で、他は少ない。前肢骨では上腕骨22（左側13、右側9、以下同じ）、尺骨16（7、9）、肩甲骨12（8、4）、桡骨9（6、3）個などで、肢端の骨は少ない。後肢骨は脛骨23（16、7）、大腿骨14（8、6）、踵骨13（7、6）個などである。上腕骨の数から少なくとも13個体以上のものである。骨の大きさはほぼ完全な左第三中手骨で最大長64.0mm、左第二中手骨で42.8mmであり、他のすべての骨も現生のリュウキュウイノシシとほぼ同じ大きさであ

る。A-6貝2層から出土した脛骨の近位部に人工的に孔を開けられたものも出土している(図版1の6参照)。

2) シカ (図版2の20~22参照)

奄美諸島からのシカの出土例は、これまでの調査では全くみられず、初めてである。C区から左中足骨、土坑区から第三手根骨、左中心第四足根骨、カーダルしから右中心第四足根骨が検出されている。中心第四足根骨の幅と径は、31.0, 25.4mmで、第三手根骨のそれらは16.8, 20.5mmである。これらの計測値は、ヤクシカ、マゲシカより大きくキュウシュウジカの雌とほぼ同じ大きさである。

3) イヌ (図版1の20~21参照)

イヌはB区から右上顎犬歯、右下顎第四前臼歯、右第一後臼歯が出土しており、犬歯の全歯長は32.4mmで、後臼歯の歯冠長と幅は17.2と7.2mmであり、これら計測値は現生の柴イヌとほぼ同じ大きさである。

4) クジラ (図版1の23, 24, 参照)

クジラはB区と不明区から検出されているが、頭骨の一部であると推測される。

5) 爬虫類 (図版1の10, 25, 26, 49, 50, 図版2の10, 11参照)

ウミガメ類は土坑区を除くすべての区画から腹甲や背甲が出土しており、ウツタの人々がカメをよく食べていたことがうかがわれる。

6) 魚類 (図版1の11~13, 27~34, 51~56, 図版2の12~19参照)

魚類は本遺跡の出土量の49.7%を占めており、今回は専門家に依頼する時間的余裕がなかつたため、ここでは同定可能な資料について、紹介することにする。それらはブダイ科の前上顎骨、上咽頭骨、下咽頭骨、歯骨など、フエフキダイ科の前上顎骨、ペラ科の下咽頭骨、ハリセシボン科の下顎骨、サメ類の椎骨およびエイ類の尾などである。

4. 考 察

奄美本島の遺跡からの動物遺体については、ケジI遺跡、サウチ遺跡、宇宿貝塚、あやまる第2貝塚などの報告があり、いずれも魚貝類を主体とした遺跡で、哺乳類はイノシシが主体で、イヌ、ケナガネズミなどネズミ類が検出されている。また、クジラ、イルカ類もみられ、あやまる第2貝塚からはジュゴンが出土している。また、徳之島の犬田布貝塚、面撻貝塚からはアマミノクロウサギの骨が検出されている。

本遺跡からは、他の奄美諸島の遺跡と同様に、哺乳類ではイノシシが主体で、シカ、イヌ、クジラは少量である。イノシシの四肢骨は割断されていることから、骨髓食のあったことが想像され、イノシシは本遺跡を造した人々の貴重な蛋白源であったことが推測される。骨の形状は、現生のリュキュウイノシシとよく似て小型である。また、胴骨は少なく四肢骨が多いことから、解体の場所が異なっていたことが考えられる。一方、脛骨などに孔を開け、鉛などに使用していた考えられる骨製品が出土しており、当時の人々の漁撈方法を示唆するに貴重な資料である。

シカの出土は、奄美諸島では極めて貴重な出土である。これまで犬田布貝塚からシカの骨角器が1点検出されているが、これは移入されたものと推測されている。本遺跡出土のシカは、中足

骨、足根骨など4点が出土しており、貴重な資料である。トカラ海峡を境に奄美諸島では、現在シカは生息しておらず、今までの発掘調査では確認されていなかった。本遺跡出土のシカが、当時の人々によって奄美で狩猟されたのか、県本土から持ち込まれたのかはわからないが、奄美諸島からは初めての出土であり、貴重な資料である。

イヌは縄文早期から狩猟の伴侶として飼われていたと言われ、宇宿貝塚、面網貝塚、犬田布貝塚などからも沢山の骨が出土している。本遺跡のイヌは、出土量は少ないが、他の遺跡のものと同様に小型犬の犬歯と臼歯であり、おそらく体高40cm以下で、現生の柴イヌ程度の大きさのものであったことが想像される。

その他の動物としてクジラがあるが、出土量は少ない。ウミガメは多くの区画から検出されており、当時の人々に食されていたのであろう。魚類は全出土量の49.7%を占めており、当然のことながらウフタ遺跡を造った人々の主な蛋白源であり、狩猟や漁撈を中心に生活していたことがわかる。魚類は宇宿貝塚やあやまる第2貝塚などと同様に、南西諸島に生息するブダイ、フエフキダイ、ハリセンボン、ベラ、サメ類であり、その他沢山の種類がある。

5.まとめ

大島郡龍郷町ウフタ遺跡出土の動物遺体（弥生時代相当）について調査した。

1. 出土した動物遺体は、哺乳類、爬虫類および魚類であり、総重量7285.8gで、そのうち魚類が3618.98(49.7%)である。
2. 哺乳類遺体は、イノシシ、シカ、イヌおよびクジラのものであり、イノシシが2518.0gで最も多く、他は少ない。イノシシの骨の形状は、現生のリュウキュウイノシシとよく似ており小型である。シカの出土例は奄美諸島では、初めてであり、当時この地に生息していたのか、当時の人々により持ち込まれたのか興味深いものがある。イヌは犬歯と臼歯が検出されているが、小型犬に属する。
3. 爬虫類はウミガメであり、背、腹甲が出土している。魚類はブダイ、フエフキダイ、ベラ、ハリセンボン、エイ、サメ類の前上顎骨、上咽頭骨、下咽頭骨、歯骨、椎骨などである。

参考文献

1. 笠利町教育委員会：サウチ遺跡、pp.65-66 (1978)
2. 笠利町教育委員会：宇宿貝塚、pp.95-96 (1979)
3. 笠利町教育委員会：あやまる第2貝塚、pp.62-65 (1984)
4. 金子浩昌：縄文時代の狩猟、漁撈、歴史公論、2, 67-71 (1979)
5. 伊仙町教育委員会：犬田布貝塚、pp.74-81 (1984)
6. 西中川駿他：鹿児島の縄文、弥生遺跡出土の自然遺物、鹿児島考古、33, 1-13 (1999)

表1 ウフタ遺跡動物遺体の動物別・区画別出土量

動物種 区画	哺乳類				爬虫類	魚類	(g) 区別出土量
	イノシシ	シカ	イヌ	クジラ			
A	326.0				30.3	164.3	520.6
B	323.4		5.3	69.2	55.4	552.7	1006.0
C	461.0	2.5			348.7	369.6	1181.8
D	108.0				24.7	54.7	187.4
土坑	733.5	9.7				1870.0	2613.2
住居	47.7				1.4	82.5	131.6
カードなし	518.4	6.4		255.1	323.9	525.1	1628.9
動物別出土量	2518.0	18.6	5.3	324.3	784.4	3618.9	7269.5

図版1

A区

1~9 (イノシシ)、10 (ウミガメ)、11~13 (魚類)

- 1、左下顎骨 2、右下顎骨 3、右下顎犬歯 4、下顎骨(切歎部) 5、右尺骨 6、右脛骨(人工孔あり)
 7、右踵骨 8、左踵骨 9、左第三中足骨 10、背甲 11~12サメ類(椎骨) 13、ベラ科(下咽頭骨)

B区

14~19 (イノシシ)、20~22 (イヌ)、23~24 (クジラ)、25~26 (ウミガメ)、27~34 (魚類)

- 14、第七頸椎 15、右下顎犬歯 16、左橈骨 17、左尺骨 18、左踵骨 19、左大趾骨 20、右下顎犬歯 21、右下顎第一後臼歯 22、右下顎第三後臼歯 23~24、頭蓋片 25~26、腹甲 27~29、サメ(椎骨) 30、マグロ類(椎骨) 31、ハリセンボン科(下顎) 32、ブダイ科(下咽頭骨) 33~34、ベラ科(下咽頭骨)

C区・D区

35~48 (イノシシ)、49~50 (ウミガメ)、51~56 (魚類)

- 35、上顎犬歯 36、下顎犬歯 37、第一頸椎 38、仙椎 39、左肩甲骨 40、右上腕骨 41、右尺骨 42、左寛骨 43、右踵骨 44、左踵骨 45、左踵骨 46、右距骨 47、右距骨 48、蹠骨 49、縁甲 50、指骨
 51~52、サメ類(椎骨) 53、タイ科(椎骨) 54、ベラ科(下咽頭骨) 55、フエフキダイ科(右前上腕骨)
 56、エイ類(尾)

図版2

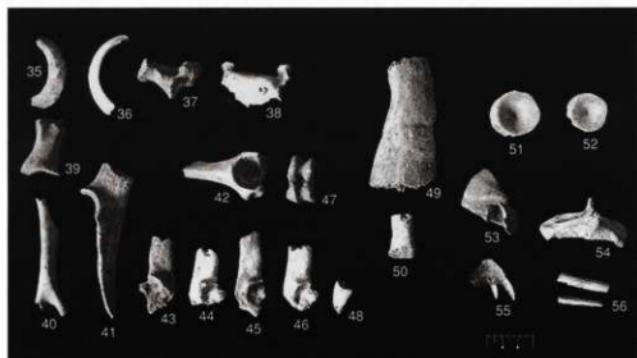
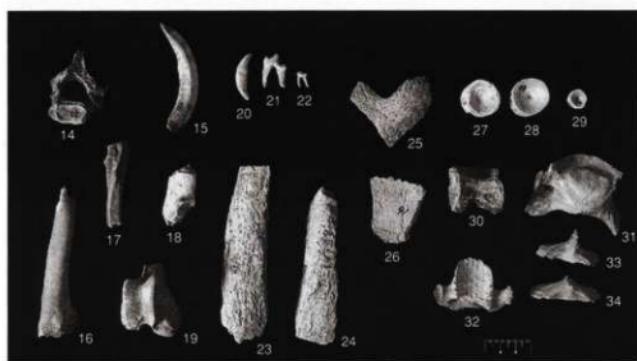
土坑区

1~9 (イノシシ)、10~11 (ウミガメ)、12~19 (魚類)

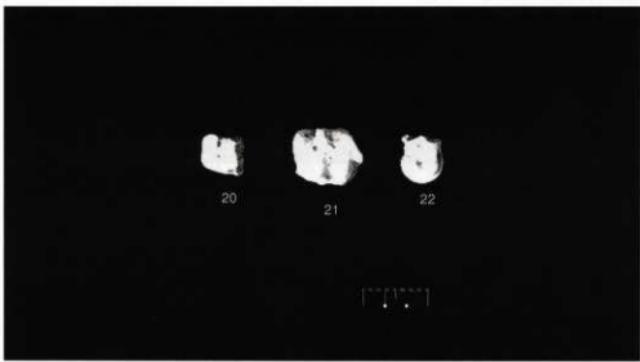
- 1、右下顎骨 2、右下顎第三後臼歯 3、右踵骨 4、左踵骨 5、左第四足根骨 6、右第三足根骨 7、左第二趾基節骨 8、左第三趾中節骨 9、左第四趾末節骨 10~11、背甲 12、ブダイ科(左前上顎骨) 13、ブダイ科(前上顎骨) 14、ブダイ科(前上顎骨) 15~16、ブダイ科(上咽頭骨) 17、ブダイ科(下咽頭骨)
 18、ハリセンボン科(下顎) 19、ベラ科(下咽頭骨)

20~24 (シカ)

- 20、左第三手根骨 21、左中心第四足根骨 22、左中足骨



図版42





故 田畠 米秀教育長

龍郷町教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

ウコタⅢ 遺跡

発行 2002年3月

編集 龍郷町教育委員会
〒894-0104 鹿児島県大島郡龍郷町浦110
TEL (0997) 62-3111

印刷 株式会社 トライ社
〒892-0834 鹿児島市南林寺町12-6
TEL (099) 226-0815



鹿児島県大山町船原町